

^{なが} ^{おき} ^こ ^{ふん} ^{ぐん}
長 沖 古 墳 群 XVI

— 久保地区 E 地点 —

(長沖62・192・205・206・207・208号墳)

2017

本庄市教育委員会

序

埼玉県北西部にある本庄市は、古くは多数の古墳が造られた古墳時代の一中心地として、盛んな交流の舞台となった地であります。本庄市内では、現在 600 基を優に超える古墳を数え上げることができ、それらの古墳が、旭・小島古墳群、塚合古墳群、東・西五十子古墳群、塚本山古墳群、生野山古墳群、長沖古墳群、秋山古墳群などの多数の古墳群を形作っています。中世には、武蔵七党の一つ児玉党の本拠地として知られ、また五十子陣を核とする政治的、軍事的な要地となりました。江戸時代には、中山道本庄宿を中心に文物の交流の拠点としてにぎわい、以後養蚕と製糸の中心地として栄えました。また、『群書類従』を編んだ盲目の国学者塙保己一の生誕地としてもつとに知られるところです。

この度児玉郡市広域消防本部児玉分署が移転することとなり、今回の調査範囲を含む土地が移転先に選ばれました。本報告書は、その移転先である長沖古墳群久保地区E地点の調査成果をまとめたものです。本書の内容が示すように、今回の調査では、6基の円墳とより新しい時期の土坑などを調査しました。古墳は、周溝のみが残る状態でしたが、円筒埴輪だけでなく、人物や馬などをかたどった形象埴輪などが出土しています。長沖古墳群の調査としては、近年では最も広い範囲に及ぶ発掘調査でもあり、今後長沖古墳群だけでなく、本庄市はもとより児玉郡市の古墳時代を考える上で、重要な資料を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財に対する理解と郷土の歴史についての関心をより一層深めるための資料として、多くの方々にご活用頂ければ幸いに存じます。

末筆ながら、発掘調査、報告書の作成にあたって、多大なる御協力を賜った児玉郡市広域市町村圏組合をはじめ、関係諸機関、各位に対し、心から御礼申し上げる次第です。

平成 29 年 3 月

本庄市教育委員会
教育長 勝 山 勉

例 言

1. 本報告書は、埼玉県本庄市児玉町長沖字久保 290 番 1・7、291 番 1・5 および 293 番 1 に所在する、長沖古墳群久保地区 E 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、児玉郡市広域消防本部児玉分署庁舎建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成 28 年 1 月 12 日～同年 2 月 19 日の期間に本庄市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の経費は、児玉郡市広域市町村圏組合が負担した。
4. 発掘調査担当者は、本庄市教育委員会文化財保護課の太田博之と松本 完があたり、現地調査には株式会社測研文化財研究室の大塚昌彦が専従した。
5. 整理作業及び報告書刊行にかかる業務は、株式会社測研に委託し、同社文化財研究室が実施した。
6. 本書の執筆は、第 1 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 5 章を株式会社パレオ・ラボ、それ以外を大塚が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は、大塚が、遺物写真は石井克己が撮影した。
8. 本書の編集は、大塚が行った。図版編集は松井誠治・石井なみ枝が行った。
遺物整理は、石井なみ枝・黒田紀子が行った。
9. 自然科学分析（火山灰分析）は、株式会社パレオ・ラボが行った。
10. 本書に掲載された出土遺物、遺構・遺物の実測図ならびに写真等の資料は掲載以外の資料を含め、本庄市教育委員会において管理・保管している。
11. 発掘調査・整理調査及び報告書刊行に至るまで、以下の方々からご協力・ご指導をいただいた。
石井克己 大熊季広 坂本和俊 菅谷浩之 鈴木徳雄 高橋 敦 高林真人 田口一郎
橋本真紀夫 藤根 久 増田 修 矢作健二
12. 発掘調査及び整理・報告書刊行に関する組織は、以下のとおりである。

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	勝山 勉
事務局		事務局長	稲田 幸也
	文化財保護課	課 長	川上 美恵（平成 27 年度） 杉原 初
		課長補佐兼	
		埋蔵文化財係長	太田 博之
		主 幹	恋河内昭彦
		主 査	松本 完
		主 査	徳山 寿樹
		主 任	的野 善行
		主 事	栗原 秀太（平成 27 年度）

凡 例

1. 遺跡全体図における X・Y 座標値は、世界測地系に基づく。
2. 各遺構における方位は座標北を示す。
3. 遺構図の縮尺は、各図に明示している。
4. 遺構断面図の水準値は海拔を示す。
5. 遺構名称は以下の略号で表記した部分がある。
S K…土坑
6. 遺物の実測図は 1/4 を基本とし、それ以外は各図に明示している。
7. 遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帳』（財）日本色彩研究所監修（1987）を使用した。
8. 本書掲載の遺跡位置図は、本庄市役所発行 1/10,000「本庄市全図（2/3）」、長沖古墳群古墳分布図及び長沖古墳群久保地区 E 地点と周辺発掘調査箇所は、本庄市役所発行 1/2,500「本庄市都市計画図」に加筆したものをを用いた。
9. 国土地理院、昭和 24 年の米軍による空中写真「USA-R511- No.2 写真番号 44」は、本報告書作成の目的で 6 月 1 日に申請し購入したものである。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
第 1 章 発掘調査に至る経緯	1
第 2 章 遺跡の立地と環境	2
第 3 章 長沖古墳群の概要と久保地区 E 地点周辺	3
第 4 章 検出された遺構・遺物	9
第 1 節 古墳時代	9
第 2 節 縄文時代	32
第 3 節 その他	35
第 5 章 自然科学分析	41
第 6 章 まとめ	45
参考文献	
写真図版	
写真図版目次	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	長沖古墳群のスケッチ (明治18年『東京人類學會雜誌』より)……………	1
第2図	埼玉県の地形図……………	2
第3図	長沖古墳群久保地区位置図……………	3
第4図	長沖古墳群古墳分布図 (2016年現在)……………	5
第5図	長沖古墳群久保地区E地点と周辺発掘調査箇所・古墳分布図……………	7
第6図	長沖古墳群久保地区E地点遺跡全体図……………	7
第7図	久保地区C地点・E地点全体図……………	8
第8図	62号墳現状墳丘測量図……………	10
第9図	62号墳南西部周溝平面図及び断面実測図……………	10
第10図	62号墳全体図 (前回調査部分含む)……………	11
第11図	62号墳出土遺物実測図・拓影図 (1)……………	11
第12図	62号墳出土遺物実測図・拓影図 (2)……………	12
第13図	192号墳平面図及び断面実測図 (C地点調査区合成図)……………	13
第14図	192号墳周溝土層断面実測図……………	14
第15図	192号墳出土遺物実測図・拓影図……………	15
第16図	192号墳出土鬚形埴輪実測図 (C地点調査分『長沖古墳群Ⅷ』2008)……………	16
第17図	205号墳平面図及び断面実測図……………	17
第18図	205号墳周溝掘り方実測図……………	18
第19図	205号墳周溝深穴平面図及び断面実測図……………	19
第20図	205号墳出土遺物実測図・拓影図……………	20
第21図	206号墳平面図及び断面実測図……………	21
第22図	206号墳周溝土層断面実測図……………	22
第23図	206号墳出土遺物実測図・拓影図……………	22
第24図	207号墳平面図及び断面実測図……………	23
第25図	207号墳周溝掘り方実測図……………	24
第26図	207号墳出土遺物実測図・拓影図……………	25
第27図	208号墳平面図及び断面実測図……………	26
第28図	皿状遺構平面図及び断面実測図……………	27
第29図	S K 25平面図及び断面実測図……………	28
第30図	弧状遺構平面確認図……………	28
第31図	縄文時代遺構全体図……………	32
第32図	S K 24平面図及び断面実測図……………	32
第33図	S K 24出土遺物実測図・拓影図……………	32
第34図	縄文時代土器実測図・拓影図……………	33
第35図	特殊遺物実測図……………	34
第36図	石器実測図……………	34
第37図	土坑・ピット全体図……………	35
第38図	土坑平面図・断面図及び出土遺物実測図……………	37
第39図	土坑平面図及び断面実測図……………	38
第40図	ピット平面図及び断面実測図……………	38
第41図	製鉄関連遺物実測図……………	39
第42図	近隣表面採集遺物実測図……………	48

表 目 次

第1表	長沖古墳群の調査の概要……………	6	第6表	207号墳埴輪観察表……………	31
第2表	207号墳周溝内出土土器観察表……………	25	第7表	土坑一覧……………	36
第3表	62号墳埴輪観察表……………	29	第8表	ピット一覧……………	38
第4表	192号墳埴輪観察表……………	29	第9表	製鉄関連遺物一覧……………	40
第5表	205号墳埴輪観察表……………	30			

第 1 章 発掘調査に至る経緯

本庄市役所児玉支所の前にある児玉郡市広域消防本部児玉分署庁舎の移転先として、本庄市児玉町長沖字久保 290 番 1・7、291 番 1・5 および 293 番 1 の土地が候補地とされて以降、同地が埋蔵文化財、とくに長沖古墳群（県遺跡番号：54－300）の中心とも言える位置にあることから、当教育委員会と児玉郡市広域市町村圏組合との間で、埋蔵文化財の取り扱いについて慎重な協議が進められた。

因みに同事業予定地に接する南側は、昭和 58 年に都市計画道路環状 1 号線建設に伴い旧児玉町教育委員会による発掘調査が実施され（恋河内 1984）、西側の隣接地は、店舗建設に伴う発掘調査が実施されており（恋河内 2008）、東側の近接地でも住宅建設に伴う発掘調査が行われ（鈴木ほか 2007）、いずれの地点でも古墳周堀が検出されている。また、アメリカ軍が昭和 24 年に撮影した航空写真には、同事業予定地内全域に、墳丘の残存する古墳が群集する様が明瞭に写っている。

消防本部の分署の性格上、相応な面積を要するとともに、緊急時に災害現場へ迅速に到着できる立地、周辺環境などの理由から同地が選定され、建設計画が作成されるとともに、平成 27 年 4 月 8 日付けで、児玉郡市広域市町村圏組合（管理者：吉田信解）より、同事業予定地に関する「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会文書が、当教育委員会に提出された。照会文書を受け、平成 27 年 6 月 10～12・15 日には、当教育委員会により試掘調査が実施された。試掘調査の結果、古墳周堀、土坑などの遺構が確認され、同事業予定地のほぼ全面にわたって古墳が展開することが改めて確認された。

試掘調査の結果に基づき、平成 27 年 6 月 29 日付け本教文第 29 号により「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の回答を行い、協議のあった事業予定地には、埋蔵文化財が所在すること、やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第 94 条第 1 項により「埋蔵文化財発掘の通知」を埼玉県教育委員会宛てに提出することなどを、児玉郡市広域市町村圏組合に通知した。

試掘調査で得られた情報から、改めて児玉郡市広域市町村圏組合との協議が重ねられ、児玉分署庁舎の建屋部分と周辺諸施設および擁壁部分に関しては、建屋の堅牢性などの点で掘削深度を浅くすることは困難であり、やむを得ず事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講じる必要があることで合意した。また、長沖古墳群は埼玉県選定重要遺跡であるため、埼玉県教育委員会とも、同事業予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議したが、同様の結論に達した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）



第 1 図 長沖古墳群のスケッチ（明治 18 年『東京人類學會雑誌』より、2 枚の図版を合成）

第2章 遺跡の立地と環境

本庄市は埼玉県の北西部に位置している。

長沖古墳群は、埼玉県本庄市児玉町長沖に所在する。

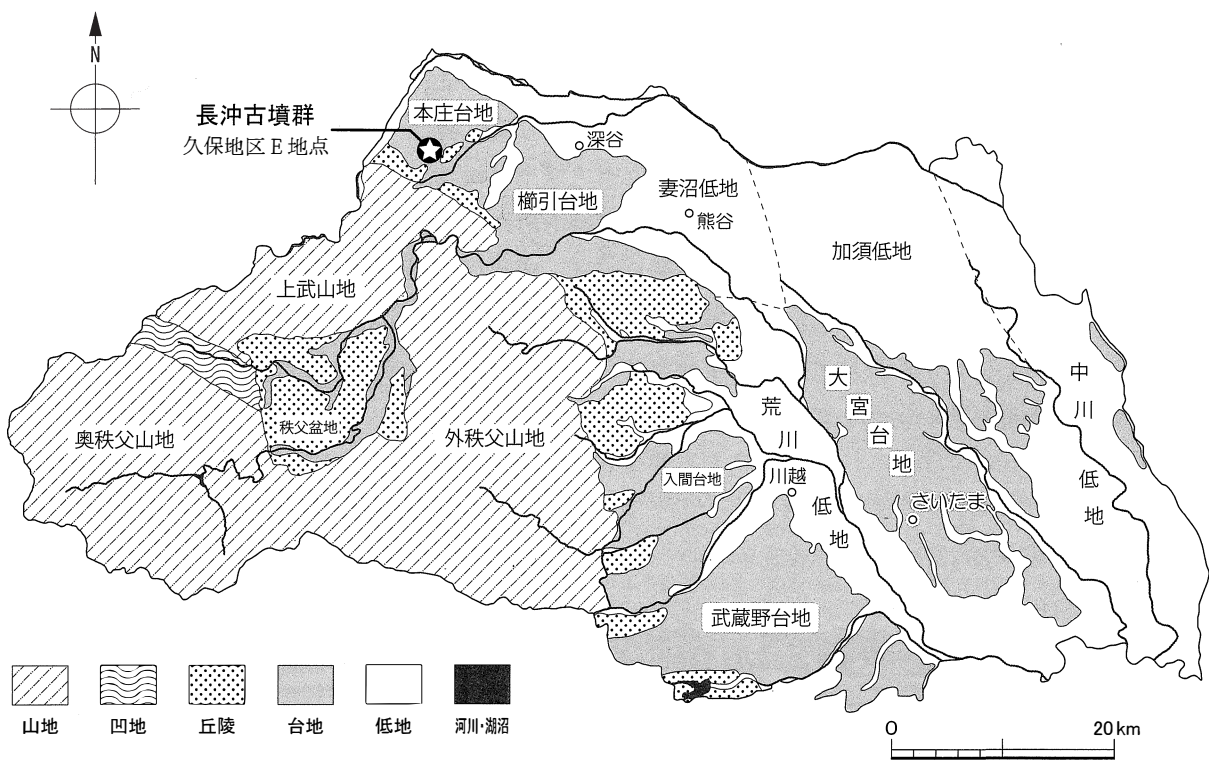
児玉町の町中心部J R八高線児玉駅から、約 800 m南西方向で長沖古墳群の北東端に位置する 30 号墳、31 号墳に到達する。

その所在は、明治 28 年に発行された鳥居龍蔵氏らの「秩父地方に於ける人類學的旅行」(阿部他 1895) の中に、考古学的所見を述べている。「児玉郡児玉町より、三四町も大宮の方に行きたる所にて左側の林中に小高き塚らしきものゝ此處彼處に夥しく存在するを認めぬ。・・・この場所は古來百塚と稱する所にして。塚の数は實に百以上も有らん。」というようにおびただしい古墳の土饅頭が確認されていたのである。(第 1 図)

本庄市の地形は、利根川右岸に広がる低地(妻沼低地)と市街地のある台地とその南方に連なる山地(上武山地)とに明瞭に大別される。長沖古墳群は、北側の本庄台地の中に上武山地から児玉丘陵が北東方向に長く伸びており、その丘陵上から台地に移行した地形に位置している。

長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部とそこから連続する台地上並びに、小山川に形成された河岸段丘上の南斜面にかけて立地している。

長沖古墳群の東西に延びた丘陵地形は、北側に東流する女堀川と南側に東流する小山川により、外形を画された形となっている。



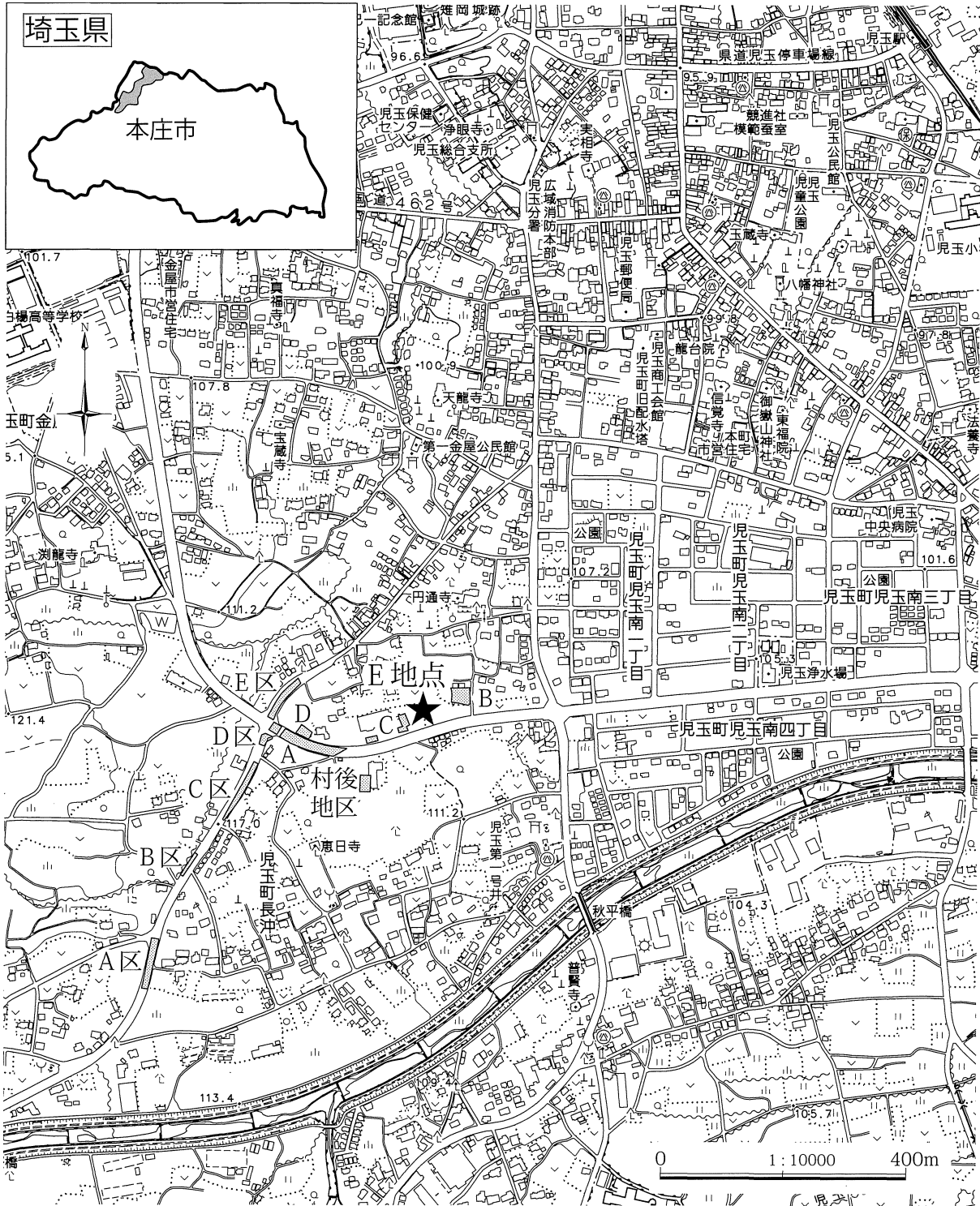
第 2 図 埼玉県の地形図

第3章 長沖古墳群の概要と久保地区E地点周辺

長沖古墳群は、古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。

小山川は北東方向に流下し、同左岸の丘陵から台地にかけて長沖古墳群は分布している。その範囲は東西 1,700 m、南北 500 m に分布している。

前方後円墳 5 基、帆立貝形古墳 1 基、円墳 202 基の合計 208 基が平成 28 年現在で確認されている。



第3図 長沖古墳群久保地区位置図

この古墳群も開発が進み古墳の多くが消滅している。古墳群の規模は、現在確認されたのが 208 基で、削平された古墳などの数はそれと同数位と考えられ、400 基位の規模を推定する。

この古墳群は、南北に貫く谷間を旧児玉・金沢・秩父線 県道 76 号(現 44 号主要地方道秩父児玉線)が通り、大きく 2 分している。西側を高柳支群、東側を長沖支群とよんでいる。

高柳支群の古墳群は、東西方向に伸びる小規模な谷があり、大きく 3 つの支群に分かれる。現在確認されている古墳は、北側は円墳 24 基、中間は前方後円墳 1 基、円墳 17 基、南側は円墳 22 基である。

長沖支群の古墳群の北西端に位置する 66 号墳は第 7 次調査の発掘成果から、66 号墳の東側が東西方向の埋没谷となっており、北側にある谷部へと繋がっているものと考えられ南北方向の小さな支群を形成している。

長沖古墳群久保地区 E 地点周辺の状況を見てみたい。

昭和 58 年(1983)に都市計画道路環状 1 号線建設に伴い、開発事前の発掘調査を見玉町教育委員会が長沖古墳群第 7 次調査(長沖古墳群久保地区 A 地点)として実施している。

発掘調査の結果は、4 基の古墳(158・159・160・66 号墳)、古墳時代前期(五領式)の竪穴式住居跡 3 軒、縄文時代前期(諸磯式)土壌 2 基の他、縄文時代前期(黒浜式)～中期(加曾利 E 式)の埋没谷が発見されている。正式な発掘調査報告書は未刊である。なお、第 7 次調査は埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会で開催された第 17 回遺跡発掘調査報告会発表要旨による内容である。(恋河内 1984)

平成 7 年(1995)～平成 8 年(1996)にかけて県道秩父・児玉線の東側拡幅工事に伴って、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が交差点「金屋南」の南東コーナー部 D 区、北東コーナーから北側にかけて E 区、他 3 か所を調査している。176・177 号墳の 2 基が調査され『長沖古墳群』(1999)として刊行している。

C 区は 176 号墳(旧村後 3 号墳) 1 基の発掘調査で周溝幅 2～3 m、深さ 23cm で弧状の溝を確認するが、遺物は何もなかった。ただ、周溝内から旧石器時代のナイフ形石器 1 点の出土があった。

D 区は「金屋南」交差点の南東部であるが古墳時代前期の竪穴住居跡が 2 軒出土している。

E 区は「金屋南」交差点の北東部で古墳時代前期の竪穴住居跡が 3 軒出土している。

久保地区 B 地点は住宅建設事前の発掘調査で、61 号墳南周溝の一部調査を見玉町遺跡調査会が平成 2 年度に実施している。

久保地区 C 地点は店舗建設事前の発掘調査で、190・191・192 号墳周溝の部分調査を見玉町遺跡調査会が平成 17 年度に実施している。192 号墳からは、円筒埴輪・形象埴輪(翳・鞆・大刀形など)が出土している。

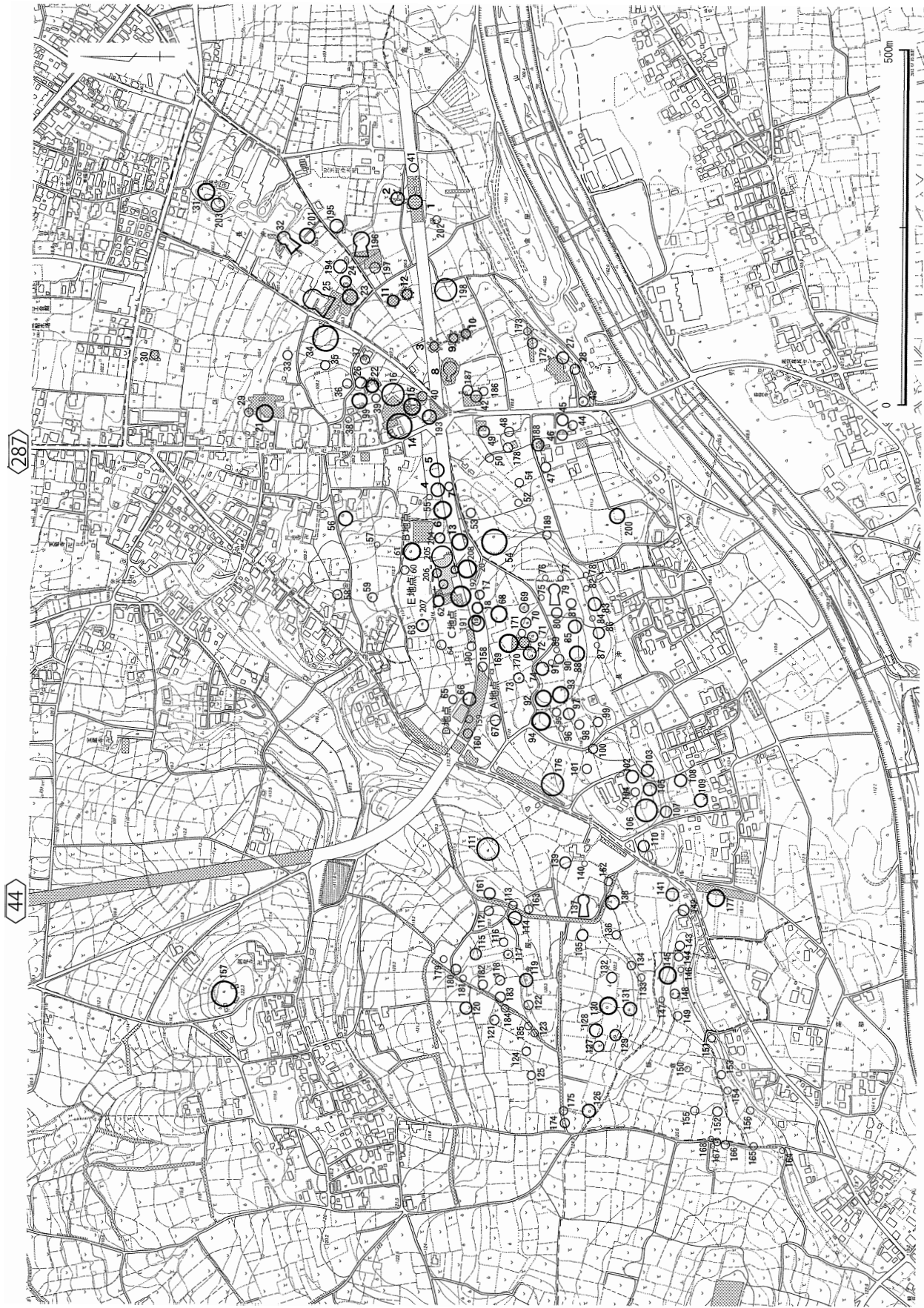
久保地区 D 地点は店舗建設事前の発掘調査で 66 号墳の周溝、古墳時代前期の竪穴住居跡が 2 軒出土している。その他、旧石器時代の旧石器の破片の出土があった。

久保地区 E 地点は、見玉郡市広域消防本部見玉分署庁舎建設工事前の発掘調査である。

長沖古墳群の発掘調査変遷を紹介したい。(第 1 表)

昭和 51 年に見玉町教育委員会が主体となり、1・2・3 号墳の 3 基を第 1 次発掘調査として実施したのを皮切りに、昭和 58 年に第 7 次発掘調査が実施された。平成 28 年現在、本庄市教育委員会が主体となった今回調査した久保地区 E 地点に至るまで、これまでに多くの調査地点の実績が認められる。

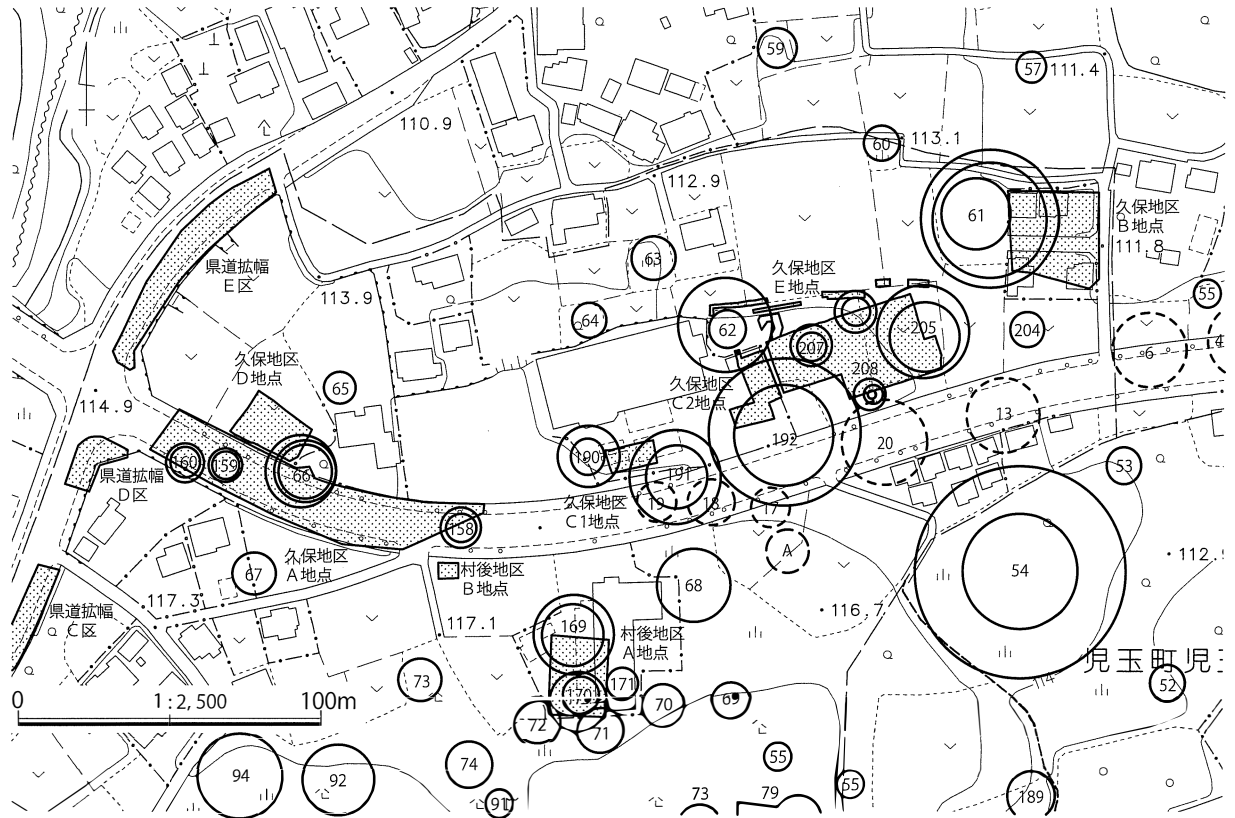
このことから長沖古墳群の調査を理解するため一覧表とした。



第4図 長沖古墳群古墳分布図（2016年現在）

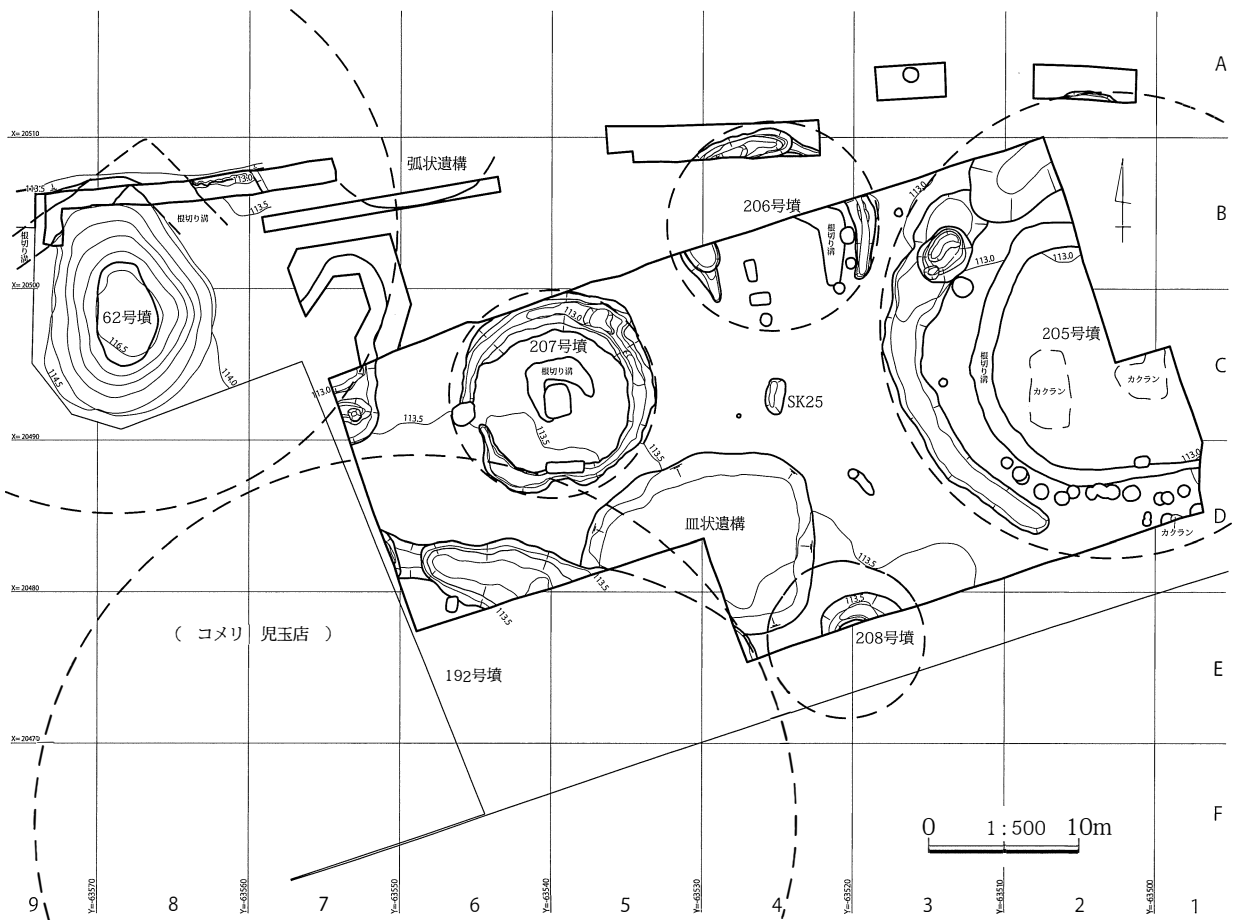
第1表 長沖古墳群の調査の概要

		小字	調査年	調査内容(古墳)	調査機関 刊行機関	報告書名	刊行	号数
I	1次	賀家ノ上	昭和51年2月～3月	1・2・3号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	2次	賀家ノ上 金屋南	昭和51年6月～10月	8・9・10・11・12・14・15・ 16号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	3次	南 御沢	昭和52年6月～10月	22・23・24・25・26号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	4次	江ノ浜 賀家ノ上	昭和53年7月～11月	21・27・28・29号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	5次	御沢 賀家ノ上	昭和54年7月～10月	25・28号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
II	A区	道上	平成7年12月 ～8年5月	177号墳(道上1号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	B区	梅原	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	C区	村後	平成7年12月 ～8年5月	176号墳(村後3号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	D区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	E区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
III		村後A	平成6年7月～9月	71・72・169・170号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群III	2002	第36集
III		飯玉C	平成8年7月～8月	48号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群III	2002	第36集
III		飯玉D	平成10年11月	49号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群III	2002	第36集
IV		賀家ノ上	平成11年8月～10月	42号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群IV	2002	第37集
V		飯玉E	平成15年11月 ～16年1月	188号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群V	2004	第38集
VI		御沢	平成15年7月～10月	32号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群VI	2006	第2集
VII		久保B	平成2年4月～7月	61号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群VII	2007	第14集
VIII		久保C	平成17年9月～11月	190・191・192号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群VIII	2008	第21集
IX		賀家ノ上 中之道B	平成6年10月～12月	172・173・30号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群IX	2011	第24集
X		飯玉B	平成3年11月～12月		児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群X	2011	第41集
XI		金屋南	平成17年4月 ～18年1月	14・15・40号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群XI	2012	第27集
XII		賀家ノ上	平成23年7月	202号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群XII	2014	第36集
XIII		賀家ノ上	平成21年9月 ～23年6月	194・195・196・197・ 201号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群XIII	2014	第39集
XIV		久保D	平成26年5月～6月	66号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群XIV	2014	第42集
XV		長沖	平成25年4月～8月	203号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群XV	2015	第43集
XVI		久保E	平成28年1月～2月	62・192・205・206・207・ 208号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群XVI	2017	第50集
※		村後林	昭和48年	79号墳墳丘測量 (十兵衛塚古墳)	埼玉県立本庄高等学校 考古学部	いぶき	1975	8・9合併号
※		倉林東	平成2年	157号墳	埼玉県教育委員会 さきたま資料館	埼玉県古墳詳細分布 調査報告書	1994	
※	6次	南・久保	—	4・5・6・7・13・20・17・ 18・19号墳	児玉町教育委員会	未刊		
※	7次	久保A	昭和58年5月～9月	66・158・159・160号墳	児玉町教育委員会	未刊		
※ 恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第7次調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会								

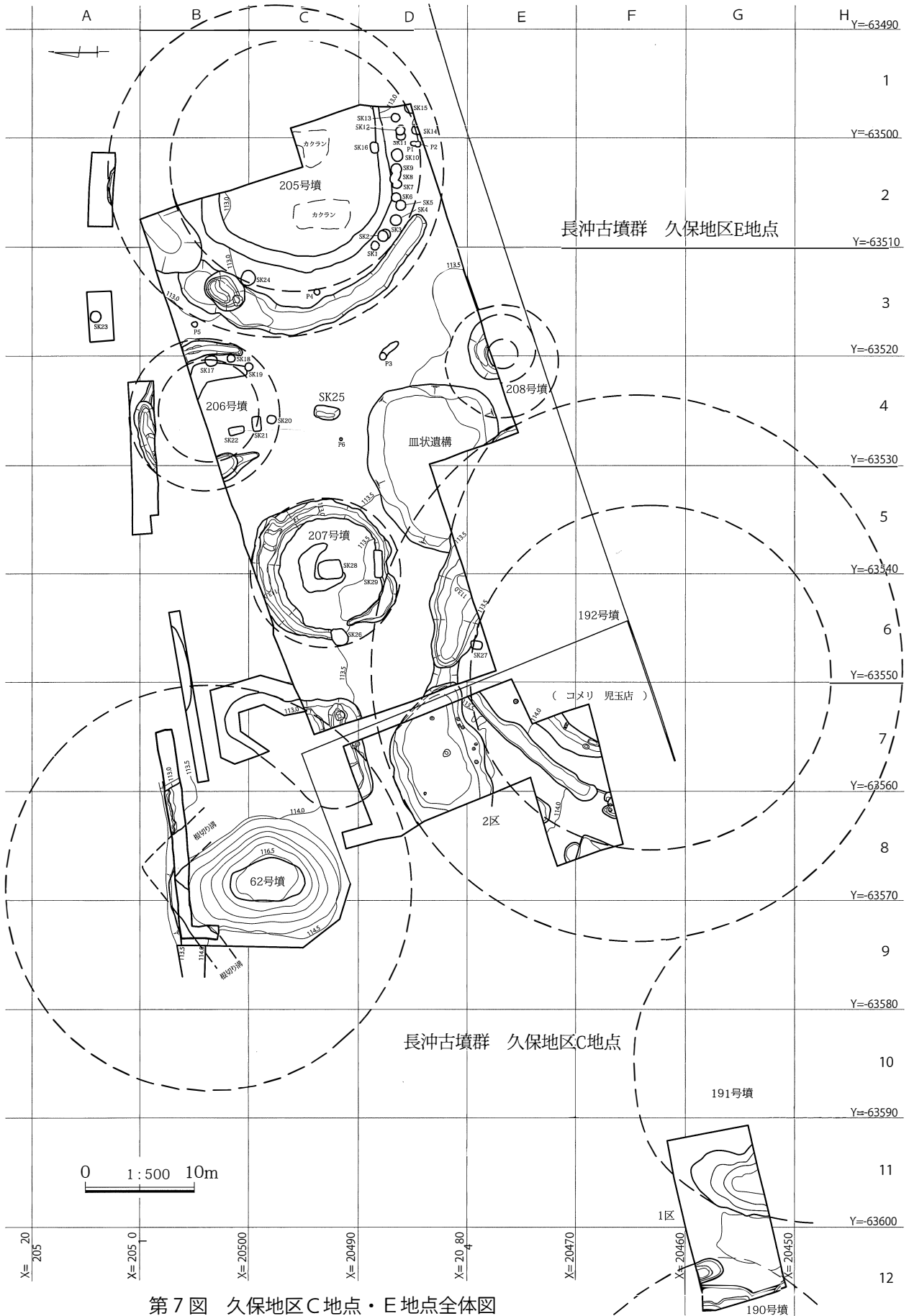


第5図 長沖古墳群久保地区E地点と周辺発掘調査箇所・古墳分布図

○ 破線の古墳は位置・規模不確定



第6図 長沖古墳群久保地区E地点遺跡全体図



第7図 久保地区C地点・E地点全体図

第4章 検出された遺構・遺物

検出された遺構は、古墳時代の古墳6基（62・192・205・206・207・208号墳）の他、皿状遺構1基、土坑1基、弧状遺構1基、その他時期不明の土坑27基、近世・近現代として古墳の墳丘の裾野を削り込んで土地の有効利用している根切り溝などがある。

出土遺物としては、古墳から出土した円筒埴輪をはじめ人物埴輪・馬形埴輪・器材埴輪、土師器坏・甕、須恵器甕などの出土があった。

縄文時代は、縄文時代土坑1基、縄文早期土器、前期植物繊維含有土器・前期後半諸磯式土器・中期土器の出土があった。石器は、打製石斧などの出土があった。

旧石器時代は、久保地区D地点で確認した石器の出土した地層と同じ地層、関東ローム層の始良Tn火山灰（AT層）下層まで調査したが、石器を確認することはできなかった。

その他、近現代の土坑が古墳周溝内部と根切り溝との間に多く検出された。

第1節 古墳時代

古墳時代は、墳丘の残る62号墳をはじめ192号墳・205号墳・206号墳・207号墳・208号墳の計6古墳の調査と皿状遺構の存在、土坑・弧状遺構を次に報告する。

○62号墳（第8～12図 図版4-1～8・13 第3表）

62号墳は、B・C-8・9グリッドに墳丘が残る古墳である。残存規模は、南北16m、東西11m、高さ3.2mである。

北西コーナーと北側を擁壁工事で破損する幅2mのトレンチ調査（北トレンチ）を実施する。

根切り溝を確認することができた。この根切り溝は、主軸がN-35°-EとN-40°-Wの溝がほぼ直角に掘られている。溝は幅2m、断面形「逆台形状」で現状の墳丘の裾より内部にある。古墳の構築面が具体的に認められた2箇所がある。旧地表面黒色土の上に暗褐色土層が認められ、ロームブロックが斑状に混入しており、これは盛り土である。

旧地表及び古墳構築基盤の標高は113.8m～114.05mである。

畑作により出た石を、墳丘部に寄せ集めていたことで墳丘は残されている。

なお、この墳丘には横穴式石室が残されているものとする。

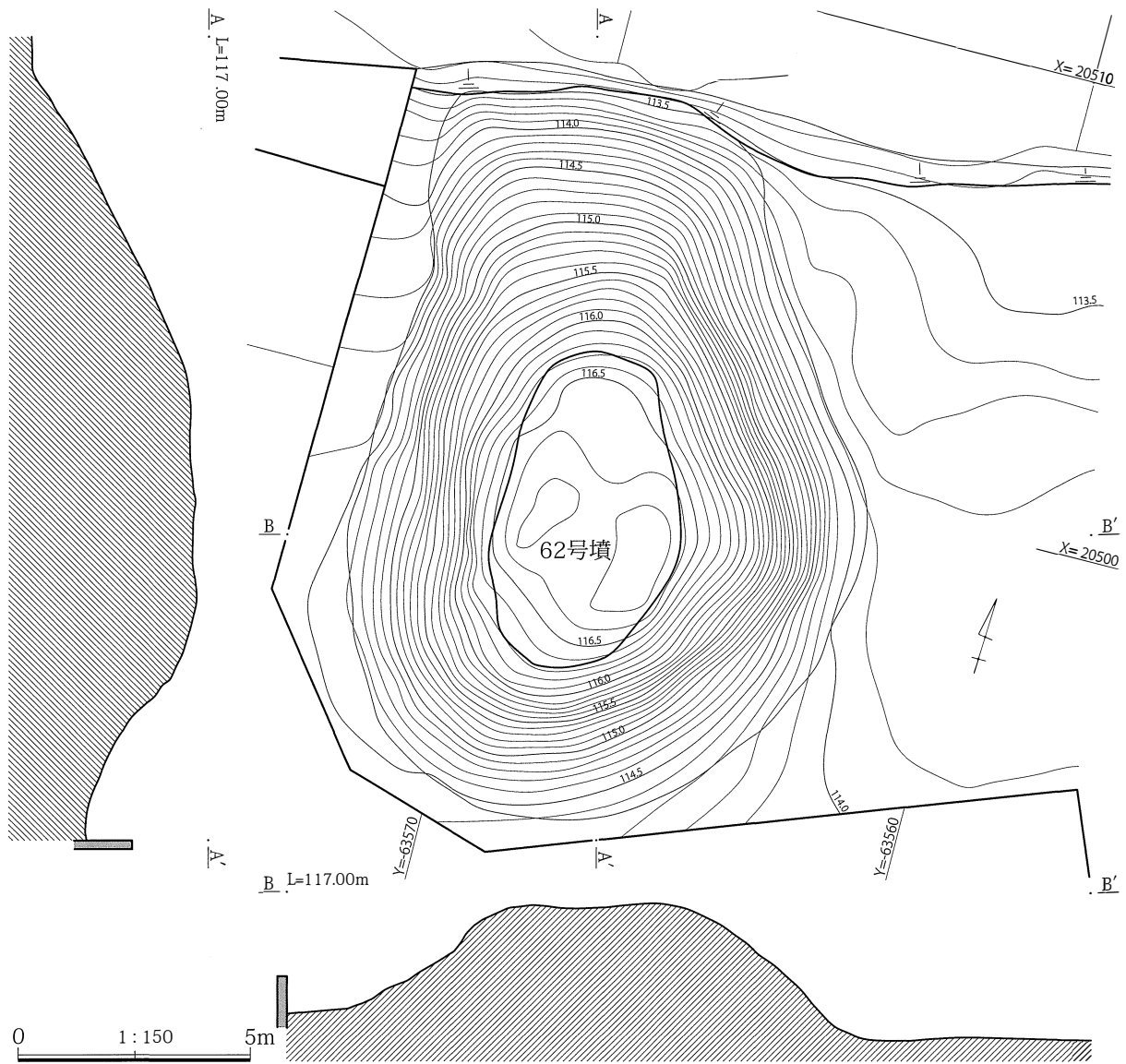
また、調査区北西部に性格の不明な窪地が所在するが、この箇所は2つの溝が掘られており、東西方向の溝が2つ南北に接して所在している。周溝内の覆土に浅間B軽石層の堆積が認められる。

調査最終日に確認調査を行ったところ62号墳の南東周溝であることが判明した。

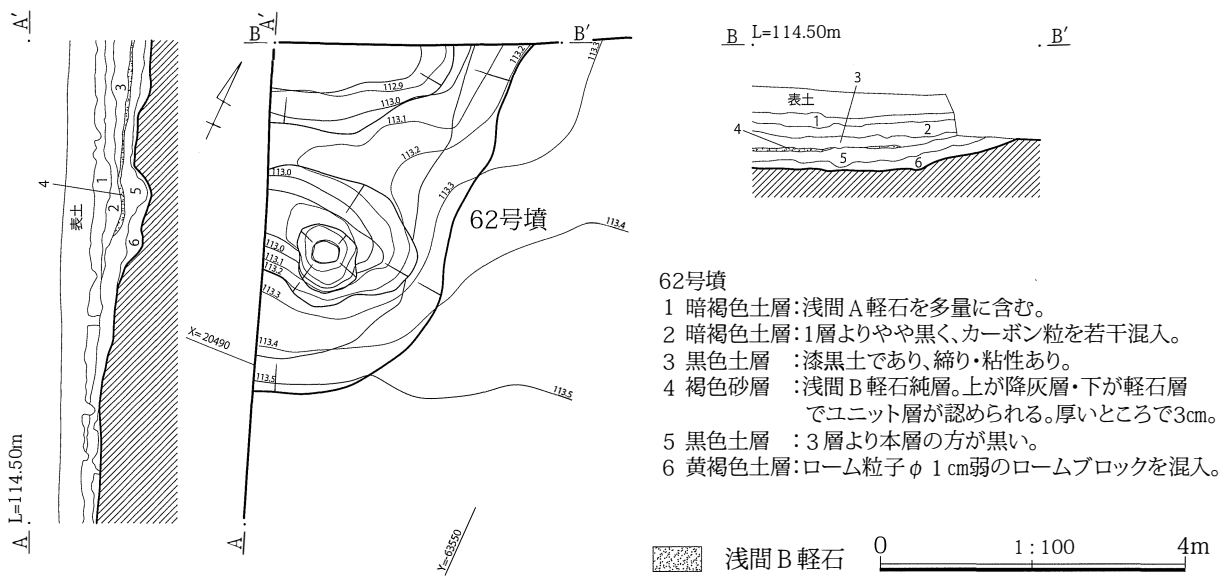
西側隣接地の久保地区C地点にこの遺構の続きが確認されている。

南東部の周溝と認識されたが、その大きさは直線で長さ15m、幅5.5m、深さ80cmの弧状の溝となっている。但し、2つの溝が検出されており、南側の溝は確認長2.5m、幅3m、深さ80cmであり、62号墳に伴うものか別遺構であるかは不明である。

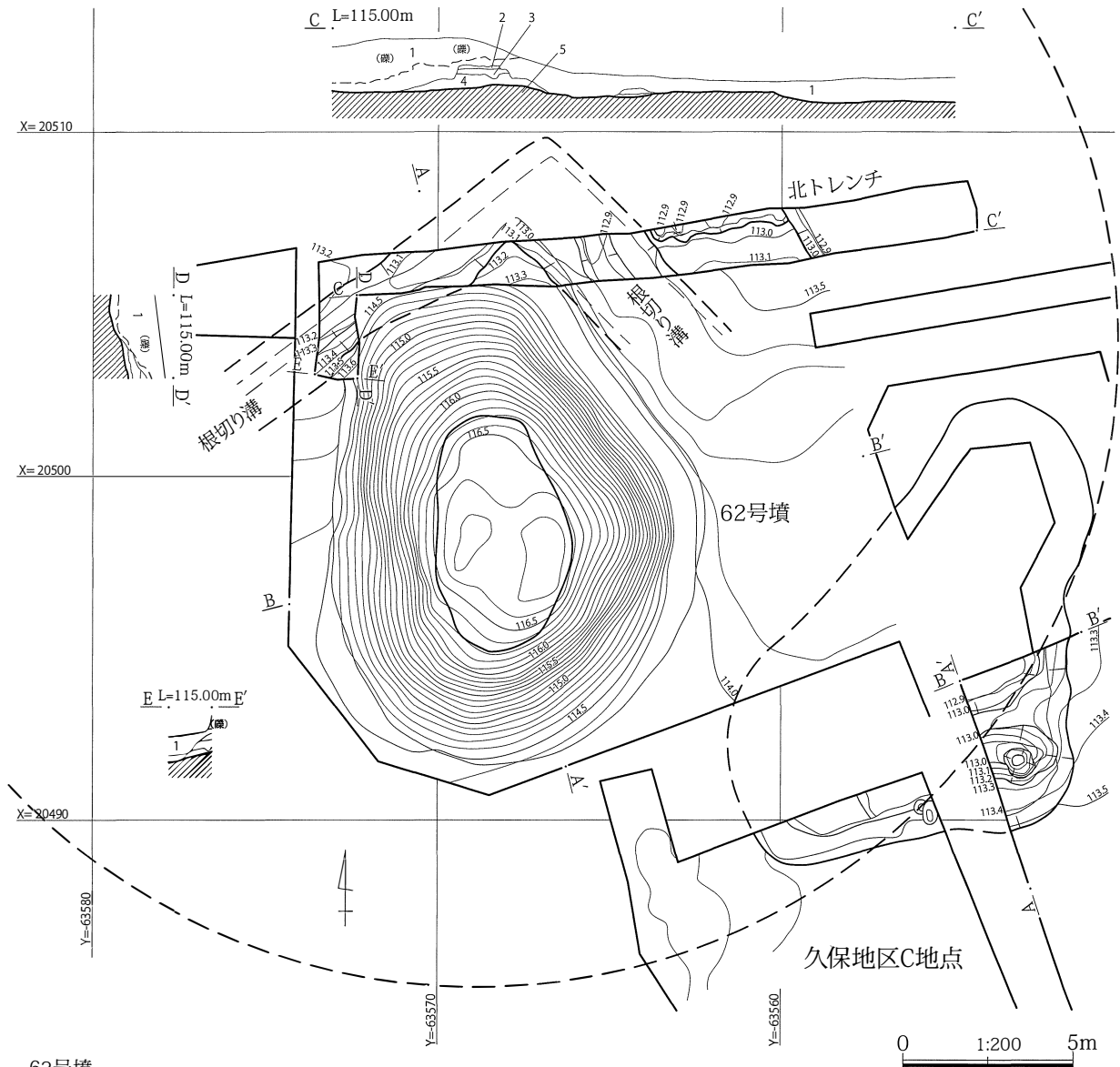
62号墳の墳丘規模は、直径約25mの円墳で周溝外側の立ち上がりまでの半径はおよそ18mであり、直径36mを測る規模の古墳であることがわかった。また、古墳周溝は基底部が一定しない南側・東側にブリッジ状の浅い箇所が存在している。



第8図 62号墳現状墳丘測量図



第9図 62号墳南西部周溝平面図及び断面実測図

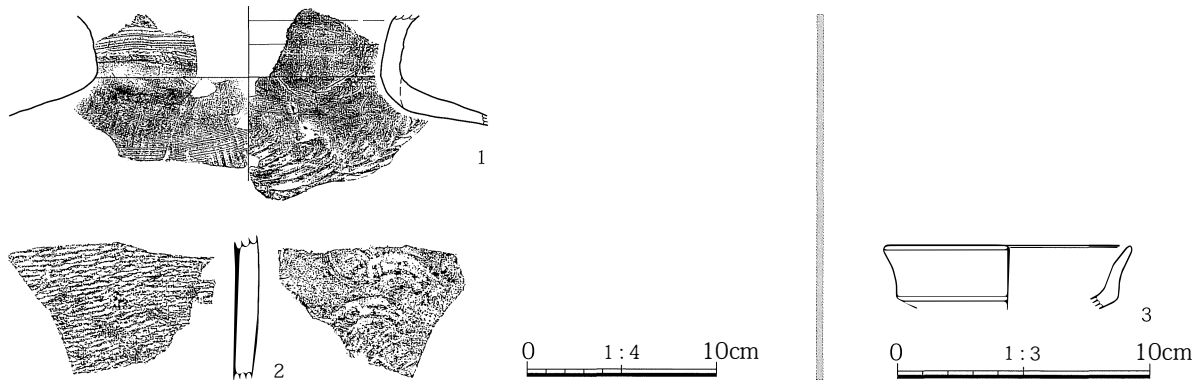


62号墳

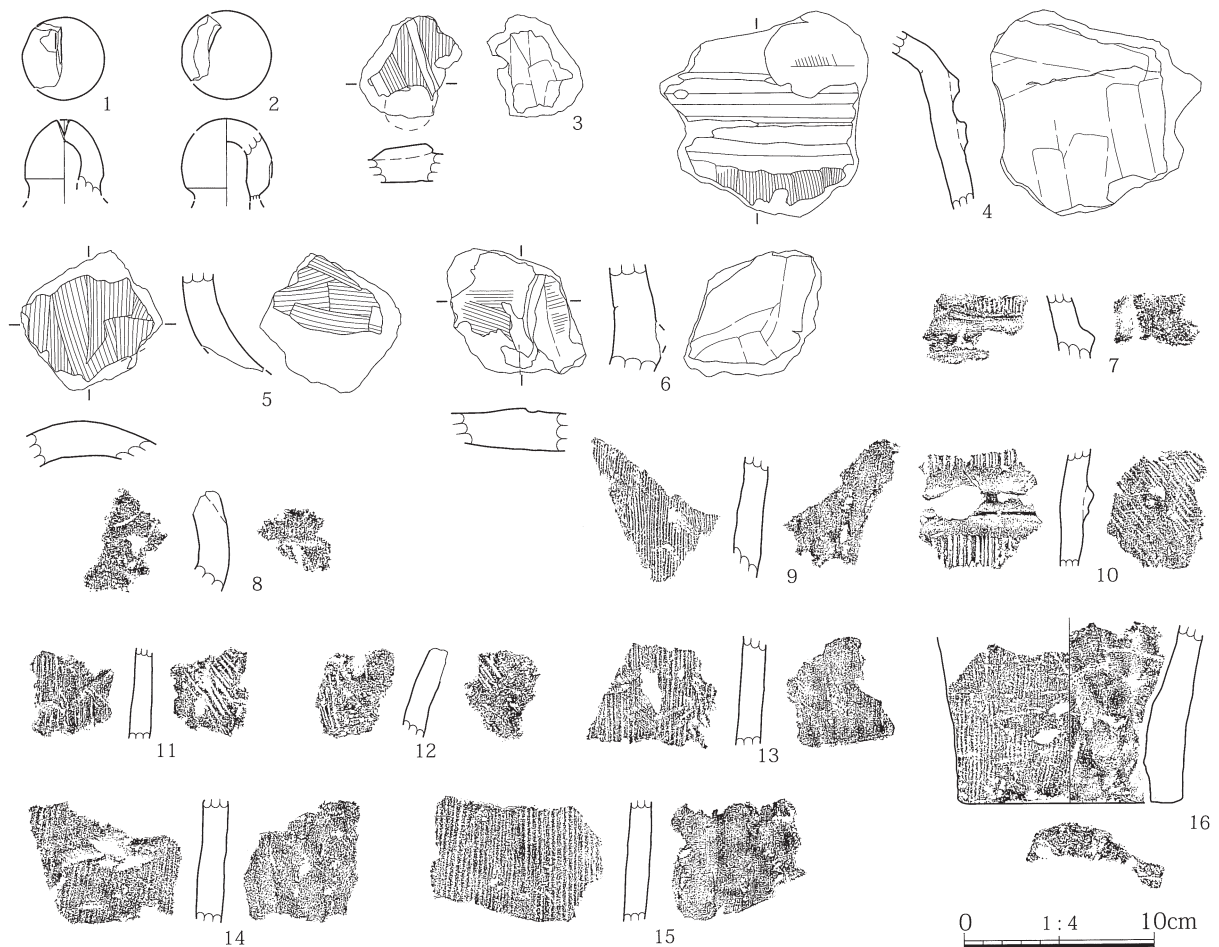
- 1 表土 : 浅間A軽石を多く含む。
- 2 暗褐色土層 : ローム粒・ブロックを斑状に含む墳丘盛り土層、
縮り粘性あり。
- 3 黒色土層 : 黒色土の上面が古墳構築時の旧地面。
- 4 明褐色土層 : 厚さ45cmと厚い地面。縮りあり。
- 5 黄褐色土層 : ローム漸移層。

※3・4・5層は墳丘の残っている個所でないとなら残されていない土層。畑地では旧表土と一緒に耕しており、これらの地層はなくなっている。

第10図 62号墳全体図 (前回調査部分含む)



第11図 62号墳出土遺物実測図・拓影図 (1)



第 12 図 62 号墳出土遺物実測図・拓影図 (2)

出土土器 (第 11 図 図版 13)

1・2 は須恵器甕である。1 は頸部破片で頸部径は 16.0cm である。外面頸部下には櫛によるカキ目があり、頸部上はヘラによる横ナデが施され、内面には同心円のあて目がある。2 は胴部破片で、外面が縄目のタタキ目、内面は同心円のあて目がある。自然釉が認められた。1・2 は別個体である。

3 は土師器坏小破片で推定実測したものである。口径は 9.8cm、器高は 2.5cm である。

出土埴輪 (第 12 図 図版 13 第 3 表)

形象埴輪と円筒埴輪の出土があった。

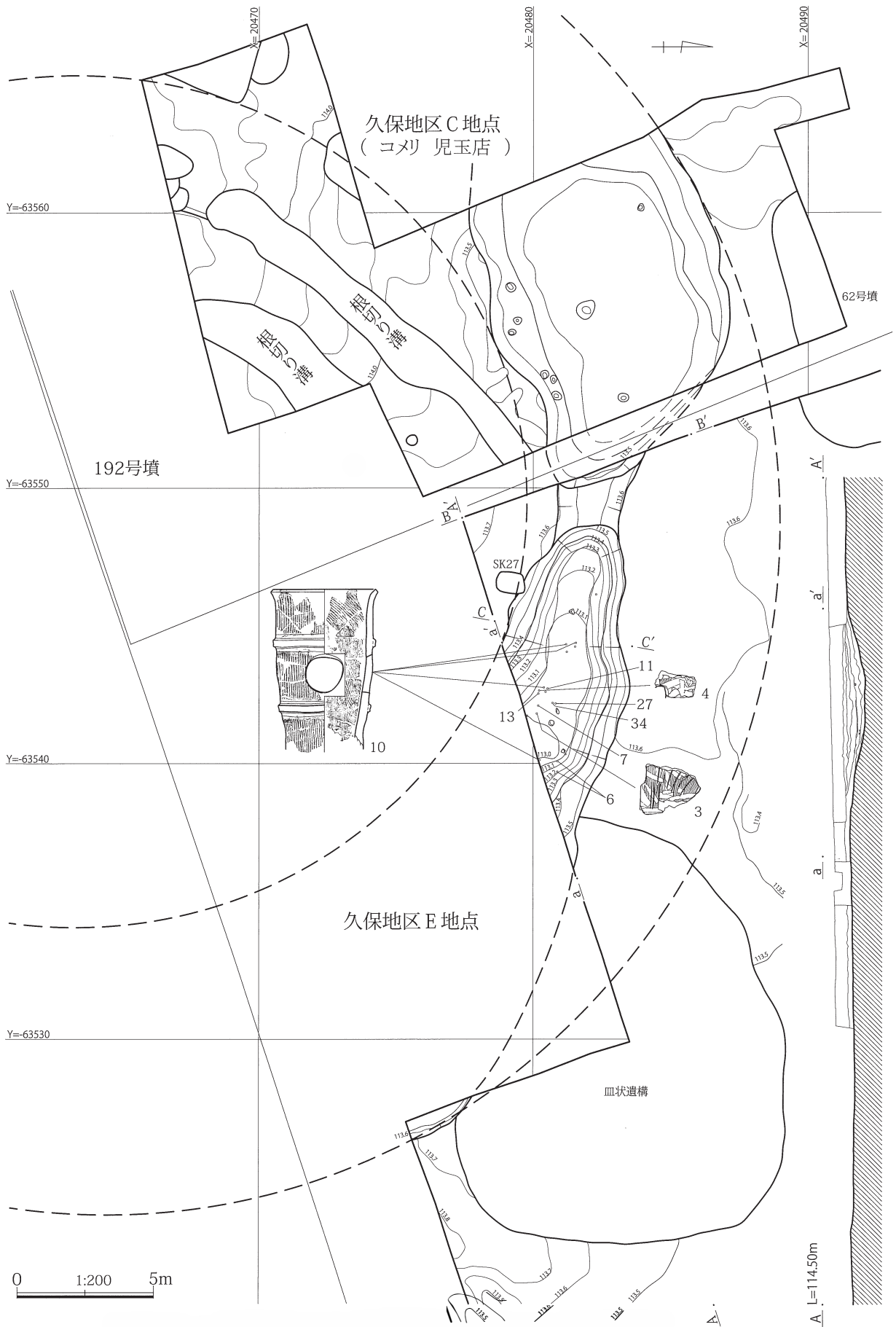
1～9 は形象埴輪である。1～3 は馬形埴輪の破片である。1・2 は馬の飾り鈴と考えられる。3 は革帯部分を表したもので飾り鈴の剥落痕も確認できた。4 は円筒型器台の上に 2 本の突帯があり、上段突帯部から湾曲する台上部に大きく剥落痕があり、人物埴輪の足部が剥落したものと考えられる。5 は人物埴輪の服裾部と考えられる。6～9 は器種不明。7 は突帯が断面三角凸帯になっている。9 は外面赤色塗彩されている。

10～16 は円筒埴輪である。10 は突帯断面は台形である。16 は円筒埴輪底部で底径 11.0cm である。

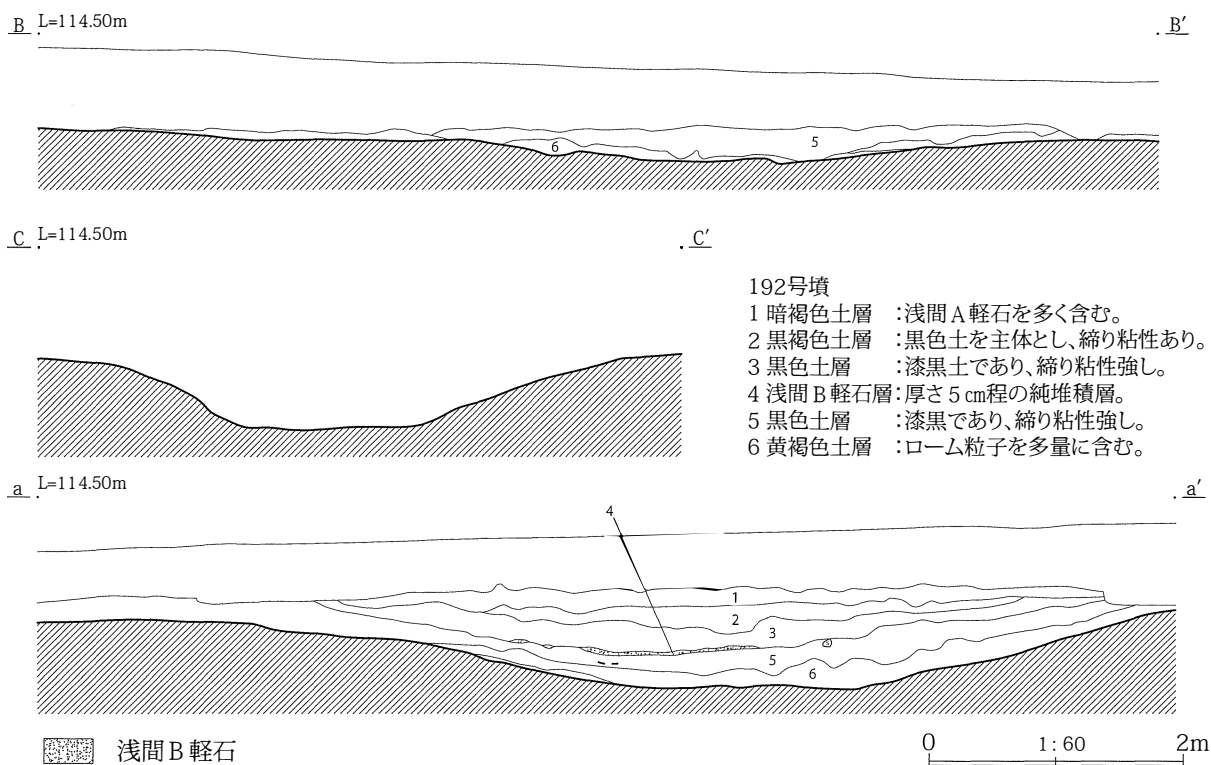
○ 192 号墳 (第 13～16 図 図版 4-1・5-1～8・9-2・13・14 第 4 表)

192 号墳は、円墳で北東部周溝の調査で D・E-4～7 グリッドに位置する。

直線で約 26.5 m の長さの周溝を確認する。古墳規模は、西側に隣接する久保地区 C 地点調査のデー



第 13 図 192 号墳平面図及び断面実測図 (C 地点調査区合成図)



第 14 図 192 号墳周溝土層断面実測図

々と繋げてみると古墳周溝外径で直径 50 m の古墳となる。本墳は調査時には平坦に削平されていた。

昭和 24 年の米軍の撮影した航空写真には、墳丘が残っていることが確認でき、それ以後の開墾で墳丘がなくなっている。

今回の調査部は、周溝内にある深穴部分であることがわかり、深穴西端が確認され、周溝は幅 5 m、深さ 80 cm である。周溝西端は、深穴端から 1.4 m 間は幅 2.3 m 深さ 10 cm 程の浅い周溝で C 地点の幅 9 m、深さ 30 cm の幅広い周溝の東側端を確認している。古墳北東部周溝は 207 号墳を避けるように北東部が C 地点調査区を含めて直線で 32 m。部分的に円から最大 5 m も窪んだ状態である。このことから 207 号墳が築造された後に 192 号墳が築造された可能性がある。

192 号墳の周溝覆土最下層土壌の科学分析で榛名山火山灰の成分が確認された。この火山灰の降下時期はウイグルマッチング法により、実年代 491 ~ 500 年の 5 世紀末が与えられているため、本墳は 5 世紀末以前の築造である。

周溝深穴の床から 30 cm 上に浅間 B 軽石層の降下堆積が 5 cm 認められる。

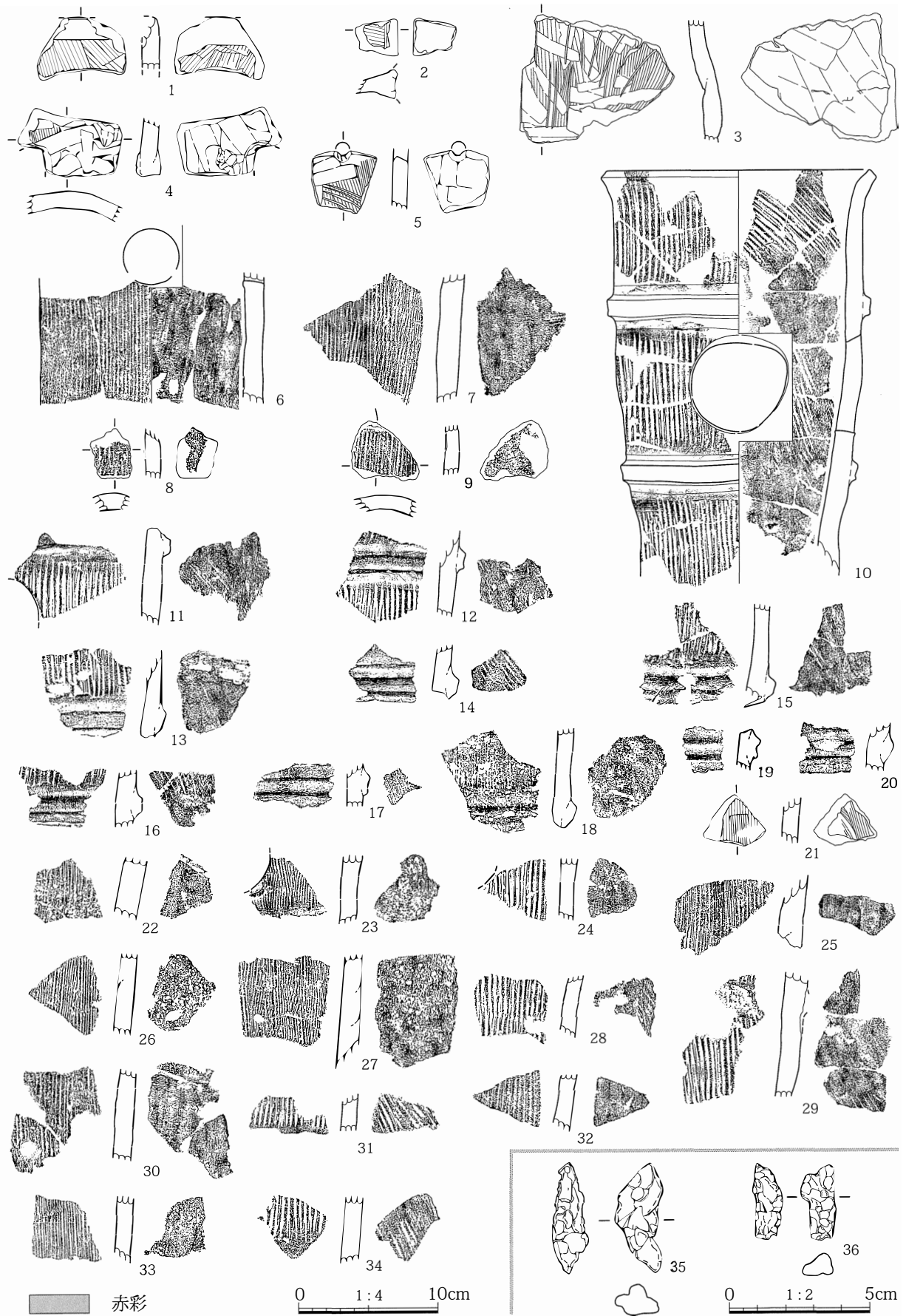
浅間 B 軽石層を挟んで上下の層で円筒埴輪片の出土があった。浅間 B 軽石層の降下年は、天仁元年 (1108) であり古墳墳丘の周溝への崩壊、流入は非常に長い時間 (古墳築造が 490 年代として浅間 B 軽石層が 1108 年で 600 年以上) が経過していることの一つの現象である。

出土遺物 (第 15 図 図版 13・14 第 4 表)

192 号墳は、西側隣接地 (『長沖古墳群 VIII』2008) において周溝調査部他から (第 16 図 40) の埴輪群の出土がある。この埴輪は翳形埴輪であり、他に鞍形埴輪・大刀形埴輪・円筒埴輪の出土があった。

今回の出土遺物は、埴輪片・鉄製品だけである。埴輪は、形象埴輪と円筒埴輪の出土があった。

1 ~ 9 は形象埴輪である。1 ~ 3 は翳形埴輪である。1 は翳形の上端部、2 は同筒型に鱗状に貼り付けたもので剥落している。3 は翳形でヘラ状工具による直線の線刻が 2 段に描かれている。直



第15图 192号墳出土遺物実測図・拓影图

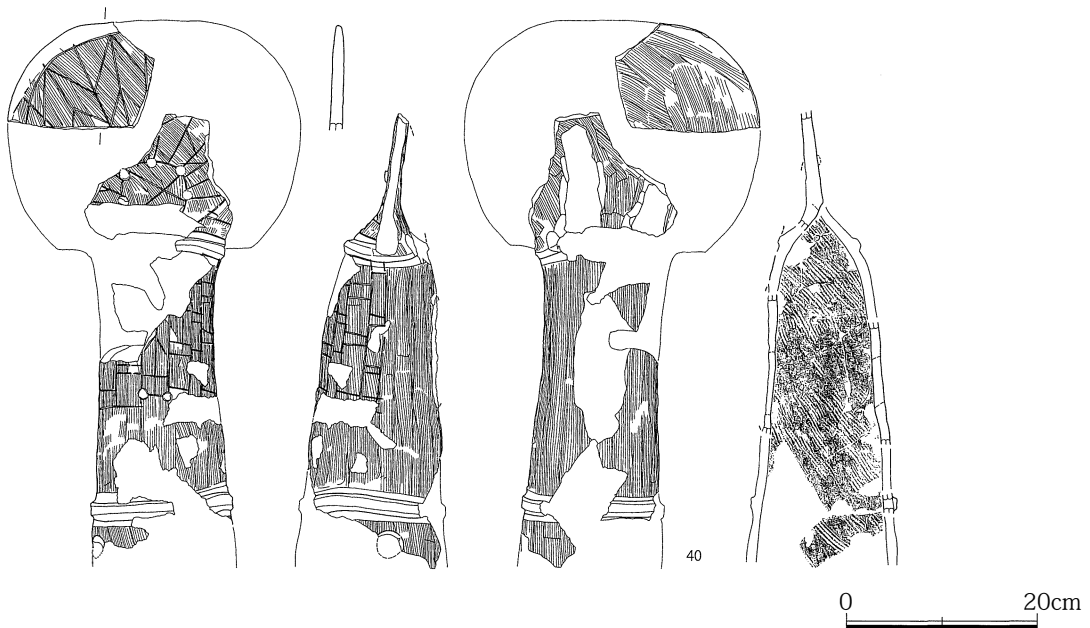
線文が縦方向にランダムに刻まれている。4・5は器種不明である。4は四角い透かし孔を穿っている。5はひご状工具により数ミリ毎に刺突し、その部分をくりぬき穿っている。

6・7は同一個体で器財埴輪の円筒台部で、6は直径4cmの小透かし孔が穿たれている。

10～35は円筒埴輪である。10は、上下別々の個体を図上復元実測したものである。口径19.8cm、現高29.5cmである。突帯2段の突帯断面台形、平面形が円形の透かし孔が上下2段の凸帯の間に存在している。透かし孔は縦6.8cm、横7.0cmである。外面は縦ハケ目であり、内面上部は斜めハケ目、下半は斜めヘラナデ調整、中央部は斜めハケ目調整後、ヘラナデ調整である。口縁部横ナデ。

第16図は久保地区C地点の192号墳出土埴輪である。

40は翳形埴輪の円筒基部を欠損し、翳部は復元実測されたものである。今回の調査でも翳形埴輪と考えられる埴輪が出土している。また、器財埴輪の基部円筒が確認されている。



第16図 192号墳出土翳形埴輪実測図（C地点調査分『長沖古墳群Ⅷ』2008）

○205号墳（第17～20図 図版6-1～8・7-1～8・8-2・14 第5表）

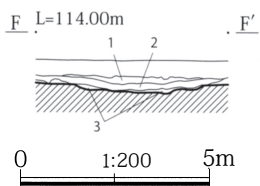
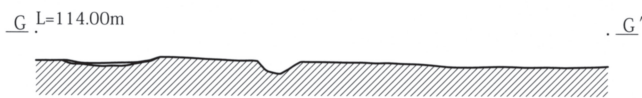
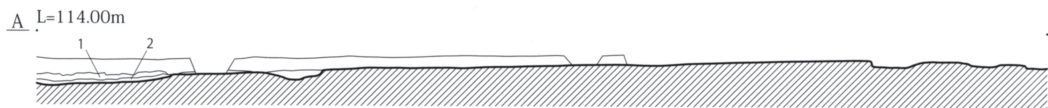
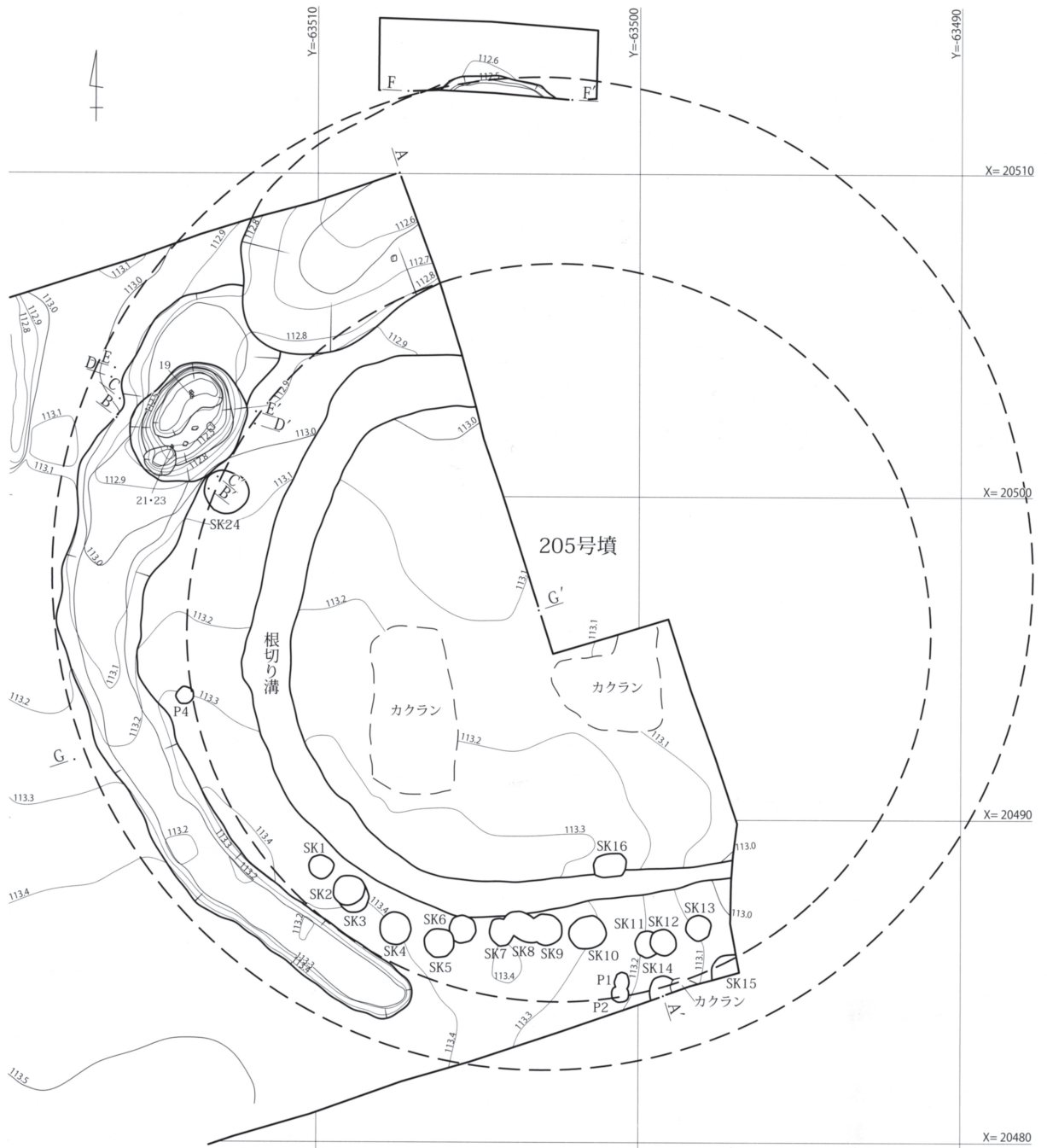
205号墳は西1mで206号墳が、西15mで207号墳、北西15mで61号墳が隣接するA～D-1～3グリッドに位置している。

205号墳は円墳で調査時では平坦に削平されている。昭和24年の米軍の撮影した航空写真には盛土が残っていることが確認でき、それ以後の開墾で墳丘は消滅している。調査は古墳西側半分で、墳丘規模は直径約22.5m、周溝外径は約30.5mを測る。

根切り溝が古墳周溝の内側に直径約18mで堀幅0.6～1.6m、深さ30～40cmを測る。古墳周溝と開墾による根切り溝により生じた余剰地を土坑群として使用しているのが古墳南側で顕著である。

周溝は全周するものではなく、南側で無くなり開口している馬蹄形状である。

西側周溝は、直線で約29.5mが確認されている。周溝の掘削は3つの工区がある。南区の18mは周溝幅が1.7～3.5mで深さも30cmと浅く、周溝底は平らである。中区は長さ6.5mで幅3.8mであり、北・南区に比べ20cm位深くなっている。さらに、周溝の中には楕円形の土坑状の大きさの



205号墳周溝

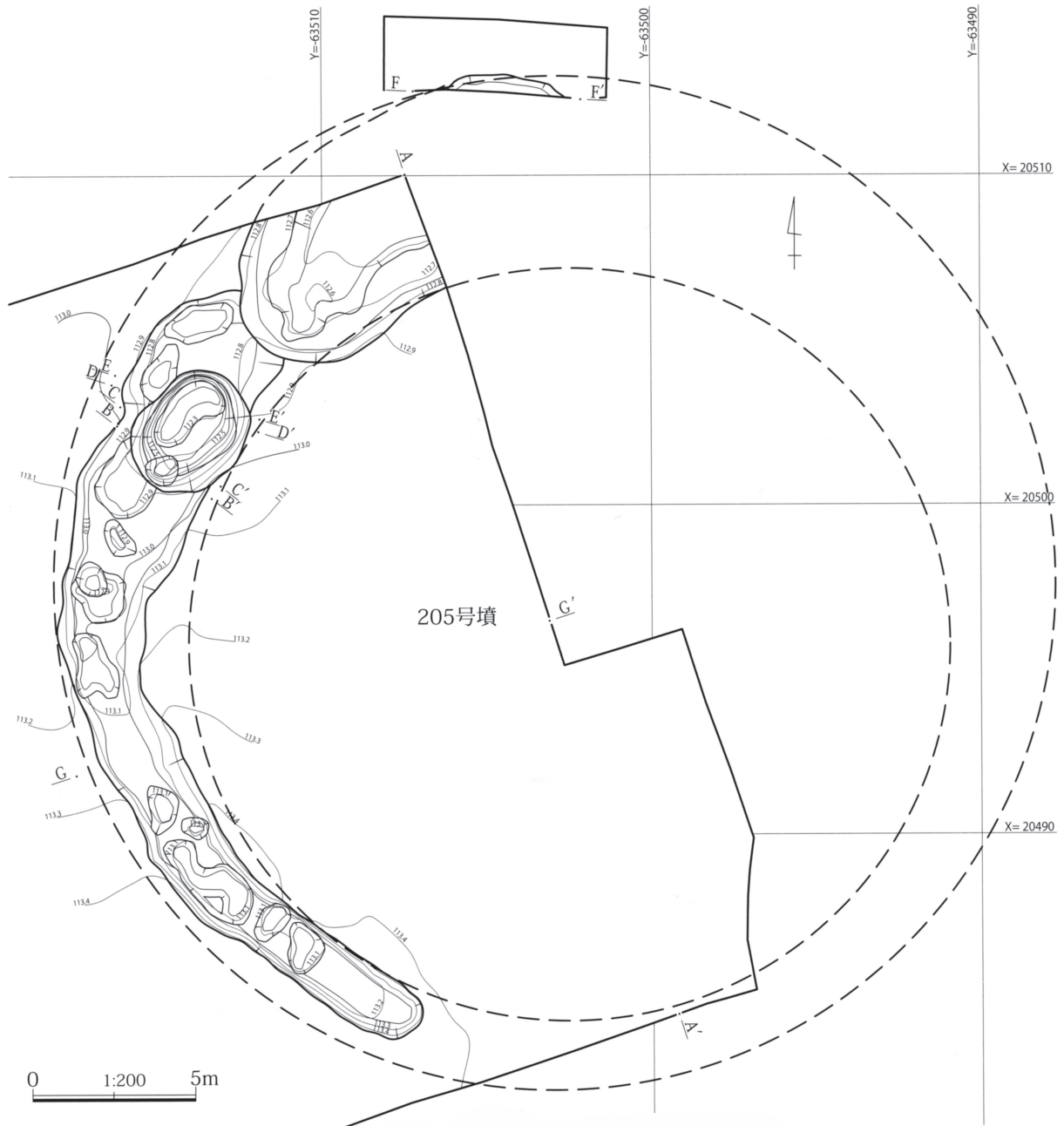
表土は灰褐色土層で全体に砂質土である。この砂質は浅間B軽石である。

1 黒色土 : 漆黒に近い。粘性あり。

2 暗褐色土層 : ローム粒子を含む。粘性あり。

3 暗黄褐色土層: ロームブロックφ3~5cmのブロックで斑状に含有している。
人為的な埋め戻し土である。

第 17 図 205 号墳平面図及び断面実測図



第18図 205号墳周溝掘り方実測図

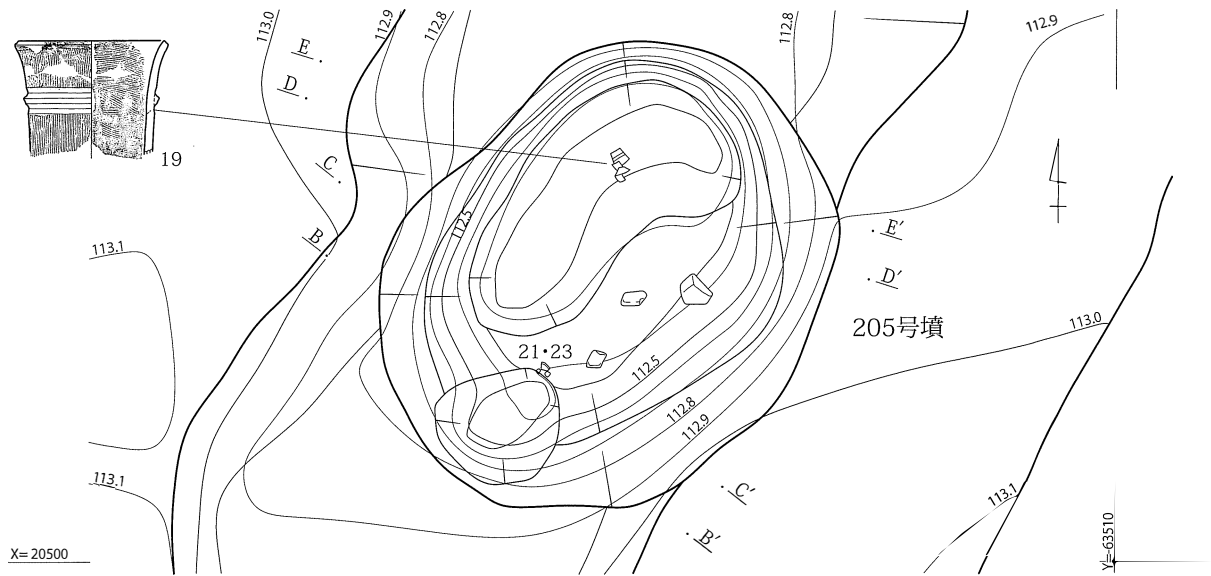
長軸 4.0 m、短軸 3.1 m、深さ 0.7 m の周溝深穴が存在している。(第19図) 北区は長さ 11.5 m、幅 5.6 m、深さ 30cm と常に浅い皿状の堀となっている。周溝は南側が狭く、北側が幅広である。

周溝中区の土坑状の深穴が B-3 グリッドに位置している。この穴部分の覆土にのみ浅間 B 軽石が 8cm の厚さで降下堆積し、火山灰と軽石層のユニットが確認できる。

浅間 B 軽石は天仁元年 (1108) の浅間山の噴火による、降下堆積物である。

なお、この周溝底面は掘りすぎた面をローム混じりの黄褐色土層で埋め戻した貼り床であり、その下には掘り方が存在する。5~10cm の厚さで、貼り床され部分的には穴状に荒掘りされた個所があり、暗褐色土にロームブロック ϕ 2~5cm が斑状になる形で埋め戻している。(第18図)

出土遺物は、周溝中区の深穴の上部からの埴輪と古墳内の南東部調査区の石集積穴には円筒埴輪の他、形象埴輪の破片の出土があった。

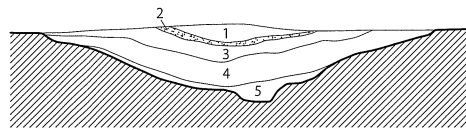


B L=113.40m

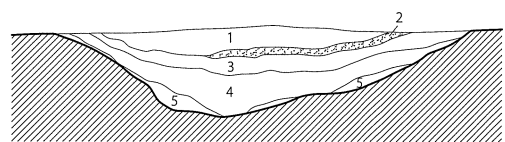
B'

C L=113.40m

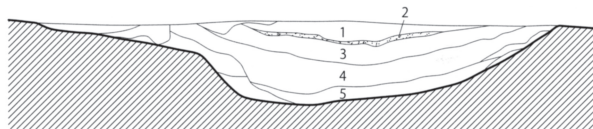
C'



D L=113.40m



C'



0 1:60 2m

浅間B軽石

205号墳周溝

- 1 黒色土層 : 黒色土を主に締り・粘性あり。
- 2 灰白色砂層 : 浅間B軽石の降下堆積層、最大8cmの厚みで下半が軽石層・上半がシルト層。
- 3 黒色土層 : 漆黒土で締り・粘性あり。
- 4 暗茶褐色土層 : ローム粒子・少量のローム塊を含む。締り・粘性あり。
- 5 暗褐色土層 : ローム粒を多量に含む。締り・粘性あり。

第19図 205号墳周溝深穴平面図及び断面実測図

また、周溝深穴部覆土堆積層で浅間B軽石層が降下堆積した後、黒色土が約20cm強堆積した中に円筒埴輪が墳丘側からの流れ込みによって出土している。

出土遺物(第20図 図版14 第5表)

1・2は人物埴輪片である。1は人物頭部髪形的美豆良(みずら)で剥落したものである。2は人物の首飾りについていた勾玉片である。

3～8は馬形埴輪で3は手綱片、4は腰部の帯で鈴が剥落した跡がある。5は馬形埴輪の胴下半から足の付け根部位である。

9・10は動物埴輪の足部分である。11は小円形透かし穴がある小破片で器種・部位不明。

13・14は器面に斜め線刻が施されており、盾・鞍形埴輪の破片と考える。

15～18は形象台部で15は円筒器台の頂部部分の剥落したものである。16は平らな器面であり、大型器台あるは家形埴輪片と考える。

19～33は円筒埴輪である。19は口径20cm、残存高15cmを測る。20は口縁部片、21～25は突帯のあるもので21・24・26は円形透かし孔、23は直線をもつ透かし孔が認められる。



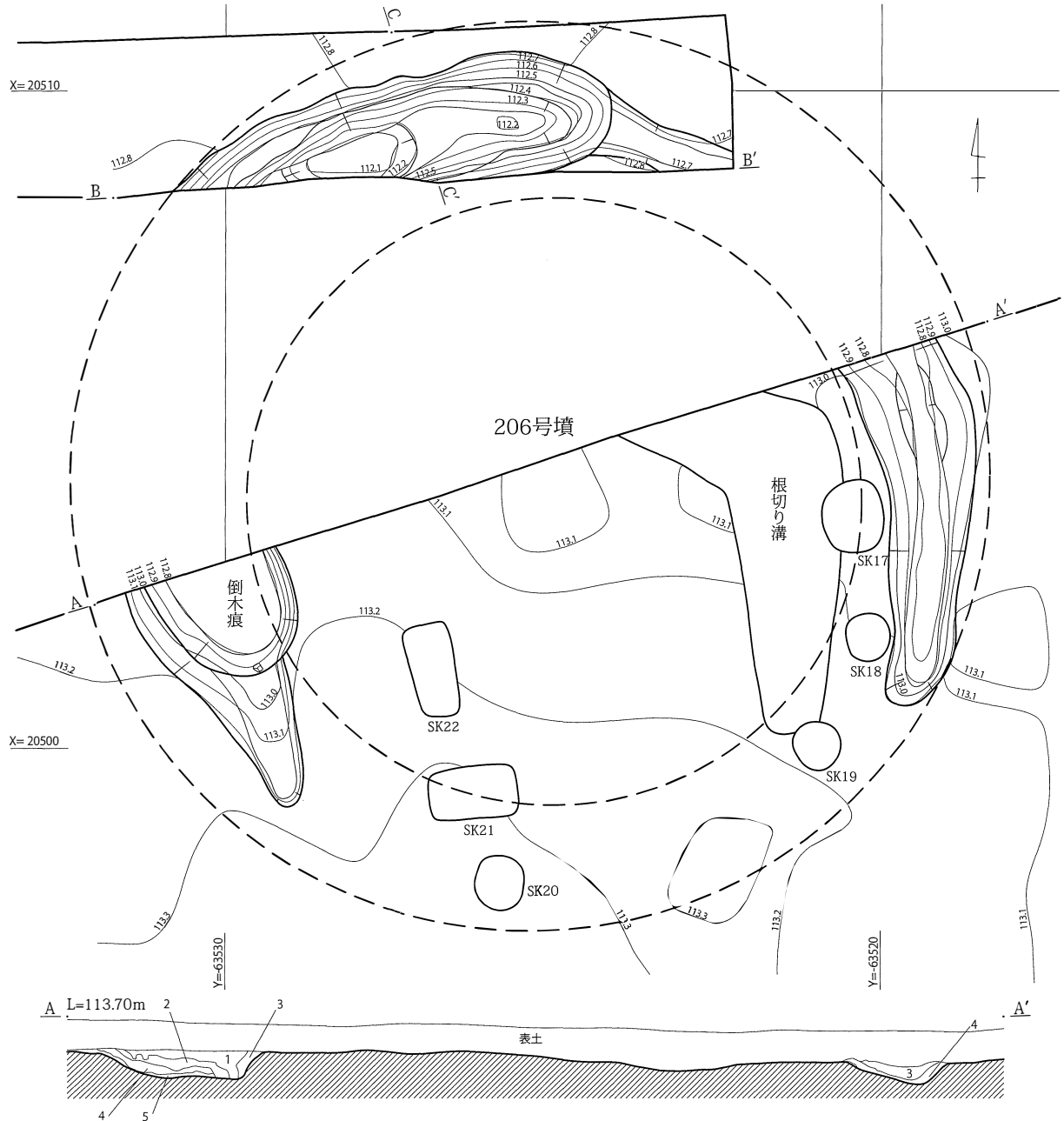
第 20 图 205 号填出土遺物実測図・拓影図

○ 206号墳 (第21～23図 図版6-1～2・8-1～8・12-28・15)

206号墳は東1mで205号墳、西4mで207号墳が隣接するA～C-3～5グリッドに位置する。

206号墳は円墳であるが、昭和24年の米軍の撮影した航空写真ではすでに墳丘がすべて取り除かれ削平された状態であった。墳丘規模は9.4m、周溝外縁の直径は13.8mを測る。ただし、現状では南側の周溝は途中で無くなり開口しており、周溝が全周していない。

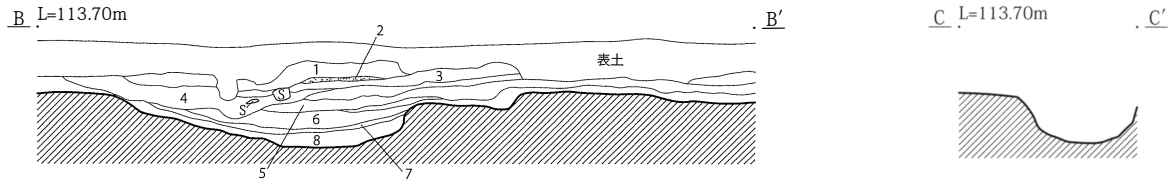
北側周溝部と南側半分の部分的発掘調査である。東周溝は、幅1.6mで長さ5.5m確認され、断面



206号墳

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子を含む。倒木による縦の層が見られる。
- 2 黄褐色土層 : ローム粒子・ブロックを多量に含む。倒木によるローム層の持ち上げ。
- 3 暗褐色土層 : 表土と同様な土層でローム粒子を表土より多く含む。
- 4 黒褐色土層 : 黒色土層を中心にローム粒子を含む。
- 5 暗黄褐色土層 : ロームブロックφ5cmを斑状に含む。ローム粒子を多量に含む。貼り床。人為的な埋め戻し土である。

第21図 206号墳平面図及び断面実測図



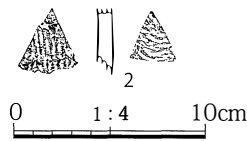
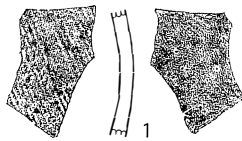
206号墳北周溝
表土

- 1 黒色土層
- 2 軽石層 : 浅間B軽石純堆積層。
- 3 黒色土層 : ローム粒子φ1mmを含み粘性あり。
- 4 暗褐色土層:ローム粒φ1~5mmを多量に含む。

浅間B軽石

- 5 黄色土層 :ロームブロックφ3cm、ローム粒を多量に混入する。
- 6 暗黄褐色土層:ローム粒子を多く含む。
- 7 黒色土層 :ローム粒子を含む。
- 8 黄褐色土層 :ロームブロックを含む。

第22図 206号墳周溝土層断面実測図



第23図 206号墳出土遺物実測図・拓影図

は「皿」状で深さは30cmである。

西側周溝内側において円形の平面が認められるが、これは古墳周溝埋没後における倒木痕である。断面図に大きく東に倒木したため直立した層が明確に認められる。周溝の長さは、4m確認された。

北周溝部をトレンチ調査で確認する。北西部は周溝が深く掘られており、確認面から約90cmの深さ、表土から1.4mの深さで周溝の底部となる。周溝底は東西2.1m、幅0.8mの楕円形で特に深くなっている。この深い周溝は、長さ7m、幅2mで周溝断面は「U」字状となっている。北東端部は一部確認面から30cm位掘りすぎており、現状は幅80cmであるが、1.5m位が断面で確認されている。

この深穴の覆土に穴底から90cm上の覆土に浅間B軽石の降下堆積が厚さ8cmほど認められる。

根切り溝が、東周溝の墳丘側に約2.5m内側に入り込んだ状態で幅2m、深さ20~30cmで掘られている。この古墳周溝と根切り溝の間の空間に円形の土坑、SK17からSK21が5基作られている。

出土遺物(第23図 図版15)

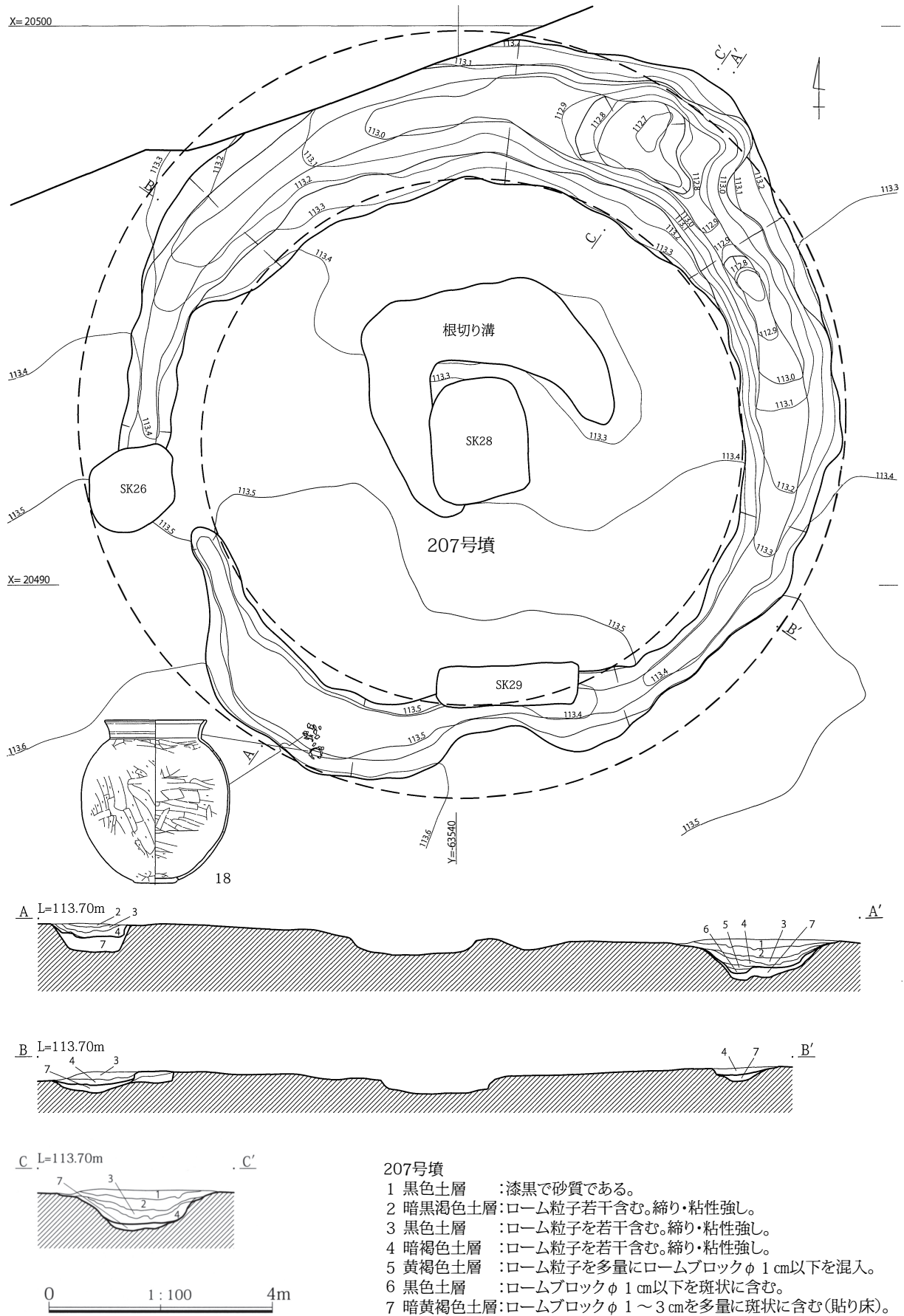
埴輪類の出土はなく、須恵器甕の破片2点が北周溝内から出土している。1・2は須恵器甕の破片で両資料とも自然釉がかかっており、厚み6mmの同一個体と考えられる。外面は平行タタキ目、内面は青海波のあて目が認められる。

○207号墳(第24~26図 図9-1~8・15 第6表)

207号墳は、C・D-5・6グリッドに位置する。東4mで206号墳、北西5mで62号墳、南3mで192号墳が位置する。昭和24年の米軍の撮影した航空写真ではすでに墳丘がすべて取り除かれ削平された状態であった。円墳で墳丘規模が直径8m、周溝外径規模で直径14mである。

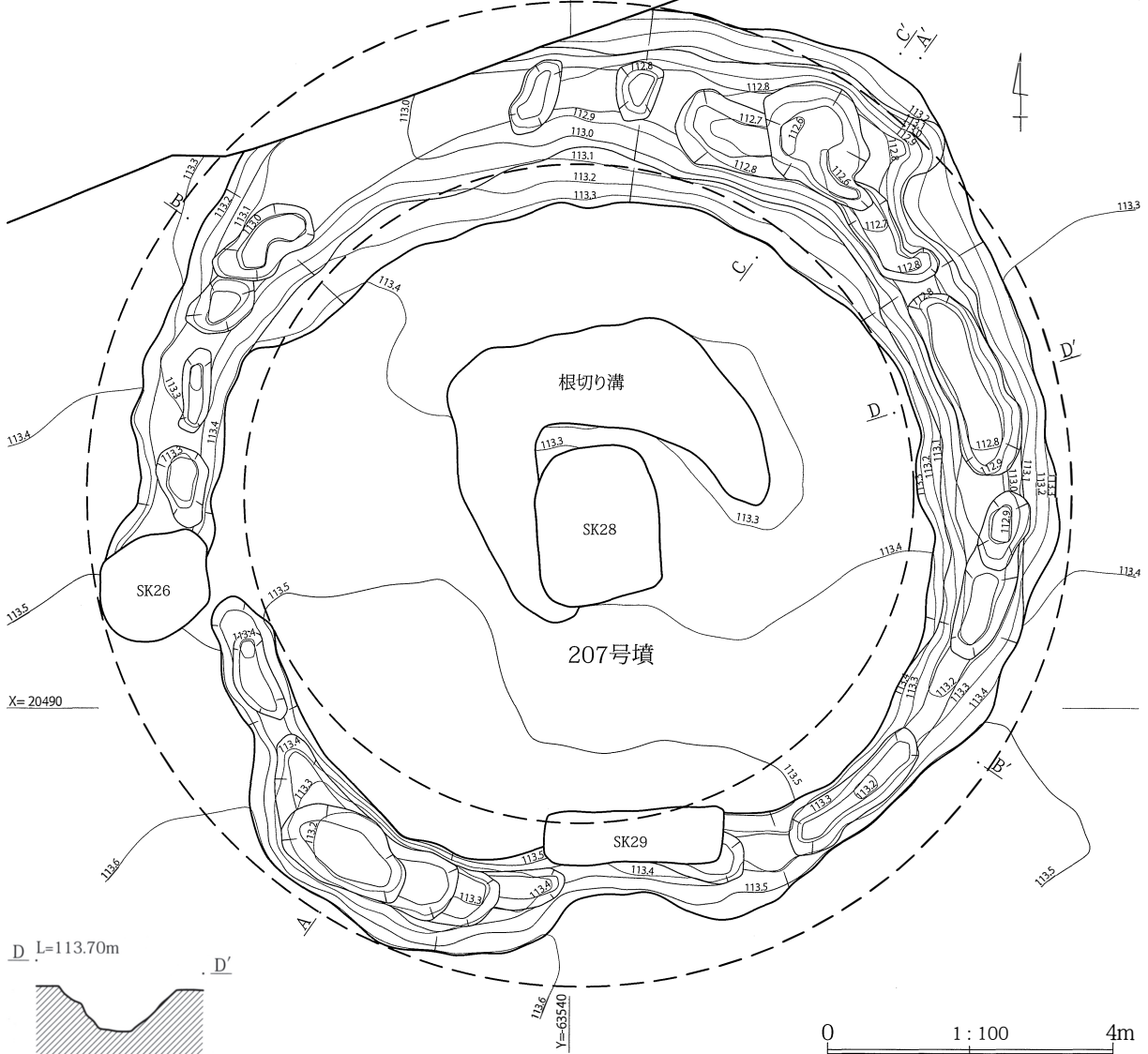
北東側に深い周溝(深穴)を部分的に持っている。この深穴は不定楕円形で大きさは東西3m、南北2m、深さ60cmである。周溝は西側が細く、途中で切れた状態である。南東側の周溝も幅が狭く、南側中央も1m間はより狭くなっている。周溝は幅狭、幅広などが組み合わせられ円形状を作り出している。

中央に長方形土坑(SK28)があり、その中に古墳に使用されていた片岩類の石が詰め込まれている新しい現代の穴である。その土坑の周囲に直径4.5mの根切り溝が検出された。



第 24 図 207 号墳平面図及び断面実測図

X=20500



第 25 図 207 号墳周溝掘り方実測図

本古墳だけ浅間B軽石層が肉眼で目視できていない。1層に攪拌されている可能性が高い。

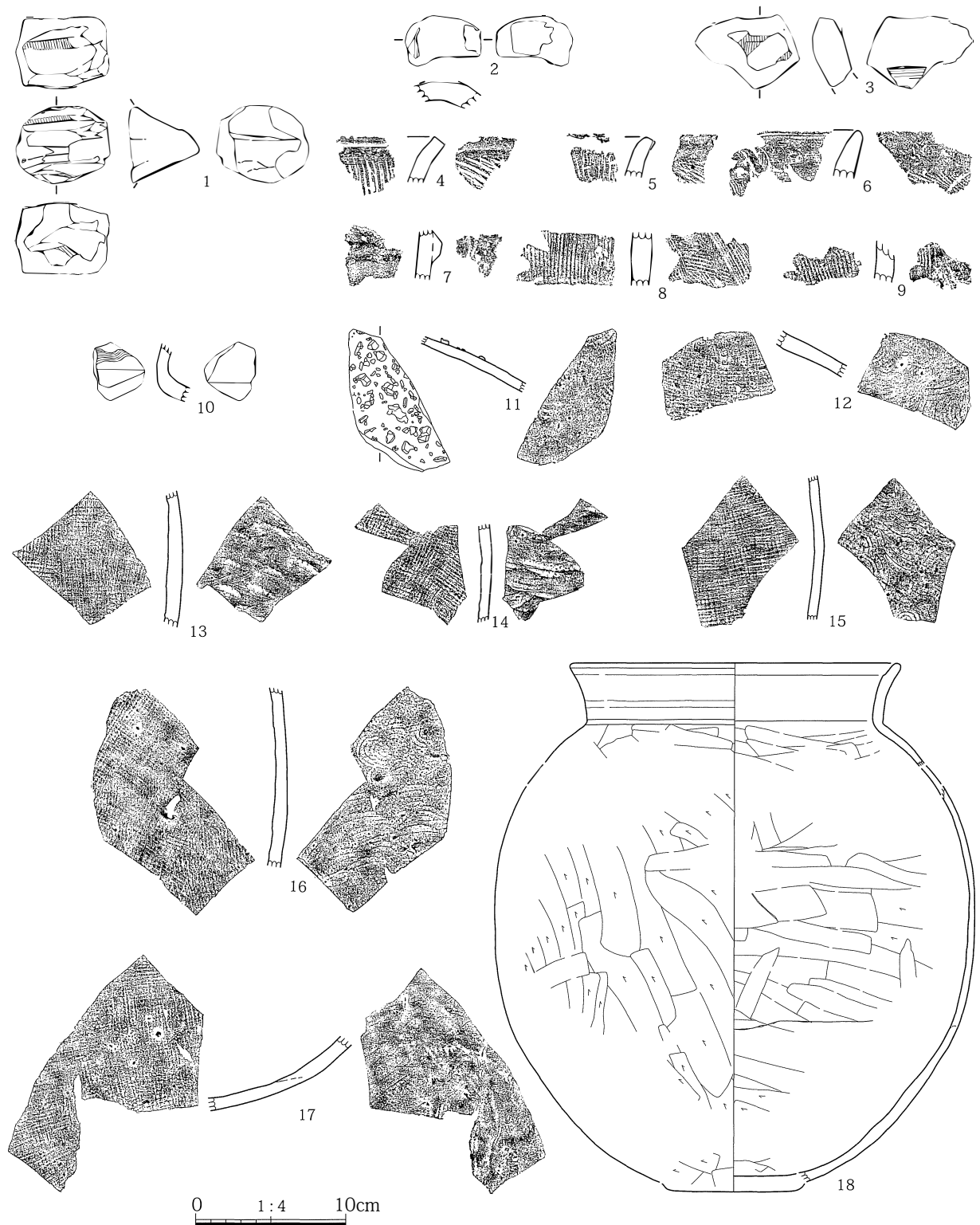
なお、周溝底については荒掘りをして埋め戻した状況であり、暗黄褐色土にロームブロックφ3cm～5cm、ローム粒子を多量に混入した土を貼り床としている。

出土遺物（第 26 図 図版 15 第 6 表）

埴輪は、形象埴輪・円筒埴輪が 9 点出土している。その内形象埴輪が 3 点である。1・3 は人物埴輪の上着裾と思われる破片、2 は馬形埴輪の顔部分の破片で轡部剥落痕あり。4～9 は円筒埴輪で、3 点は口縁部片、1 点は突帯片である。

須恵器甕の破片が 8 点出土している。須恵器で特徴的な甕肩部 11 は、自然釉がかかっているが単なる釉だけではなく、3～10mmの角張った石が大量に降りかかった状態である。10 は頸部破片、11・12 は肩部破片、13～16 は胴部破片、17 は底部破片である。須恵器甕の個体数は 2 種類以上としたい。

土師器甕 1 点が西側周溝内に口縁と胴部を輪積みのところで割れた状態で、「8」の字状に出土している。18 は土師器甕で口径 24cm、底径 8cm、器高 23.5cmである。



第26図 207号墳出土遺物実測図・拓影図

第2表 207号墳周溝内出土土器観察表

() 推定数値 [] 残存数値

挿図 番号	写真 図版	器種	出土 位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
26図-18	図版15	甕	周溝	24	(8)	(23)	砂粒	良好	橙	外面口縁部斜方向のヘラミガキ調整。横位沈線で底部に移行する。 内面口縁部は縦方向のヘラミガキ調整。	口縁部破片

○ 208号墳 (第27図 図版10-1)

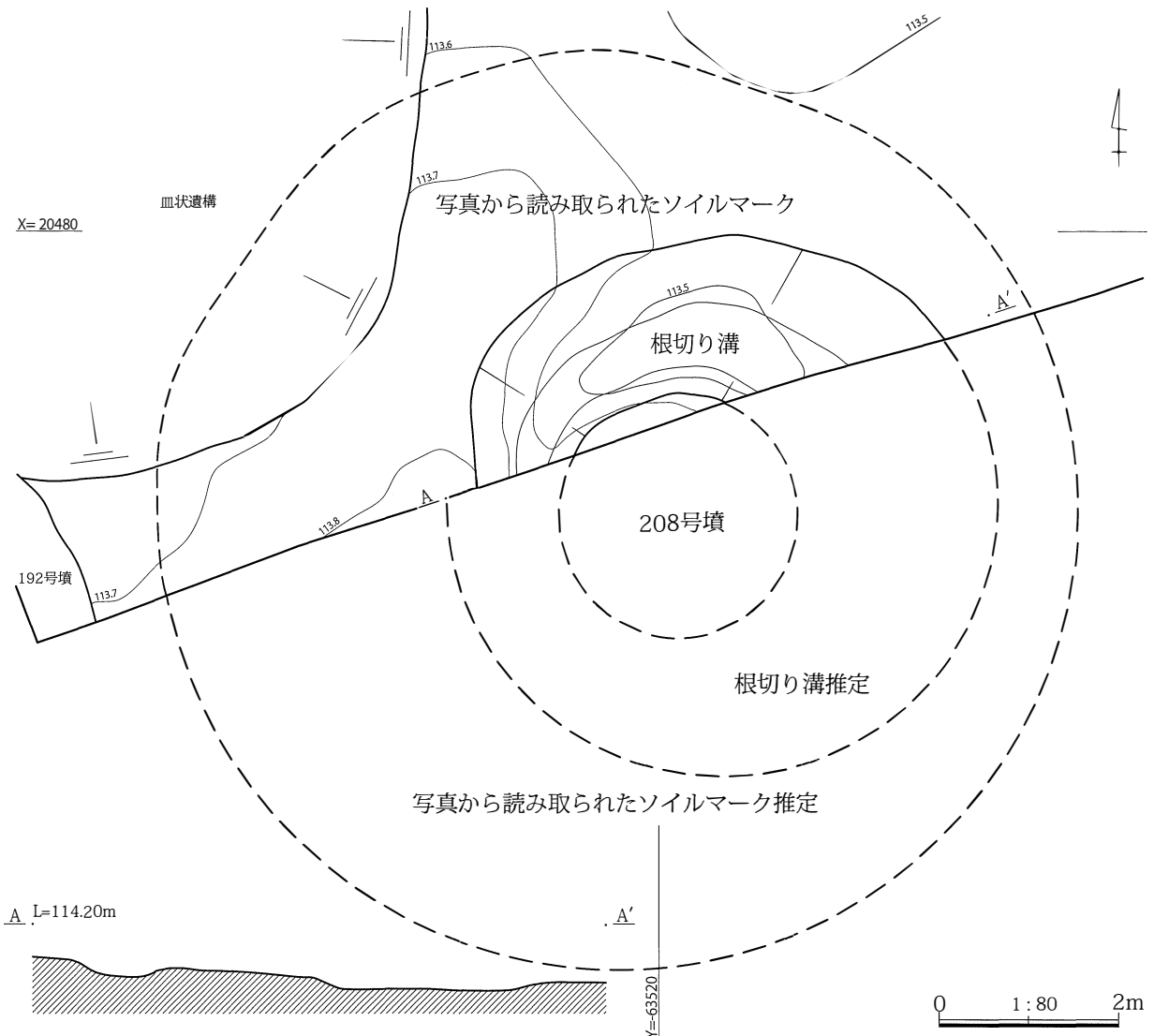
192号墳の東3m、調査区の南壁D・E-3・4グリッドにドーナツ状の小さい根切り溝が検出された。このドーナツ状の規模は、溝外径6.2m、溝内径2.65mの円形で円の中心は西側に偏っている。西側溝は幅1.1m、深さ20cm、東側溝は幅2.2m、深さ20cmを測る。

円形の中心が確認されたことで中心部に石が存在していたことが伺え、小古墳の可能性があると考えられた。

しかし、近世以後の溝であり、古墳とするには根拠が弱いと思われたが、図版1-2の航空写真により観察すると、この根切り溝の外回りに暗褐色の円形が映っており、周溝の底部が映し出されたものと考えられる。いわゆるソイルマークである。

そのため、この根切り溝は、本来古墳で208号墳として認識した。古墳の規模としては、直径10.2mの円墳と考えられる。昭和24年の米軍の撮影した航空写真ではすでに墳丘がすべて取り除かれ削平された状態であった。遺物は検出されなかった。

この「根切り溝」というのは、この地域の通称かもしれないが、古墳の墳丘の裾回りを農地の有効活用のため、平らに削り込み、その削り込んだ所までを畑にし、古墳に生える篠竹・雑草・雑木等の



第27図 208号墳平面図及び断面実測図

根の侵入を防ぐため溝を掘ったものである。

この根切り溝は、基本的に古墳を対象としたもので、1回だけのものや、2回行われているものなどがあり、62号墳のように古墳石室を中心とした石山として残し、根切り溝を掘っているものもある。

最終的には205・206・207号墳のように中央に残る墳丘もすべて取り払われ平らにされている。

この古墳墳丘裾を削り出して生まれた土地については、畑にして作物の増収を見込んだものの他に、205号墳で見られた土坑群のように他の利用も進んで行われている。

遺物は検出されていない。

○皿状遺構（第28図 図版10-6~8）

この皿状遺構は、192号墳の北東部に接してD・E-4・5グリッドに位置する。

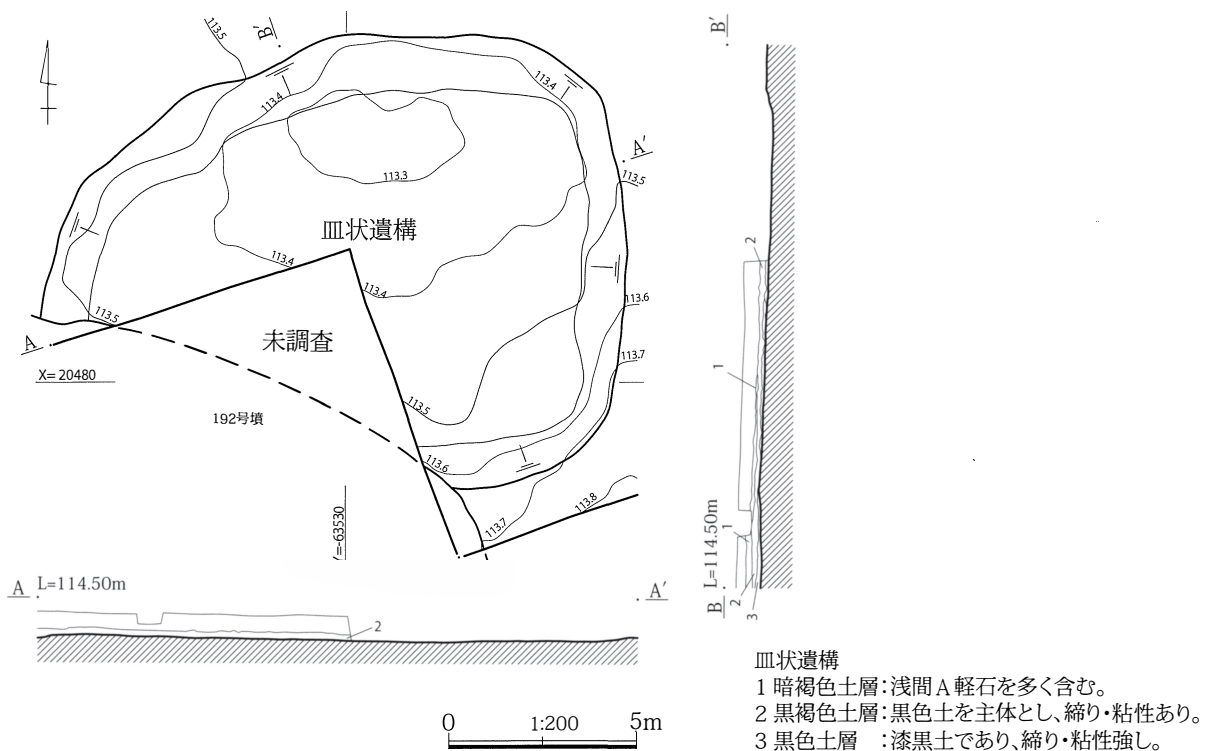
平面形は不整形で大きさは南北12m、東西15.5m、深さ25~30cmを測る。北側がやや深くなる浅い窪地である。この覆土の地層は古墳周溝内の覆土と同じ地層であり、古墳時代に約150㎡の皿状に掘削された遺構と考えられる。

遺構の性格として、古墳の盛り土が足らなかったと考えられ、浅く皿状に土を掘り込んだものと考えられる。

その後、この窪地は雨水が溜まり湿地状になり、アシ・ヨシなどの生息地となり、直径4~5cmの円形の根の痕跡が斑状に多く確認された。

古墳時代の地形をそのまま表しているものであり、192号墳と南西部が接していることから、同古墳墳丘の盛り土を補充するために隣接地の土採りを行ったものと考えられる。

このように古墳群内において、この様な皿状遺構の地形を残しているのは極めて珍しい事例である。遺物は検出されていない。



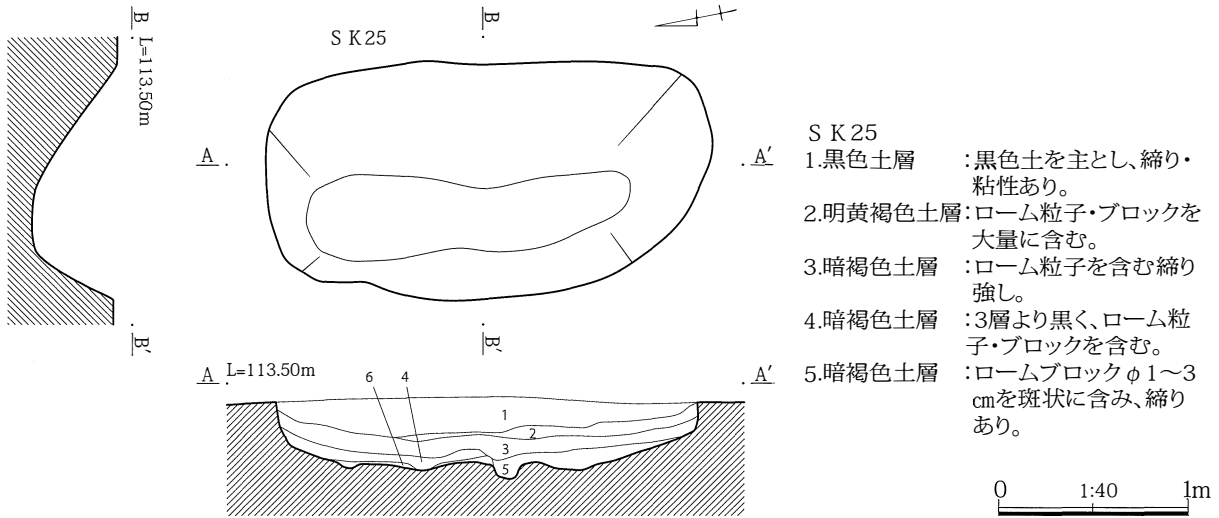
第28図 皿状遺構平面図及び断面実測図

○S K 25 (第 29 図 図版 10 - 3 ~ 4)

この土坑は、206 号墳の南側 3 m の C - 4 グリッドに位置し、平面形は不正楕円形で大きさは、南北 2.35 m × 東西 1.25 m × 深さ 40 cm である。主軸方位は N - 10° - E である。

この土坑は古墳周溝の堆積土と同じ土層であり、遺骸埋葬施設・土壙墓ということも考えられる。土坑底はほぼ平坦であるが、底の位置が西側に寄っており、西壁は急角度で、東壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は検出されていない。



第 29 図 S K 25 平面図及び断面実測図

○弧状遺構 (第 30 図・図版 10 - 2)

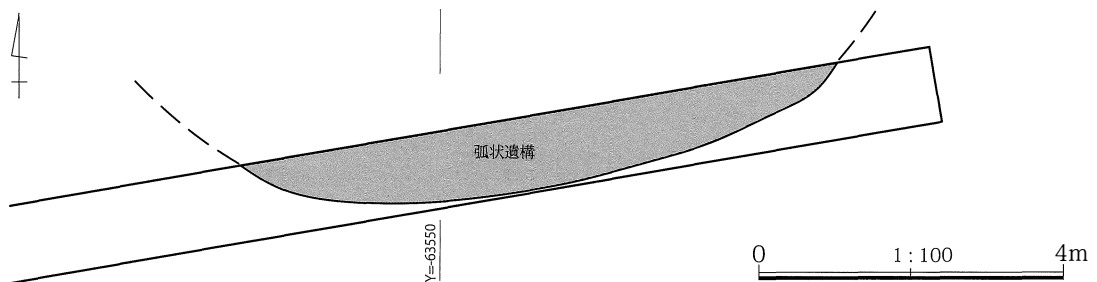
調査最終日に 62 号墳の周溝確認のため、東側にパワーショベルのバケットの幅でトレンチ調査を実施したところ、B - 6・7 グリッドの位置に黒色土の弧状の遺構を確認した。東西 5.5 m の弧としては、直径 10 m を数える円形を推測することができた。その為、古墳が発見されたものと考えた。

その後、擁壁工事立ち合い時に本庄市教育委員会でトレンチ調査の北側に東西方向の試掘を行ったところ、遺構を把握することができなかった旨報告があった。

よって、この弧状の遺構は古墳としては認識しないこととなった。性格不明の遺構である。

遺物は検出されていない。

遺構としては、古墳と考えるのが必然であるが、北側の隣地の開発があれば古墳となる可能性もあるかもしれない。E 地点北側の発掘調査に期待したい。



第 30 図 弧状遺構平面確認図

第3表 62号墳埴輪観察表

挿図番号	写真図版	器種	A法量単位cm()は推定 B成形 C整形・調整 D胎土・材質 E色調 F残存度 G備考 H出土層位・位置
12図-1	図版13	馬形埴輪	A.径(4.2)、残存高4.1 B.手捏 C.外面ナデ 設置部ヨコナデ 内面ヨコナデ D.チャート・白色粒・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.飾り鈴片 G.上部に刻みあり H.覆土
12図-2	図版13	馬形埴輪	A.径(4.8)、残存高3.8 B.手捏 C.外面ナデ 設置部ヨコナデ 内面ナデ D.微砂粒 E.内外-にぶい橙 F.飾り鈴片 G.上部に刻みあり、内部に中空の窪みあり H.覆土。
12図-3	図版13	馬形埴輪	A.残存長6.7 B.粘土紐積み上げ 带状粘土を添付 C.外面斜ハケ 帯部横ハケ 内面円筒部縦ナデ D.チャート E.内外-明赤褐 F.革帯部片 G.带状突帯に円形の剥離痕あり、飾り鈴の剥落か? H.覆土
12図-4	図版13	人物埴輪	A.残存長10.9 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け 人物足の剥離痕か C.外面突帯下部縦ハケ 同上部ナデ 内面縦ナデ D.チャート・白色粒・褐色粒 E.外-にぶい橙・内-橙 F.台部片 G.円筒器台上に2本の突帯、台上部は丸く仕上げられている H.覆土
12図-5	図版13	人物埴輪	A.残存長7.4 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面横ハケ D.φ1cm片岩・片岩粒 E.外-にぶい褐・内-明赤褐 F.裾部片 G.服の裾がスカート状に開いた箇所か? H.覆土
12図-6	図版13	(馬形埴輪)	A.残存長6.5 B.粘土紐積み上げ C.外面ハケ 内面ハケ後ナデ D.チャート・白色粒 E.外-明赤褐・内-橙 F.紐部片 G.馬革帯部の可能性 H.覆土
12図-7	図版13	(形象埴輪)	A.残存長4.1 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ、突帯ヨコナデ 内面ナデ D.片岩・チャート・白色粒・黒色粒 E.外-明褐・内-橙 F.胴部片 G.突帯断面が三角形で、突帯下部調整に一部突帯とは方向が異なる調整がある H.覆土
12図-8	図版13	(馬形埴輪)	A.残存長5.3 B.粘土紐積み上げ C.外面ナデ 内面ナデ D.片岩・白色粒・褐色粒 E.外-橙・内-明赤褐 F.破片 G.器面は平らで一部弧状沈線が認められる馬の顔の可能性? H.覆土
12図-9	図版13	(形象埴輪)	A.残存長6.6 B.粘土紐積み上げ C.外面ハケ 内面ナデ D.チャート・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.脚か G.外面赤色塗彩 H.覆土
12図-10	図版13	円筒埴輪	A.残存長6.2 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ後ナデ D.白色粒・マンガン粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 G.62号墳出土の円筒埴輪では唯一の突帯である H.覆土
12図-11	図版13	円筒埴輪	A.残存長5.3 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面斜ハケ後ナデ D.片岩・白色粒・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 G.外面赤色塗彩 H.覆土
12図-12	図版13	円筒埴輪	A.残存長4.5 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面斜ハケ後ナデ D.黒色粒・白色粒・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.口辺部片 G.外面赤色塗彩の可能性 H.覆土
12図-13	図版13	円筒埴輪	A.残存長5.9 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面縦ナデ D.片岩・白色粒・褐色粒 E.外-にぶい褐・内-明赤褐 F.胴部片 H.覆土
12図-14	図版13	円筒埴輪	A.残存長6.6 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面ナデ D.片岩・チャート・褐色粒 E.外-橙・内-にぶい褐 F.胴部片 H.覆土
12図-15	図版13	円筒埴輪	A.残存長6.4 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面縦ナデ D.片岩・チャート・白色粒・褐色粒 E.外-橙・内-にぶい褐 F.胴部片 H.覆土
12図-16	図版13	円筒埴輪	A.残存高9.3、底部径(11.0) B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面縦ナデ 円筒最下位指頭圧痕 底部植物圧痕 D.チャート・白色粒 E.内外-にぶい橙 F.底部片 H.覆土

第4表 192号墳埴輪観察表

挿図番号	写真図版	器種	A法量単位cm()は推定 B成形 C整形・調整 D胎土・材質 E色調 F残存度 G備考 H出土層位・位置
15図-1	図版13	器財埴輪	A.残存長4.5 B.粘土紐積み上げ C.外面縦・斜ハケ 内面斜ハケ D.白色粒・褐色粒・片岩 E.外-橙・内-明赤褐 F.上端破片 G.器財埴輪か H.覆土
15図-2	図版13	器財埴輪	A.残存長3.1 C.外面横ハケ 縦位沈線 内面ナデ D.白色粒・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.破片 G.器財埴輪か円筒に縦方向の鱗状に貼り付けたものが剥落している H.覆土
15図-3	図版13	器財埴輪	A.残存長9.2 B.粘土紐積み上げ C.外面ハケ後へラ状工具による直線の線刻が上下2段に描かれ、直線文が縦方向にランダムに刻まれる 下部にヨコナデに横位沈線が1条 内面縦ナデ D.褐色粒・チャート E.内外-明赤褐 F.破片 G.器財埴輪 H.№3
15図-4	図版13	(形象埴輪)	A.残存長4.9 B.粘土紐積み上げ 孔部および下部に粘土貼り付け C.外面縦ハケ後ナデ 内面ナデ D.片岩・白色粒・褐色粒 E.外-明赤褐・内-にぶい赤褐 F.破片 G.四角い透孔を穿つ 孔の同一高さに帯状隆起を持つ H.№4
15図-5	図版13	(形象埴輪)	A.残存長4.5 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ後ナデ 4条の斜方向平行沈線 内面ナデ D.片岩・白色粒・褐色粒 E.内外-明赤褐 F.破片 G.ひざ状工具により数ミリ毎に刺突してその部分をφ1cmの円形に穿つ H.覆土
15図-6	図版13	(器財埴輪)	A.残存長9.4 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面縦ナデ D.片岩・褐色粒 E.外-明褐・内-明赤褐 F.台部片 G.直径4cmの小透孔(ケズリ後ナデ)を穿つ、器材下端円筒 H.№6
15図-7	図版13	(器財埴輪)	A.残存長9.6 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面ナデ D.褐色粒・片岩・白色粒 E.外-にぶい褐・内-明赤褐 F.器材下端円筒 H.№7
15図-8	図版13	(動物埴輪)	A.残存長3.5 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面ナデ D.褐色粒・白色粒 E.内外-明赤褐 F.動物脚破片か H.覆土
15図-9	図版13	(動物埴輪)	A.残存長4.3 B.粘土紐積み上げ C.外面縦ハケ 内面ナデ D.白色粒・褐色粒・片岩 E.内外-赤褐 F.動物脚破片か H.覆土
15図-10	図版13	円筒埴輪	A.口縁部径(19.8) 残存長29.5. B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 口縁・突帯横ナデ 内面上部斜ハケ後ナデ 中央部は斜ハケ目調整後ヘラナデ 下半は斜ヘラナデ調整 口縁ヨコナデ D.褐色粒・片岩・白色粒 E.内外-明赤褐 F.1/4 G.2段目2箇所透孔(ヘラケズリ) H.№10・覆土。
15図-11	図版13	円筒埴輪	A.残存長7.0 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ナデ D.褐色粒・白色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 G.円形透孔(ヘラケズリ) H.№11
15図-12	図版13	円筒埴輪	A.残存長6.0 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面ナデ D.褐色粒・白色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 H.覆土
15図-13	図版13	円筒埴輪	A.残存長6.3 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面ナデ D.褐色粒・白色粒 E.内外-赤褐 F.胴部片 H.№13
15図-14	図版13	円筒埴輪	A.残存長3.9 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ D.褐色粒・白色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 H.覆土
15図-15	図版13	円筒埴輪	A.残存長7.0 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ後ナデ D.褐色粒・白色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 H.覆土
15図-16	図版13	円筒埴輪	A.残存長4.4 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面ハケ後ナデ D.褐色粒・白色粒・片岩 E.内外-明赤褐 F.胴部片 H.覆土
15図-17	図版14	円筒埴輪	A.残存長3.5 B.粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C.外面突帯横ナデ 内面斜ハケ D.片岩・白色粒 E.内外-明赤褐 F.胴部片 H.覆土

15 図-18	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 7.2 B. 粘土組織み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯ヨコナデ 内面ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-にぶい赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-19	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 3.0 B. 粘土組織み上げ 突帯貼り付け C. 外面突帯ヨコナデ 内面ナデ D. 褐色粒・白色粒・片岩 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-20	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 3.6 B. 粘土組織み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯ヨコナデ 内面ナデ D. 褐色粒・チャート・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-21	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 3.7 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面斜ハケ D. 褐色粒・灰色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 外面赤色塗彩か H. 覆土
15 図-22	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.6 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-23	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.0 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 横ナデ 内面ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 透孔(窓ケズリ後指ナデ) H. 覆土
15 図-24	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.7 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 透孔(ヘラケズリ) H. 覆土
15 図-25	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.2 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面縦ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 外-明褐・内-にぶい褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-26	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 6.2 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・片岩 E. 内外-にぶい褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-27	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 8.3 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・片岩 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. No. 27
15 図-28	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.0 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・片岩・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-29	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 10.9 B. 粘土組織み上げ 突帯貼り付け 剥落 C. 外面縦ハケ 突帯ヨコナデ 内面斜ハケ後ナデ D. 褐色粒・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 破片 H. 覆土
15 図-30	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 6.8 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 白色粒・褐色粒 E. 内外-明褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-31	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 3.1 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 横ナデ 内面斜ハケ D. 褐色粒・片岩 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-32	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.2 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
15 図-33	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.8 B. 粘土組織み上げ C. 外面ハケ 内面ナデ D. 褐色粒・片岩 E. 外-赤褐・内-明赤褐 F. 胴部片 G. 外面に 1 本沈線あり H. 覆土
15 図-34	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.0 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面斜ハケ後ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. No. 34

第 5 表 205 号埴輪観察表

挿図番号	写真図版	器種	A 法量単位cm ()は推定 B 成形 C 整形・調整 D 胎土・材質 E 色調 F 残存度 G 備考 H 出土層位・位置
20 図-1	図版 14	人物埴輪	A. 残存長 6.6 B. 中実造り C. 外面ナデ 内面ハケナデ後 頭部に添付 美豆良剥落 D. 白色粒・チャート・黒雲母 E. 外-明赤褐 F. 頭部上げ美豆良 G. 剥落面にハケ調整後貼付 H. 覆土
20 図-2	図版 14	人物埴輪	A. 残存長 2.3 B. 手捏 C. 外面ナデ D. 白色粒・褐色粒 E. 外-明赤褐 F. 首飾り勾玉 2/3 G. 勾玉 H. 覆土
20 図-3	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 5.1 C. 外面ナデ 内面ナデ D. 片岩・石英・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 破片 G. 轡手綱片?直径 3cm の円形隆帯内に 1 × 9mm のナイフで開けた細長い孔あり H. 覆土
20 図-4	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 8.7 厚 3.4 B. 粘土組織み上げ C. 外面ハケ 帯状突帯添付 突帯上にハケ 横ナデ 内面ハケ D. 片岩・白色粒・黒雲母 E. 内外-明赤褐 F. 腰部帯片か G. 帯状突帯に鈴剥落痕か H. 覆土
20 図-5	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 13.4 B. 粘土組織み上げ C. 外面斜ハケ ナデ 内面横ハケ ナデ D. 片岩・白色粒・黒雲母 E. 内外-明赤褐 F. 馬胴下部から足の付け根にかけての破片 H. 覆土
20 図-6	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 6.6 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面ハケ D. 片岩・白色粒・灰色粒・黒雲母 E. 内外-明赤褐 F. 破片 H. 覆土
20 図-7	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 8.6 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面縦ハケ D. 白色粒・チャート・黒雲母 E. 外-明赤褐・内-明褐 F. 破片 G. 内面剥落 90% 以上 H. 覆土
20 図-8	図版 14	馬形埴輪	A. 残存長 6.1 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ ナデ 内面ハケ後ナデ D. 白色粒・チャート E. 内外-明赤褐 F. 破片 H. 覆土
20 図-9	図版 14	(動物埴輪)	A. 径(10.0)・残存長 4.0 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面縦ナデ D. 褐色粒・白色粒 E. 内外-明赤褐 F. 動物足片か G. 器種・部位不明 H. 覆土
20 図-10	図版 14	(動物埴輪)	A. 残存長 6.8 B. 中実造り C. 外面縦ハケ D. 片岩・白色粒 E. 外-にぶい褐 F. 動物足・鳥首片か G. 断面槽円形 上部及び表面に縦方向の剥離痕あり H. 覆土
20 図-11	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 2.3 B. 粘土組織み上げ C. 外面ナデ 内面ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 破片 G. 器種・部位不明、φ 1.5cm の円孔を穿っている H. 覆土
20 図-12	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 2.4 B. 粘土組織み上げ C. 外面横ナデ 内面丁寧ナデ D. 片岩・白色粒・褐色粒 E. 外-明赤褐 F. 破片 G. 器種・部位不明 突出部に直する内面器肉が薄く 5mm ほどで内面となる H. 覆土
20 図-13	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 3.4 B. 粘土組織み上げ C. 外面ハケ 斜線刻 横ナデ 内面ハケ ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-橙 F. 破片 G. 盾・鞍形埴輪か H. 覆土
20 図-14	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 6.3 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 2 本セットで「X」字状に線刻 内面ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 破片 G. 盾・鞍形埴輪か、外面赤色塗彩 H. 覆土
20 図-15	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 6.4 B. 粘土組織み上げ、突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ ナデ D. 片岩 E. 内外-橙 F. 破片 G. 器台の丸く天井を設けたところは突帯部から大きく上部が剥落している H. 覆土
20 図-16	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 7.2 B. 粘土組織み上げ 突帯貼り付け C. 外面ハケ 突帯横ナデ 内面ナデ D. 片岩・白色粒 E. 内外-橙 F. 破片 G. 平坦な板状の壁面であり湾曲がなく家形埴輪の可能性 H. 覆土
20 図-17	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 7.9 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 内面縦ナデ D. 片岩・褐色粒 E. 外-にぶい橙 内-明褐 F. 破片 G. 器財円筒 H. 覆土
20 図-18	図版 14	形象埴輪	A. 残存長 10.3 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ ナデ 内面斜ハケ ナデ、下部に横ナデ D. 片岩・白色粒・チャート E. 外-明赤褐・内-明褐 F. 破片 G. 復元実測 H. 覆土
20 図-19	図版 14	円筒埴輪	A. 口径(20.0)、残存高 15.0 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ、突帯貼り付け、横ナデ、口縁部横ナデ、内面横・斜ハケ、ナデ、口縁部横ナデ D. 片岩・黒色粒・チャート E. 内外-明赤褐 F. 口縁部 2 段破片 G. 復元実測 H. No. 19
20 図-20	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.6 B. 粘土組織み上げ C. 外面縦ハケ 口縁横ナデ、内面斜ハケ 口縁部横ナデ D. 片岩・チャート E. 内外-にぶい褐 F. 口縁部破片 H. 覆土

20 図-21	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 8.1 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ ナデ D. 白色粒・片岩・褐色粒 E. 内外-明褐 F. 胴部片 G. 透孔(ヘラケズリ) H. № 21
20 図-22	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 7.0 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯横ナデ 一部突帯上にハケ 内面縦ハケ ナデ D. 片岩・灰色粒・褐色粒・黒雲母 E. 外-明褐・内-褐 F. 胴部片 H. 覆土
20 図-23	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 8.5 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ ナデ D. 片岩・白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 円形でない透孔?(ヘラケズリ) H. № 23
20 図-24	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.9 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面縦ハケ 突帯横ナデ 内面斜ハケ D. 片岩・白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 透孔(ヘラケズリ、ナデ) H. 覆土
20 図-25	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 3.2 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面突帯横ナデ 内面縦ハケ D. 片岩・白色粒・黒雲母 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 北周堀
20 図-26	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 2.4 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 白色粒・チャート E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 G. 透孔(ヘラケズリ ナデ) H. 覆土
20 図-27	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.5 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 横ナデ 内面ハケ D. 白色粒・片岩 E. 内外-橙 F. 胴部片 H. 覆土
20 図-28	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 5.3 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面斜ハケ D. 片岩・黒雲母・白色粒 E. 内外-赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
20 図-29	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.1 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面横ハケ D. 片岩 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
20 図-30	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.2 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 横ナデ 内面ハケ、ナデ D. 片岩・チャート・黒雲母 E. 内外-明赤褐 F. 破片 H. 覆土
20 図-31	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 7.3 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 片岩・灰白色 E. 外-明赤褐・内-橙 F. 破片 H. 覆土
20 図-32	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 4.7 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面ナデ D. 白色粒・片岩・褐色粒 E. 内外-にぶい赤褐 F. 破片 H. 覆土
20 図-33	図版 14	円筒埴輪	A. 残存長 6.3 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面縦ナデ D. 片岩・白色粒 E. 外-にぶい黄橙・内-橙 F. 破片 H. 覆土

第 6 表 207 号埴輪観察表

挿図番号	写真図版	器種	A 法量単位cm ()は推定 B 成形 C 整形・調整 D 胎土・材質 E 色調 F 残存度 G 備考 H 出土層位・位置
26 図-1	図版 15	人物埴輪	A. 残存長 5.2 C. 外面縦ハケ ナデ D. 白色粒・チャート・黒色粒 E. 外-明赤褐 F. 上着裾片か G. 裏面剥離痕 H. 覆土
26 図-2	図版 15	(馬形埴輪)	A. 残存長 2.4 径(8.0) B. 粘土紐積み上げ C. 外面ハケ ナデ 内面ナデ D. 白色粒・黒色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 破片 G. 馬形埴輪の顔部分の破片か 轡部剥離痕あり H. 覆土
26 図-3	図版 15	(人物埴輪)	A. 残存長 5.0 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 内面ハケ 上部に剥離痕 D. 片岩・褐色粒 E. 内外-橙 F. 上着裾片か H. 覆土
26 図-4	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 3.3 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 口縁部横ナデ 内面斜ハケ 口縁部横ナデ D. 白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 口縁部破片 H. 覆土
26 図-5	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 2.9 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 口縁部横ナデ 内面ハケ 口縁部横ナデ D. 白色粒・褐色粒・灰色粒 E. 内外-明赤褐 F. 口縁部破片 H. 覆土
26 図-6	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 3.5 B. 粘土紐積み上げ C. 外面斜ハケ 口縁部横ナデ 内面斜ハケ 口縁部横ナデ D. 片岩・白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 口縁部破片 H. 覆土
26 図-7	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 3.4 B. 粘土紐積み上げ 突帯貼り付け C. 外面突帯横ナデ 内面ナデ D. 白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 突帯片 H. 覆土
26 図-8	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 3.8 B. 粘土紐積み上げ C. 外面縦ハケ 横ナデ 内面斜・横ハケ D. チャート・片岩・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土
26 図-9	図版 15	円筒埴輪	A. 残存長 2.8 B. 粘土紐積み上げ C. 外面斜ハケ 内面斜ハケ D. 片岩・白色粒・褐色粒 E. 内外-明赤褐 F. 胴部片 H. 覆土

第2節 縄文時代

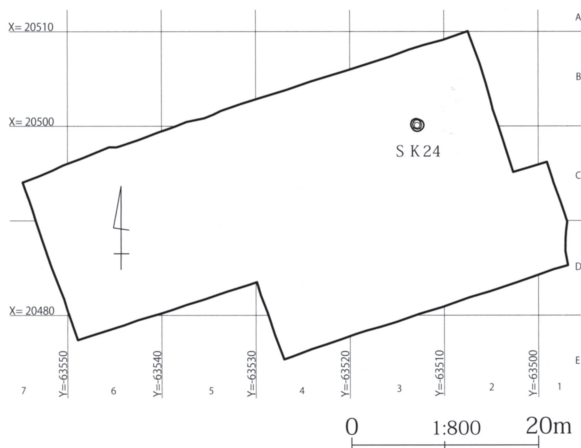
縄文時代の遺構は土坑1基が検出された。

○S K 24 (第31～33図 図版11-1・16)

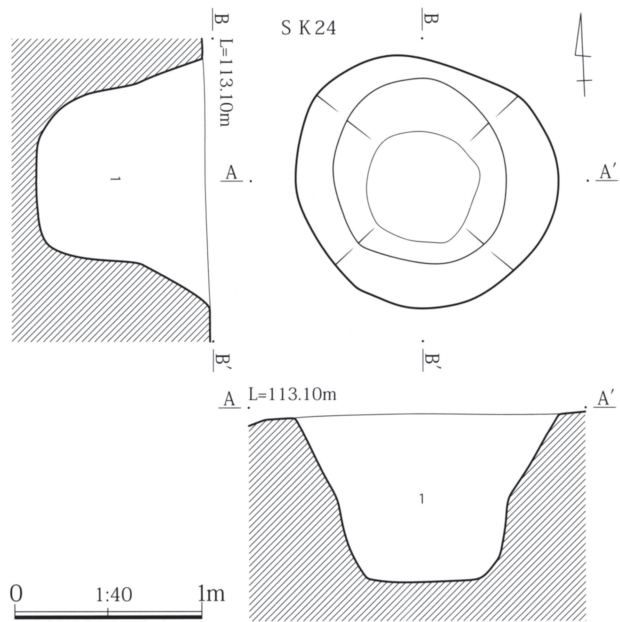
この土坑は、B・C-3グリッドに位置し、205号墳西周溝内側と接している。

平面形は円形で、規模は東西1.4m、南北1.32m、深さ0.92mである。断面形は「U」字状で途中で一段肩の張る形である。底面は平坦面を呈している。

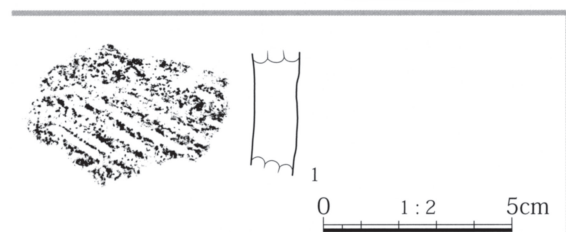
出土遺物は、縄文前期後半の諸磯式土器1点の出土である。並行する浮線文を横位に巡らせている。



第31図 縄文時代遺構全体図



1 明褐色土：Y P 粒子を多量に含み、 ϕ 5mmまでのローム粒子を含む。締りは非常に硬く、粘性はない。下層はやや黄みが強く、ローム粒子が多量に含まれ、締り・粘性が非常に強い。



第33図 S K 24 出土遺物実測図・拓影図

第32図 S K 24 平面図及び断面実測図

○縄文土器 (第34図 図版16)

縄文時代の遺物は、各古墳周溝内からの出土である。

縄文早期夏島式、前期前半黒浜式の繊維含有土器、前期後半諸磯式土器などの他に、中期加曾利E式土器が出土している。

○第1群土器は早期の土器である。(1)

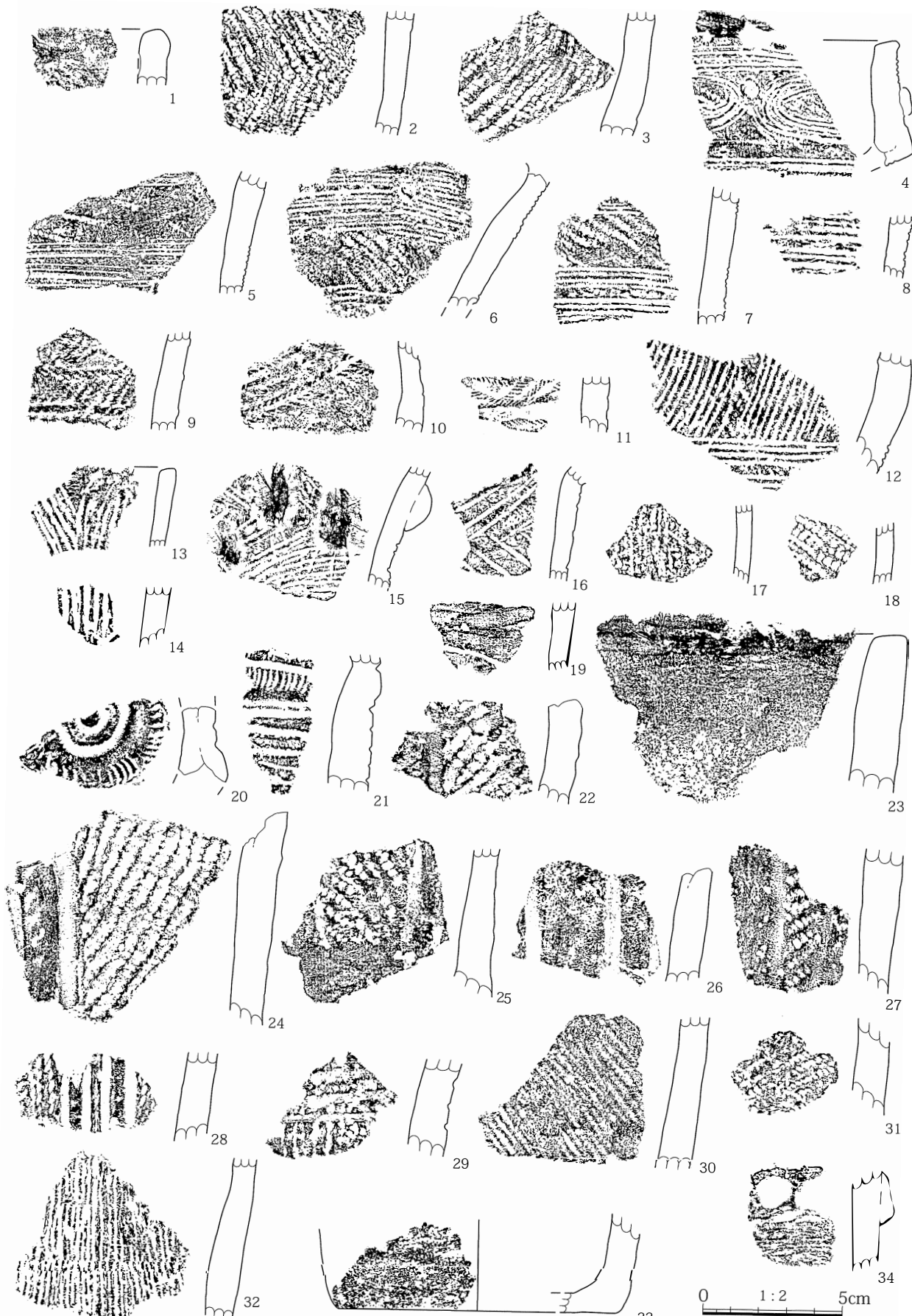
1は早期夏島式の口縁部破片である。口縁部は丸い端部で若干外反する。地紋にLR縄文の撚糸を施文している。

○第2群土器は前期前半黒浜式土器の一群である。(2・3)

2・3は、胎土に植物繊維を多量に含有し、0段多条の縄文を羽状に施文し、全体的には菱形縄文を構成している。

○第3群土器は、前期後半諸磯b式土器の一群である。(4～11)

4は浅鉢の口縁部で口唇部は平坦に作られて端部がやや外反する。口唇下に半截竹管による横位並



第 34 图 縄文時代土器実測図・拓影図

行沈線を2条施し、肩部までに半截竹管による楕円形文を横方向に連続する。地紋は単節R L縄文である。ボタン状貼付文の剥落が見られる。

5～8は半截竹管による横位平行沈線文を施し、地紋は単節R L縄文である。

9～11は細い隆帯を貼り付けた浮線文に鋭利な刃物による斜めの刻みが施されている。

○第4群土器は、前期後半諸磯c式土器の一群である。(12～16)

12～16は、半截竹管による細かな集合沈線と櫛歯状工具による櫛描文である。

12は横位平行沈線文の上に斜位の平行沈線文を施文している。13は口縁部破片で、13・14は縦位の平行沈線を施文している。15・16は半截竹管による集合沈線が、綾杉文となる。15は縦長のボタン状貼付文が3個所付されている。

○第5群土器は、前期後半諸磯b式～c式の縄文施文土器である。(17～19)

17・18は単節R L縄文である。また、19は弧状沈線が一条ある。地紋は無文である。

○第6群土器は中期前半勝坂式土器である。(20・21)

20は円形の隆帯上に半截竹管による弧状の連続刺突文を施している。21は半截竹管による横位平行沈線を連続して施文し、隆帯上には半截竹管による刺突文を連続している。

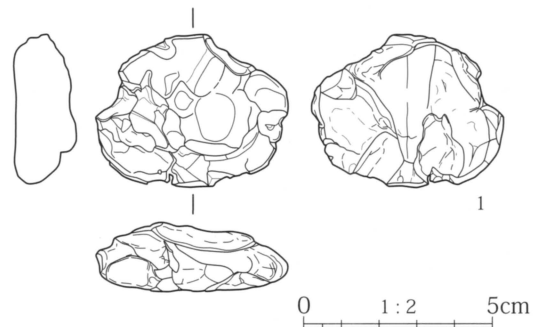
○第7群土器は中期後半加曽利E式土器の一群である。(22～33)

23は口縁部破片である。22・24～27は垂下する平行沈線間を擦り消している。23の口縁は無文である。28は2本の垂下する隆帯、29は3本の横位沈線が施されて入れている。28・29はR Lの撚糸文である。30は無節L縄文、他は単節L R縄文である。

33は底部破片で底径は直径10cmである。

34は横位隆帯に指頭圧痕を連続施文している。

器面はヘラ削りで整形されており、弥生時代前期土器の可能性はある。



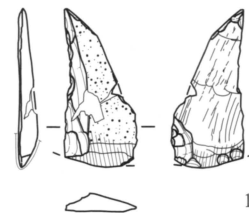
第35図 特殊遺物実測図

○特殊遺物 (第35図-1 図版16)

1は粘土塊を片手で握ったもので、楕円形の形状で、大きさは縦4cm、横5cm、厚さ1.8cm、重さ27gである。

その粘土塊が火受けして土器化したものである。楕円形の縁辺部はヒビが入っている。

極めて珍しいものである。時期は不明。

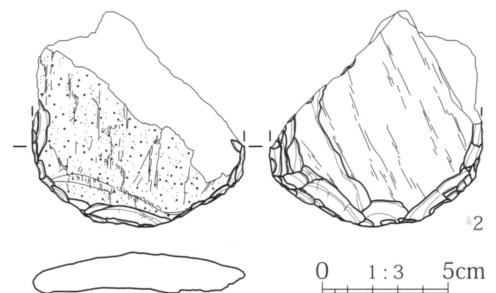


○縄文石器 (第36図-1・2 図版16)

石器は、打製石斧が2点である。

1は打製石斧の先端部破片で顕著な摩滅痕が認められる。石材は黒色頁岩である。重量は10.12g

2は打製石斧の先端部が縦に剥落したもので、先端部は両面良く摩滅。破片の一番長辺に加工痕を持つ破片である。石材は結晶片岩である。重量は133.20g



第36図 石器実測図

第3節 その他

○土 坑 (第 37 ～ 39 図 図版 11 - 4 ～ 7 ・ 12 - 1 ～ 27 ・ 15 第 7 表)

土坑は 28 基が検出された。1 基 S K 24 は縄文時代と特定できたので縄文時代の章の中で、1 基 S K 25 は古墳時代の土壇墓と考えられ古墳の章の中で取り扱う。

それ以外がすべて時期不明である。

円形土坑については、ほぼ同一時期のものである。この円形土坑は、古墳の裾を墳丘内側に掘り進め、耕作地拡大のため根切り溝までの間の土地利用と、墳丘裾の土地利用を 205 号墳に良好に認めることができる。

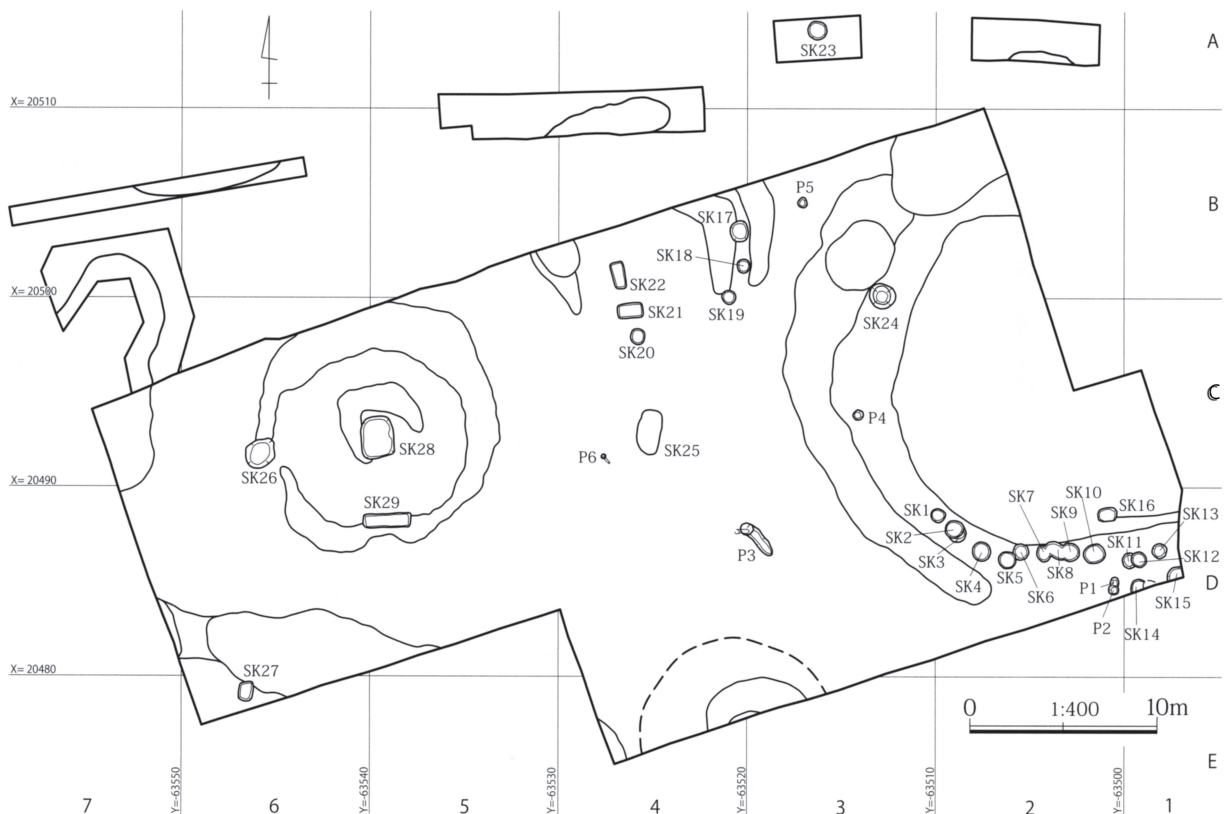
S K 1 ～ S K 20 ・ 23 の円形土坑の共通は、覆土が黒色土でその中にロームブロックを斑状に含んでいる。覆土は分層することなくほぼ 1 層である。掘った土を一気に埋め戻している。

遺物が出土したのは、S K 23 だけである。先に記されているように他の土坑と同じ円形土坑であり、覆土は黒色土にロームブロックを斑状に混入しており、他の円形土坑と同じ時期と考えられる。遺物は須恵器の長頸壺である。この遺物は混入品と考えられる。

S K 26 は、不整円形で浅く、覆土は黒色土層 1 層である。覆土はローム粒子を若干混入・炭化物 ϕ 1 cm 弱を多量に混入。片岩のブロックで割れたものが全体に混入する。火受けしたものか。

S K 27 は、隅丸長方形で、深さは浅く 10cm であり、焼土・炭化物混土層であるが、その中に白い焼骨が検出されている。骨片は小さいため人体か動物かは判断できなかった。土坑の壁・床は焼けた状態ではないため、穴を掘った中に焼土・炭化物・焼骨等を埋めたと考えられる。

S K 28 は 207 号墳のほぼ中央に位置している。中央に位置する遺骸埋葬施設と考えられたが、



第 37 図 土坑・ピット全体図

土坑の内部に川原石が多量に詰め込まれ、石と石の間は隙間があり、新しい時期の土坑である。

S K 29は、207号墳の南側周溝に位置しているが、古墳とは関係のない他の円形土坑と同じような黒色土をベースにロームブロックを斑状に含有している。掘り上げた土を一気に埋め戻している。

S K 21・22は覆土が表土であり、近現代の所産と考える。

○ピット・斜めピット（第40図 第8表）

ピット4基、斜めピット2基が検出された。ピット1・2・4・5の4個所で単独ピットである。

斜めピットは手の届く範囲で調査しているが、各々あと40～50cmは掘削してあることをピンポールで刺して確認。人工的に掘られたものと思われるが、性格は不明である。斜めピット3・6の大きさは次のとおりである。

ピット3は確認面の平面形は楕円形で、大きさは東西38cm、南北32cmである。

穴の底までは調査できなかったが、調査したのは腕の長さ70cmでそれより、さらに50cmは掘り進めることができることを確認している。この穴の斜め角度は30度である。穴の長さは1.2mある。主軸方位はN-22°-Wである。

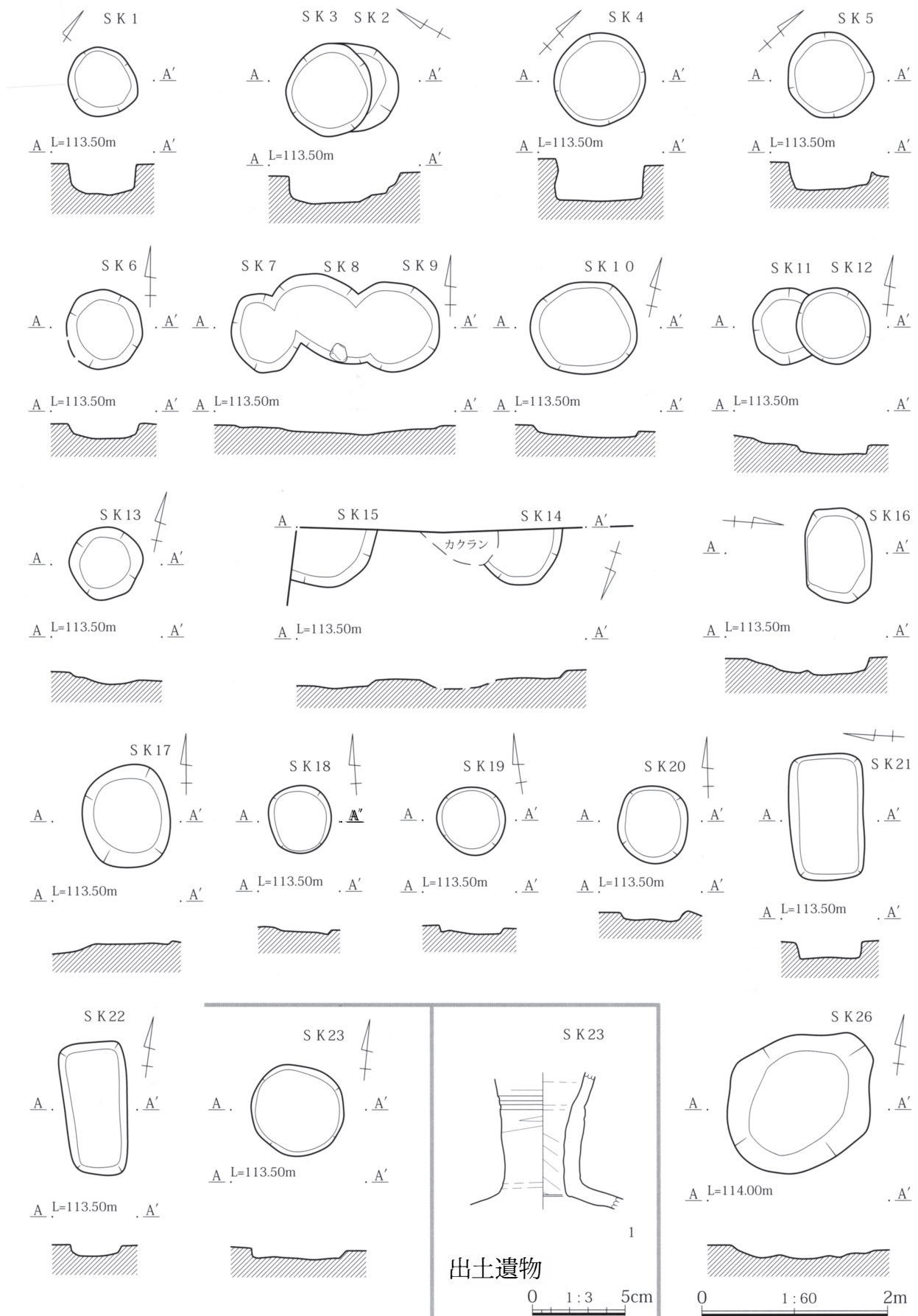
ピット6は確認面の平面形は長楕円形で、大きさは東西35cm、南北57cmである。穴の底までは調査できなかったが、調査した腕の長さ70cmでそれより、さらに40cmは掘り進めることができることを確認している。この穴の斜め角度は40度である。穴の長さは1.1mである。主軸方位はN-25°-Wである。

斜めピットは、本地点で2箇所発見されている。この斜めピットは長沖古墳群久保地区D地点でも2箇所確認されており、今回の発見で4箇所となった。この斜めピットは規格性はなく、その配置においても特長はない。主軸方位についても、S K 3はN-25°-W、S K 6はN-25°-Wであり、D地点ピット5はN-22°-W、同ピット6はN-25°-Wである。

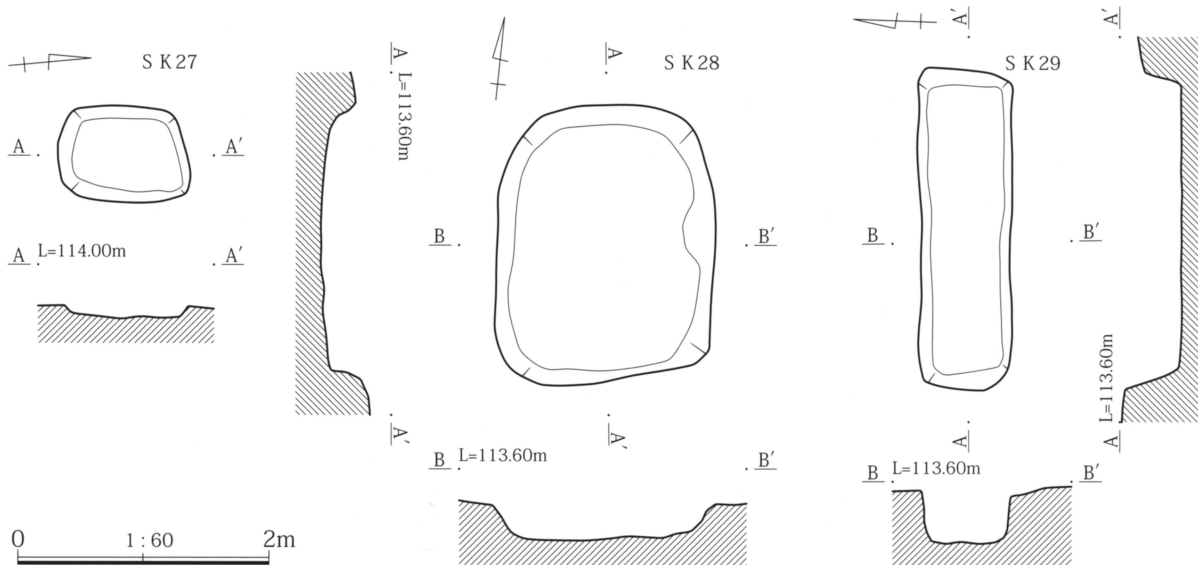
この斜めピットについては、人工的なピットとも考えてきたが、口径や主軸方位も異なっており人工的なものではなく動物の巣穴の可能性もある。

第7表 土坑一覧

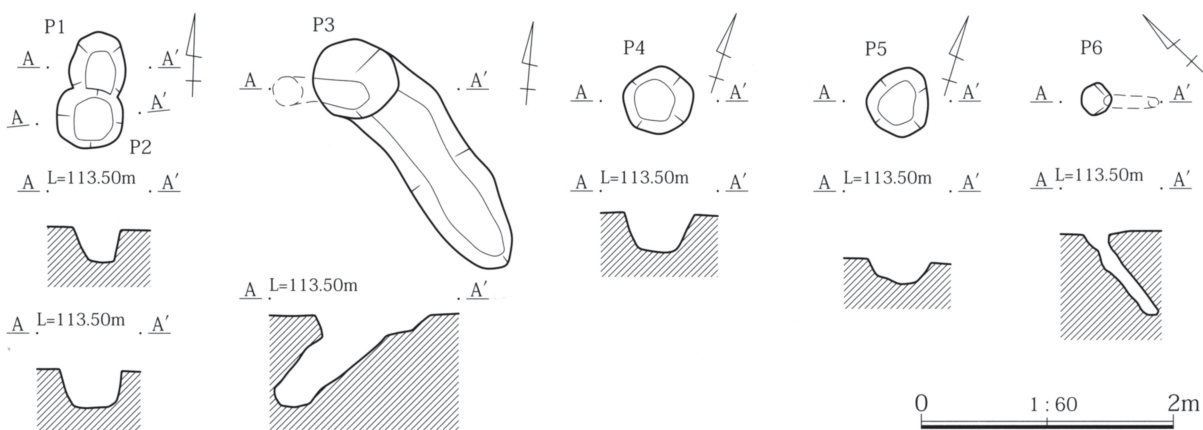
遺構名	平面形	規模 (cm)			位置	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
S K 1	円形	78	74	33	D-2・3		
S K 2	円形	100	92	30	D-2		
S K 3	円形	96	(60)	23	D-2		
S K 4	円形	100	96	45	D-2		
S K 5	円形	92	92	29	D-2		
S K 6	円形	84	82	18	D-2		
S K 7	円形	86	(62)	12	D-2		
S K 8	楕円形	(124)	80	13	D-2		
S K 9	円形	102	96	10	D-2		
S K 10	円形	112	96	11	D-2		
S K 11	円形	82	(62)	8	D-1		
S K 12	円形	82	79	14	D-1		
S K 13	円形	80	76	14	D-1		
S K 14	円形	(88)	58	6	D-1		
S K 15	円形	(88)	(64)	8	D-1		
S K 16	楕円形	102	70	19	D-2		
S K 17	円形	100	94	3	B-4		
S K 18	円形	72	66	7	B-4		



第 38 図 土坑平面図・断面図及び出土遺物実測図



第 39 図 土坑平面図及び断面実測図



第 40 図 ピット平面図及び断面実測図

遺構名	平面形	規模 (cm)			位置	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
S K 19	円形	74	74	6	C-4		
S K 20	円形	84	76	10	C-4		
S K 21	長方形	136	80	22	C-4		現代
S K 22	長方形	145	68	13	B-4		現代
S K 23	円形	100	98	12	A-3	長頸壺	
S K 24	円形	140	132	92	B・C-3	縄文土器	縄文土坑
S K 25	長楕円形	214	126	43	C-4		古墳時代 土壙墓か
S K 26	不整円形	179	140	16	C-6		炭化物・片岩ブロック混入
S K 27	隅丸長方形	104	76	11	E-6	焼骨	焼骨・焼土・炭化物混入
S K 28	隅丸長方形	218	172	37	C-5		礫大量に混入 近現代
S K 29	長方形	254	75	46	D-5		耕作穴?

第 8 表 ピット一覧

遺構名	平面形	規模 (cm)			位置	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
P 1	円形	(50)	46	27	D-2		
P 2	円形	(54)	54	29	D-2		
P 3	円形	68	63	72	D-4		斜め穴
P 4	円形	56	52	33	C-3		
P 5	円形	56	50	20	B-3		
P 6	円形	26	23	65	C-4		斜め穴

○製鉄関連遺物 (第 41 図 図版 15 第 9 表)

遺跡内から製鉄炉壁などが 62・192・205・207 号墳から出土した。

この製鉄炉の壁断面は厚いもので 5cm を測り、表面がガラス状・スラグ状に溶け、鉛状の照りがある。総数で 35 点の出土があった。作図できたのは 10 点であり、合計重量は 517.91 g である。

大きさが第 41 図 9 以下のものについては図化していない。図化できなかった 25 点の重量は 149.24 g である。図化できたものと図化できなかったものの合計は、667.15 g である。

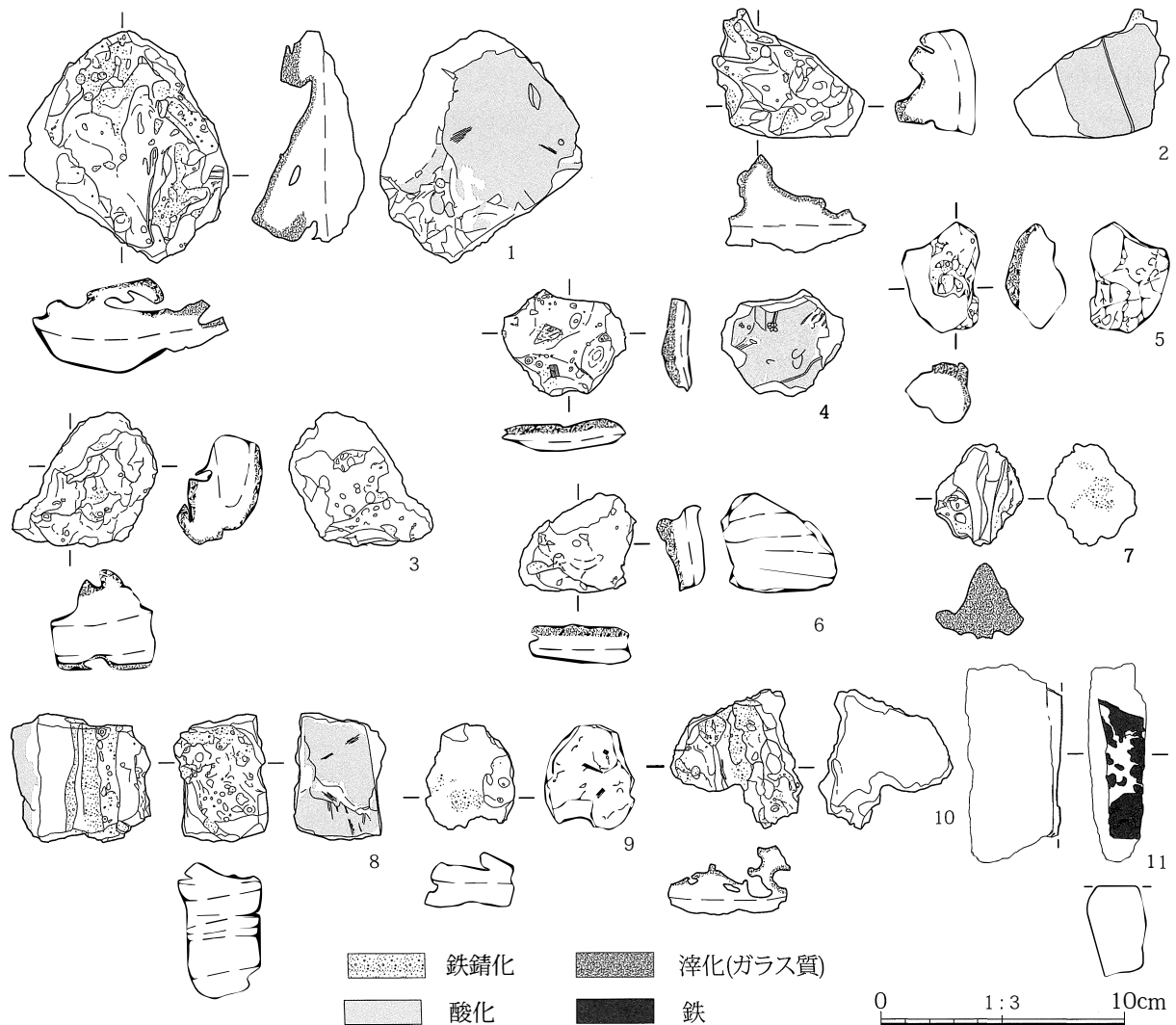
1 は最大の破片で 4.6mm の厚みを持ち、黒色で照りがある鉛状のガラス質になり表面が流れ出している。表面下は発泡している。壁面で一回は鉛状のフラットな面を持っており、その下 1.2cm は灰色の壁でさらに 1cm 位の厚さで酸化した赤色の壁面を持っている。

2 は鉛状のガラス質は厚さ 2.5cm で面的なものではなく、表面は発泡による起伏が大きく鉄分が多いようで鉄錆に覆われている。壁面から 5mm が還元壁でその下は酸化壁が 5mm と薄い。

3 は壁から剥がれ落ちた黒色発泡した物体で厚さ 4.2cm である。

4 は厚みが 1.4mm と薄く、表面が鉛状で 1cm の厚さで黒色の発泡質があり、還元グレー、酸化赤色壁は 4mm と薄い状況である。

5 は壁から剥がれ落ちた黒色発泡した物体で厚さ 2.5cm である。



第 41 図 製鉄関連遺物実測図

6は厚みが2.0mmと薄く、表面が黒色・白灰色の飴状で1.5cmの厚さで黒色の発泡質があり、還元グレー壁は5mmと薄い状況である。赤色酸化壁は認められない。

7は壁から剥がれ落ちた黒色発泡した物体で厚さ3.1cmである。

8は厚さ5.7cmと厚く断面は縞状に観察できる。表面が白灰色の飴状で気泡が小さく表面に斑状に認められる。発泡層の厚さは2.7cmで黒色の発泡質があり、最低3回の発泡層が認められる。当初の壁面には多量の鉄錆が層を作っている。還元グレー壁は2.2mmと厚く、赤色酸化壁は1cm厚である。

9は厚みが2.3cmで、黒色発泡物は1.7cm、還元グレー壁は薄く、赤色酸化壁は認められない。

10は厚みが2.9cmで、黒色発泡物は2.4cmで表面は、黒色・白灰色の飴状で還元グレー壁は5mmと薄く、赤色酸化壁は認められない。鉄が多く含まれているのか重さがある。

また、11は石英の金床石破片である。(第41図11)表面部の残存があり、鉄を敲いた時の5mm前後の点状の1点1点の打痕が残されている。

これら製鉄関連遺物については、製鉄精錬炉壁であり、時代的な認定は難しいが、奈良・平安時代の遺構が存在している可能性が高い。

今回発見された製鉄関連炉壁は、製鉄操業を何回か繰り返した結果である。ただし、これらの炉壁は豎型炉の壁を壊して鉄を取り出した結果存在するもので、本来壁の割れ面はシャープであるものがローリング現象で突出した個所や割れ面の角が擦れてなくなっている。このことから当地点で製鉄精錬作業を行ったものではなく、近隣で製鉄精錬を行っていることは間違いないことである。

なお、鋳物師集団が金屋に移住してきた記録があり、鋳物師と金屋という地名関連がある可能性がある」と指摘されている。(鈴木2005)

第9表 製鉄関連遺物一覧

挿図番号	写真図版	種別	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第41図-1	図版15	製鉄炉壁	62号墳覆土	9.6	8.3	4.6	151.54	壁が溶解して流動している
第41図-2	図版15	製鉄炉壁	62号墳覆土	3.3	6.3	3.8	53.71	
第41図-3	図版15	製鉄炉壁	205号墳覆土	5.5	5.8	4.2	67.85	
第41図-4	図版15	製鉄炉壁	207号墳覆土	4.4	5.0	1.4	20.88	壁としては厚みが薄い 上塗りした壁
第41図-5	図版15	製鉄炉壁	205号墳覆土	4.5	3.3	2.5	17.62	壁としては厚みが薄い 上塗りした壁
第41図-6	図版15	製鉄炉壁	205号墳覆土	4.1	4.8	2.0	24.55	壁としては厚みが薄い 上塗りした壁
第41図-7	図版15	製鉄炉壁	207号墳覆土	4.3	3.7	3.1	28.33	
第41図-8	図版15	製鉄炉壁	192号墳覆土	5.3	3.8	5.7	88.41	3回の壁の貼り直しが認められる
第41図-9	図版15	製鉄炉壁	205号墳覆土	4.3	3.7	2.3	18.84	壁としては厚みが薄い 上塗りした壁
第41図-10	図版15	製鉄炉壁	205号墳覆土	5.3	5.5	2.9	46.18	壁としては厚みが薄い 上塗りした壁
第41図-11	図版15	金床石	覆土	8.2	2.4	4.0	106.21	表面に鉄錆が付着している
炉壁合計							517.91	

第5章 自然科学分析

古墳周溝内堆積のテフラ分析

藤根 久・鈴木正章 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

長沖古墳群は、本庄市児玉町長沖に所在する5世紀中頃から7世紀後半にかけて築造された古墳群である。ここでは、192号古墳の周溝内から採取した軽石層および堆積物について、湿式篩分けを行い、軽鉱物および重鉱物組成、火山ガラスの屈折率測定を行った。

2. 試料と方法

分析試料は、192号古墳の周溝内から採取した軽石層と、最下層の連続堆積物3点である(表1)。なお、6層堆積物試料は、上位から各5cm厚で連続的に採取した。

表1 テフラ分析を行った試料

分析No.	遺構	断面	層位	試料No.	試料の特徴
1	192号古墳の周溝	東壁	4層	軽石層	黒褐色(2.5Y 3/1)軽石
2			6層(最下層)	No.1(5cm厚)	黒色(2.5Y 2/1)土壌、やや砂質
3				No.2(5cm厚)	黒色(2.5Y 2/1)土壌
4				No.3(5cm厚)	黒色(2.5Y 2/1)土壌、やや砂質

テフラ試料は、以下の方法で処理した。

(1) 湿潤で約26~30gを水を加えて超音波洗浄機で分散した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。なお、処理試料の乾燥重量を求めるために約10g程度を秤量して乾燥させた。

(2) 4φ篩残渣について、重液(テトラブromoエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。

(3) 軽鉱物については、簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従い、バブル(泡)型平板状(b1)、バブル(泡)型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破碎型フレーク状(c1)、急冷破碎型塊状(c2)に分類した。

(4) 重鉱物については、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、磁鉄鉱(Mg)を同定・計数した。

(5) 4φ篩残渣の火山ガラスは、横山ほか(1986)に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

3. 結果と考察

以下に、各試料の湿式篩分け結果、軽鉱物組成、重鉱物組成、火山ガラスの屈折率測定結果を示す。
分析No.1(4層、軽石層)

湿式篩分けを行った結果、4φ以上の残渣は処理試料の73.56%であった。1φ篩残渣が最も多く、全体の41.29%であった(表2)。1φ篩残渣中には、淡黄褐色の軽石からなり、軽石の最大粒径は6mmであった(図版1-1a)。

表2 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果（上段：重量 g、下段：重量 %）

分析 No.	湿重重量 (g)	乾燥重量 (g)	砂粒分の粒度組成					重液分離	
			1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	>4 φ	軽鉱物	重鉱物
1	25.91	18.01	7.4368	3.4809	1.3896	0.9433	13.2506	0.1643	0.0371
			41.29	19.32	7.71	5.24	73.56	81.58	18.42
2	29.38	13.35	0.4074	0.9241	1.0416	0.7298	3.1029	0.1587	0.0643
			3.05	6.92	7.80	5.47	23.24	71.17	28.83
3	27.58	12.54	0.3000	0.8435	0.9243	0.6618	2.7296	0.3101	0.0594
			2.39	6.72	7.37	5.28	21.76	83.92	16.08
4	26.64	11.55	0.1834	0.5759	0.7483	0.6229	2.1305	0.1479	0.0502
			1.59	4.99	6.48	5.39	18.45	74.66	25.34

表3 4 φ 篩残渣中の鉱物組成（上段：重量 g、下段：重量 %）

分類群 分析No	石英 (Qu)	長石 (Pl)	不明 (Opq)	火山ガラス						ガラス 合計	軽鉱物 の合計	重鉱物					重鉱物 の合計	
				バブル（泡）型		軽石型		急冷破砕型				斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opq)		
				平板状 (b1)	Y字状 (b2)	繊維状 (p1)	スポンジ状 (p2)	フレーク状 (c1)	塊状 (c2)									
1	11	80	95	1	5		40			46	232	141	52		7	12	212	
	4.7	34.5	40.9	0.4	2.2		0.0	17.2	0.0	19.8	100.0	66.5	24.5	0.0	3.3	5.7	100.0	
2	15	143	35	2	6		4			36	229	141	33	10	49	4	237	
	6.6	62.4	15.3	0.9	2.6		1.7	7.9	1.7	15.7	100.0	59.5	13.9	4.2	20.7	1.7	100.0	
3	21	130	46	3	10		6	16	5	41	238	134	49	3	44	1	231	
	8.8	54.6	19.3	1.3	4.2		2.5	6.7	2.1	17.2	100.0	58.0	21.2	1.3	19.0	0.4	100.0	
4	20	145	51		16		2	21	13		52	268	130	49	5	34	4	222
	7.5	54.1	19.0		6.0		0.7	7.8	4.9	19.4	100.0	58.6	22.1	2.3	15.3	1.8	100.0	

重液分離を行った結果、軽鉱物の割合が 81.58% と高く、重鉱物の割合が 18.42% であった（表2）。4 φ 篩残渣中の軽鉱物組成では、火山ガラスはやや少なく、軽石型スポンジ状ガラス（p2）のほか、バブル（泡）型平板状ガラス（b1）やY字状ガラス（b2）が含まれていた。なお、黒褐色などの火山岩片（不明）が多く見られた。重鉱物は、斜方輝石（Opx）が多く、単斜輝石（Cpx）や磁鉄鉱（Mg）が含まれていた（表3）。

火山ガラスの屈折率測定では、軽石型の火山ガラスを測定した結果、範囲（range）が 1.5244-1.5300 の広い範囲を示し、平均値は 1.5283 であった（図1）。以上の特徴から、この軽石は浅間Bテフラ（As-B）と同定される。

分析 No.2 ~ 4（6層、最下層堆積物）

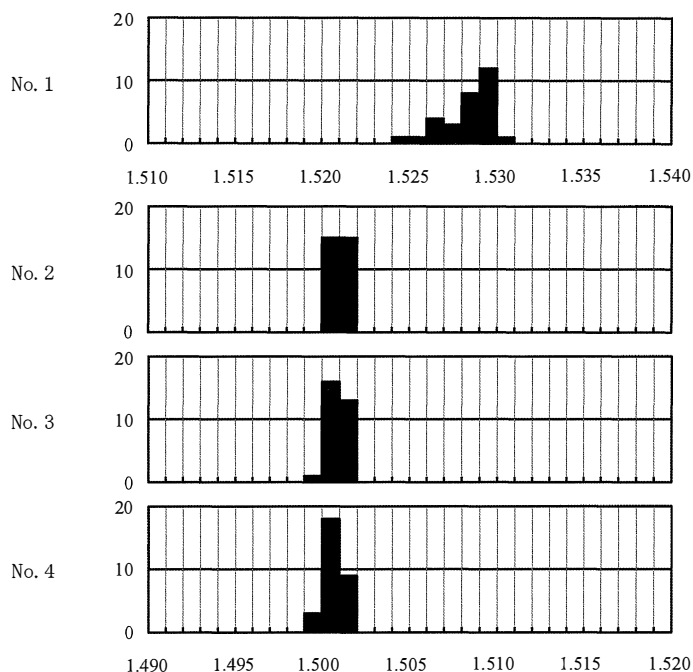
湿式篩分けを行った結果、4 φ 以上の残渣は処理試料の 18.45 ~ 23.24% であった。いずれの試料も 3 φ 篩残渣が多い（表2）。

重液分離を行った結果、いずれの試料も軽鉱物の割合が 71.17 ~ 83.92% と高く、重鉱物の割合が低い（表2）。

4 φ 篩残渣中の軽鉱物組成では、火山ガラスは少なく、15.7 ~ 19.4% であり、下位の No.4 試料がやや多い。火山ガラスの形態分類では、軽石型スポンジ状ガラス（p2）が目立ち、バブル（泡）型 Y字状ガラス（b2）、軽石型繊維状ガラス（p1）、急冷破砕型フレーク状ガラス（c1）などが含まれていた。重鉱物は、斜方輝石（Opx）が多く、磁鉄鉱（Mg）や単斜輝石（Cpx）を含み、角閃石（Ho）も僅かに含まれていた（表3）。

火山ガラスの屈折率測定では、主に軽石型火山ガラスを測定した結果、分析 No.2 では範囲（range）が 1.5000-1.5020（平均値：1.5011）、分析 No.3 では範囲（range）が 1.4999-1.5018（平均値：1.5009）、分析 No.4 では範囲（range）が 1.4995-1.5017（平均値：1.5008）で、いずれの試料も狭い範囲を示した（図1）。以上の特徴から、鉱物組成および火山ガラスの屈折率特性から、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）起源の火山ガラスを含んでいる。なお、特定の層に多いといった特徴は見られなかった。

分析No.



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.5244 - 1.5300	1.5283	30
1.5000 - 1.5020	1.5011	30
1.4999 - 1.5018	1.5009	30
1.4995 - 1.5017	1.5008	30

図1 火山ガラスの屈折率測定結果

以下に、町田・新井（2003）による各テフラの特徴について述べる。

浅間 B テフラ (As-B) は、AD 1108 年（天仁元年）に浅間火山から噴出した降下軽石 (pfa)、降下スコリア (sfa)、降下火山灰 (afa) からなり、分布は東に 150km 以上に及ぶ（町田・新井, 2003）。主な鉱物は、単斜輝石 (opx) と斜方輝石 (cpx) からなる。軽石ガラスの屈折率は 1.524-1.532、斜方輝石の屈折率 (γ) が 1.708-1.710 である。

榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) は、AD 491-500（早川ほか, 2015）に榛名火山から噴出した降下火山灰 (afa)、火砕流堆積物 (pfl) からなり、分布は東（南）に 80km に及ぶ。主な鉱物は、角閃石、斜方輝石、単斜輝石からなる。火山ガラスの屈折率が範囲 (range) : 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率が範囲 (range) : 1.707-1.711 である（町田・新井, 2003）。

4. おわりに

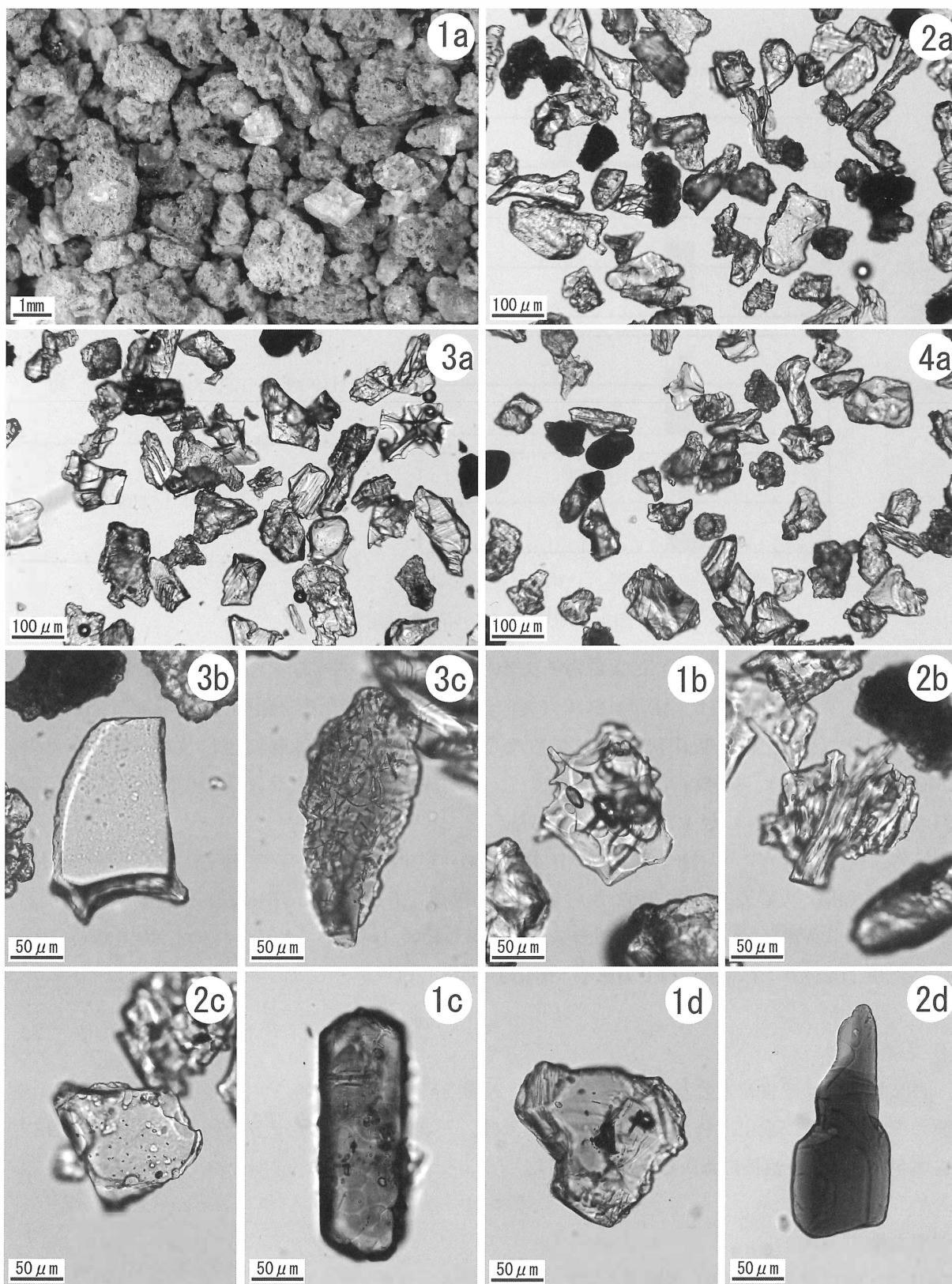
192 号古墳は 5 世紀末と考えられているが、周溝内最下層から榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) 起源の火山ガラスが検出された。この火山ガラスは、一次的に堆積したテフラ層ではないが、192 号古墳が築造された直後に降灰したことを示す。

引用文献

町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス. 336p, 東京大学出版会.

横山卓雄・檀原 徹・山下 透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25, 21-30.

早川由紀夫・中村賢太郎・藤根 久・伊藤 茂・廣田正史・小林紘一（2015）榛名山で古墳時代に起こった渋川噴火の理学的年代決定. 群馬大学教育学部紀要 自然科学編. 群馬大学, 63, 35-39.



図版 1 テフラ・堆積物中の火山ガラス・重鉱物

- 1a.1 φ篩残渣(分析 No.1) 2a.4 φ篩残渣の軽石(分析 No.2) 3a.4 φ篩残渣(分析 No.3)
 4a.4 φ篩残渣(分析 No.4) 3b. バブル(泡) Y型字状ガラス 3c. バブル(泡)型平板状ガラス
 1b. 軽石型繊維状ガラス 1c. 軽石型繊維状ガラス 2c. 破碎型フレーク状ガラス
 1c. 斜方輝石 1d. 単斜輝石 2d. 角閃石

第6章 まとめ

長沖古墳群久保地区E地点からは、古墳時代として62・192・205・206・207・208号墳の合計6基の円墳、皿状遺構、弧状遺構の他、土壙墓の可能性のあるものなどが発見された。

○古墳群の古墳規模

この調査エリア周辺では、一番古い古墳と考えられているのが調査区の道を挟んで南側に所在する54号墳である。この古墳は残存状態から墳丘が直径38m、高さ5m位で、東南側は藪となって不明であるが、西側の周溝は幅18m位と良好に残されている。この周溝の弧線を復元すると古墳周溝外縁で直径75mを測る円墳と考えられ、この地区最大の古墳である。

調査区では、古墳周溝外縁の直径が192号墳で50mと大きく、62・205号墳で30～36mと続き、206・207号墳の14m、そして208号墳の10mと続く。D地点の66号墳は21mである。

○周溝内の深穴について

192号墳北東周溝、205号墳北西周溝、206号墳北周溝、207号墳北東周溝に通常の周溝とは明らかに異なる不定形で深い個所が検出された。D地点の66号墳の北西部に於いても不定形な楕円形の深い穴が検出されている。一つの古墳に対して、周溝内の北側に深い穴が1個所存在するが、何のために存在しているかは不明である。不定形な深い穴は今報告で通称「周溝内深穴」とする。

周溝内深穴について、本庄市の他の古墳群を確認してみると63基を調査した西五十子古墳群について20号墳、61号墳の2基に同様な深穴が検出されているが、他の古墳については認められない。周溝内深穴が検出されているのは、長沖古墳群の特徴というものなのかもしれない。

○周溝の形状・掘削工区・掘り方

古墳の周溝は深さが一定ではなく、62・205・206号墳では南側の周溝の一部が現状では認められず、馬蹄形状となっている。

また、周溝については、掘削状況が場所個々で異なっており、62・192・205・207号墳では一つの古墳周溝内に掘削工区を持っているようである。

さらに、205号墳北西、206号墳北東、207号墳西側、62号墳北東部周溝は浅く掘られている。古墳の周溝は、192号墳を除き、205号墳、206号墳、207号墳は周溝を荒掘し、深く掘りすぎた所を埋め戻し、貼り床としている。この貼り床は、ローム層が2～4cmのブロックで斑状になっており容易に確認することができる。ただし、192号墳も調査地以外の周溝で貼り床があるかもしれない。

D地点66号墳も北側部で掘り方が検出されている。

古墳周溝の底位置も様々、周溝幅も様々であり、墳形が円墳でも凸凹が存在している。古墳構築の順序で残された古墳と古墳の空間でいかに大きく古墳を構築できるかがこの歪な周溝形状が物語っている。

○土壙墓・石槨の可能性

長沖古墳群において、円墳・前方後円墳・帆立貝式古墳などの古墳を208号墳まで確認しているが、古墳群内に墳丘を確認できない石槨（大人用）・小石槨（子供用・幼児用）・土壙墓など他の埋葬施設の存在が確認されていない。今回調査のSK25が土壙墓の可能性があると問題提起させていただきたい。今後、石槨なども発見される可能性は高い。

○古墳の密集度

今回の調査によれば 62・192・205・206・207・208 号墳の 6 基は長沖古墳群の中で古墳密集度の極めて高い個所である。古墳の占める割合は 2,500m²の調査区内に 1,586m²であり、古墳でないエリアと比べて古墳墓域エリアの占める割合が約 63%と高いことがわかる。

○浅間B軽石層について

古墳周溝覆土内の浅間B軽石降下堆積層について考えてみたい。浅間B軽石層は天仁元年（1108）に浅間山が噴火の際に降下堆積したものと考えられている。

古墳周溝埋没過程の期間が古墳時代後期から浅間B軽石が降下した時点で、500年の経過が認められる。周溝の底から何cm上に降下火山灰がレンズ状に堆積しているかを考えてみたい。ただし、確認できるのは周溝内深穴部のみである。

62号墳は、周溝底から20cm上層で厚さ3cmの降下堆積層が、レンズ状に堆積している。

192号墳は、周溝底から30cm上層で厚さ5cmの降下堆積層が、レンズ状に堆積している。

205号墳は、周溝底から45～55cm上層で厚さ8cmの降下堆積層が、レンズ状堆積としている。

206号墳は、周溝底から90cm上層で厚さ3cmの降下堆積層が、ほぼフラットに堆積している。

207号墳は、軽石の純堆積層は肉眼で検出されなかったが、覆土の中のどの位置に浅間B軽石が降下堆積しているか検討してみたい。周溝底から45cm上層に肉眼では確認できない攪拌された状態の軽石が分布している層を確認した。（藤根 久氏のご教示）

○周溝内の火山灰降下位置での古墳形成順

この周溝底から火山灰降下までの堆積を見た場合、一番深いのが206号墳の90cm、続いて205号墳の55cm、207号墳の45cm、192号墳の30cm、次に62号墳の20cmである。

周溝の自然堆積で古墳の形成順序を考えれば、火山灰が周溝の上部で発見されれば周溝に堆積した時間が多くかかったということで古い古墳ということになり、周溝底に近いものが新しいといえる。

この結果から206号墳が一番古く、205号墳→207号墳が続き、192号墳→62号墳と新しくなるという古墳形成順序となる。ただし、古墳の選地・古墳墳丘構築状況・古環境などの影響で、これがそのまま年代の差として捉えるのは問題かもしれない。

192号墳における浅間B軽石（1108年）の降下堆積層が純層で発見されたが、この層を挟んで上下に埴輪の破片が確認された。これは、浅間B軽石の降下堆積があった後も古墳墳丘の崩壊が続いていたことがわかる。古墳周溝埋没は、短期間ではなく先の火山灰の堆積から、1,000年以上というような比較的長い時間の事例が明らかとなった。

また、公卿塚古墳（本庄市北堀）の周溝調査で2枚の火山灰の降下堆積層を確認している。周溝底から8cm上で榛名山噴火（5世紀末：491～500年）（早川ほか2015）の火山灰Hr-S（旧FA）が6cm降下堆積し、10cmの黒色土堆積があった上に浅間B軽石層（1108年）が4cm降下堆積している。約600年の間で10cmしか堆積していない事例も報告がある。火山灰の降下堆積は、条件が同じであるが古墳周溝の覆土は様々な環境条件であり、今後この地域で問題意識を持って検討する必要がある。

○榛名山の火山灰の確認

榛名山の火山灰層（Hr-S）は、最新の研究「ウイグルマッチング法」により、実年代5世紀末（491-500年）が発表されている。（早川ほか2015）

この火山灰は、本庄市の西五十子古墳周溝において降下堆積層の純層が確認されているが、今のところ降下範囲の最南西端に位置している。

長沖古墳群の192号墳周溝内覆土最下層の科学分析により、榛名山火山灰の成分が検出され、火山灰が長沖古墳群にも降下していたことが確認され、降下範囲の拡大が確認された。(第5章参照)

192号墳は5世紀末以前の築造年代が判明したことになる。205・206・207号墳は周溝覆土の堆積が多く192号墳同様5世紀末の古墳である可能性があり、長沖古墳群の中で5世紀末の中期古墳群の在り方を検証したのかもしれない。

今後、古墳周溝覆土の火山灰を科学分析することで5世紀末以前の古墳を特定できる可能性がある。

○昭和24年に撮影された米軍の航空写真から長沖古墳群を考える(図版2・3)

この写真から古墳の墳丘を残している状況を地図に落としした場合と現在確認されている古墳全体図との違いを検討してみたい。

国土地理院U S A - R 511 - No.2 写真番号44 1200dpi

- ①古墳分布範囲の外側にも古墳の分布がある。
- ②現在竹藪で古墳の観測が出来ない個所について、撮影時に藪となっていない個所は古墳を観察することができる。
- ③現在までに多くの古墳が消失していることが確認できる。
- ④現行の古墳墳丘残存地点と照らし合わせ、違いを検討することができる。
- ⑤古墳全体図と航空写真の古墳位置とを重ね合わせてみると古墳が漏れている。

この記載漏れを追加、および都市計画道路環状1号線の17・18・19号墳が調査時の位置が不確定であり、C・E地点調査地点の191・192号墳と重なっており、現状個所には存在できない。

○ソイルマーク(図版1-2)

航空写真で気象条件によっては、ソイルマークで古墳の発見ができることがある。

雪が積もり、解け始めた時の一時期に192号墳の東隣、皿状遺構の南側に隣接して小規模な根切り溝が直径5.5mのドーナツ状に存在しているが、この溝の中心に石が存在していたものと考えられる。航空写真で観察するとこのドーナツ状溝はその外側にソイルマークで直径10mの黒い円形が存在しており、古墳(208号墳)であることが判明した。

また、図版1-2で見られる調査区外でも㊸のソイルマークを認識出来る。

今後もこのような事例が増える可能性がある。

○製鉄関連遺物

調査エリア内の62・192・205・207号墳で製鉄関連遺物が表面採集されている。さらに、調査区外の61号墳、59号墳でも同様な資料が表面採集されていることから、時期は特定できないものの製鉄関連遺物が東西80m×南北110mの広い範囲で確認できた。ただし、表面採集を実施できたエリアは限られていることから、さらに広い範囲で製鉄関連事業を行っていたことが考えられる。

調査地で石英の破片が3点程出土しているが、一部の表面に鉄が付いているものがあり(第41図-11)、石英の大石を金床石・荒割大石としていたこともわかった。

本地点では鉄滓の出土は無いが、「鉄滓の分布は、大字児玉の南東の一部や大字長沖の北側の一部に及ぶものであり、先に見た「桶川」と呼ばれる小河川によって開析された谷戸を中心とした区域に比較的濃密に分布していると思ふことができよう。」の他、「鋳物師集団が金屋に移住してきた記録があり、鋳物師と関連がある可能性がある。」とも報告している。(鈴木2005)

今回の製鉄炉壁片のように採集した資料を製鉄炉壁・鉄滓・流出滓・鉄塊、小鍛冶に伴う鍛冶椀型

滓・鍛造剥片・粒状鉄滓・塊状鉄滓など資料の内容の細分化で、製鉄精錬・小鍛冶・鋳物など製鉄の性格を小エリアで検証し、認識することができる。

○中世

本地点で、鍋・鉢の破片が出土しているが、59号墳からも鍋・鉢の出土があり、近くに中世の館跡などの遺構の存在も考えられる。

○縄文時代

土坑1基と縄文土器、打製石斧の出土があったが中期加曾利E式土器は、調査区の80m北側の59号墳から58号墳にかけて多量の土器表面採集があり、中期集落はこの地域を中心として存在することが考えられる。

※ 近隣で遺物の表面採集を行ったところ馬形埴輪を確認できたので報告する。(第42図1・2)

2点とも馬形埴輪の破片である。この破片については、長沖古墳群内の遺物ではあるが、古墳の通し番号で古墳位置が確定している地番以外のところからの表面採集品である。

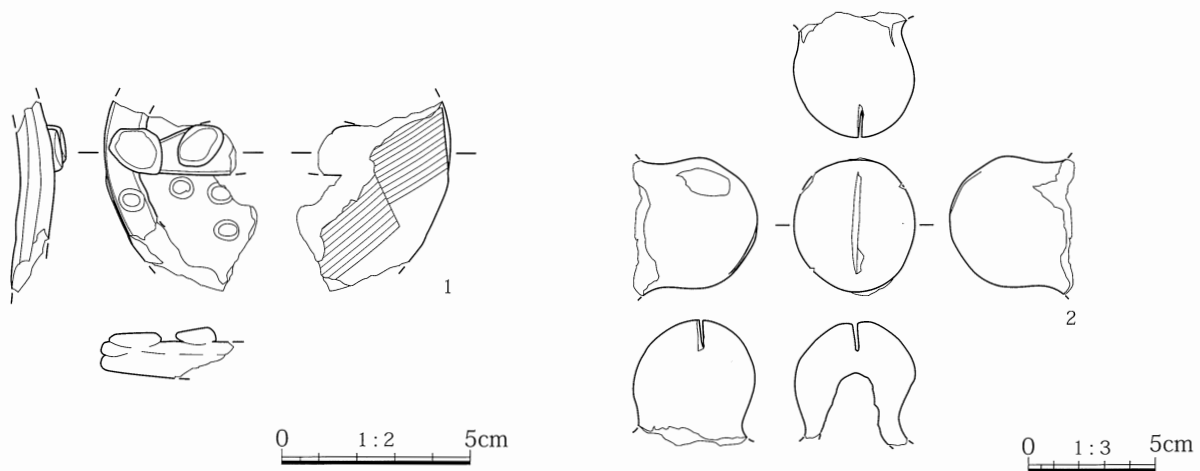
1は轡の鏡板部端部であり、馬の口部分に鏡板を張り付けたもので、口前部からは円筒形に仕上げられ鏡板の厚さは4mmと薄く、鏡板の縁厚さも4mmと薄く仕上げられている。鏡板の形は楕円形・f字形である。鏡板の縁に帯状の縁取りを施し、帯には鋳、鏡板面には鋳止めが認められる。また、縁取りの帯よりも幅広い弧に対して直交する帯に先の鋳より大きな鋳が連続して施されている。

焼成は良好。色調は橙色である。表面採集位置は本庄市児玉町児玉南1丁目14-1。

2は飾り馬の鈴が完形で剥落したものである。3つに壊れているが、直径は5cm、高さ5cm、先端には直線で長さ4cm、深さ1cm、幅1mmの切れ目が入られている。なお、鈴の作り方を断面で観察すれば、鈴に指を2.5cmほど差し込んで中空状況にしたものを張り付けている。

焼成は良好。色調は橙色である。表面採集位置は本庄市児玉町児玉南1丁目8-15。

(大塚 昌彦)



第42図 近隣表面採集遺物実測図

参考文献

- 菅谷浩之 1980『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書 第1集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第7次調査」『第17回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
- 大谷 徹 1999『長沖古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第234集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大熊季広ほか 2002『長沖古墳群Ⅲ』児玉町文化財調査報告書 第36集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2003『長沖古墳群Ⅳ』児玉町文化財調査報告書 第37集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2004『長沖古墳群Ⅴ』児玉町文化財調査報告書 第38集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦ほか 2006『長沖古墳群Ⅵ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第2集 本庄市教育委員会
- 鈴木徳雄ほか 2007『長沖古墳群Ⅶ』本庄市遺跡調査会報告書 第14集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦 2008『長沖古墳群Ⅷ』本庄市遺跡調査会報告書 第21集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 2011『長沖古墳群Ⅸ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第24集 本庄市教育委員会
- 鈴木徳雄ほか 2011『長沖古墳群Ⅹ』本庄市遺跡調査会報告書 第41集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦 2012『長沖古墳群Ⅺ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第27集 本庄市教育委員会
- 的野善行 2014『長沖古墳群Ⅻ 女池遺跡Ⅳ 西富田遺跡Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第36集 本庄市教育委員会
- 太田博之 2012『長沖古墳群ⅩⅢ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第39集 本庄市教育委員会
- 大塚昌彦 2014『長沖古墳群ⅩⅣ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第42集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 2016『長沖古墳群ⅩⅤ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第43集 本庄市教育委員会
- 阿部正功・大野延太郎・鳥居龍蔵 1895「秩父地方に於ける人類學的旅行」『東京人類學會雜誌』第10巻 第110號 東京人類學會
- 坂本和俊ほか 1990『秋山古墳群 - 庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査 - 』児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会 児玉町史資料調査報告 古代 第2集
- 本庄高等学校考古学部 1975「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」『いぶき』8・9合併号
- 県立さきたま資料館 1994『埼玉県古墳分布調査報告書』埼玉県教育委員会
- 利根川章彦 1994「六 東国の群集墳」『古代を考える 東国と大和王権』吉川弘文館
- 増田逸朗 1995「北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相」『調査研究報告』第8号 県立さきたま資料館
- 増田逸朗 1996「模様積石室小考」『調査研究報告』第9号 県立さきたま資料館
- 杉崎茂樹 1989「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』87号 早稲田大学考古学会
- 塩野 博 1999「埼玉の古墳—その発掘と研究の歴史(その3)—」『埼玉考古』第34号
- 塩野 博 2004『埼玉の古墳 児玉』さきたま出版会
- 鈴木徳雄 2005『高柳原遺跡』第Ⅴ章 児玉丘陵における地域社会の形成 —金屋地区における土地利用形態の遷移— 児玉町文化財調査報告書第39集 児玉町教育委員会
- 太田博之 2007『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 本庄市教育委員会
- 大塚昌彦 2016『下郷古墳群 71号墳』東吾妻町教育委員会 東吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 坂口 一 1993「火山噴火の年代と季節の推定法」新井房夫編 『火山灰考古学』古今書院,151-172.
- 早川由紀夫・中村賢太郎他 2008「ウイグルマッチング法による榛名渋川噴火の年代決定(再検討)」『日本第四紀学会講演要旨集』38 日本第四紀学会
- 早川由紀夫・中村賢太郎・藤根 久・伊藤 茂・廣田正史・小林紘一,2015「榛名山で古墳時代に起こった渋川噴火の理学的年代決定」『群馬大学教育学部紀要 自然科学編』群馬大学 63.35-39.

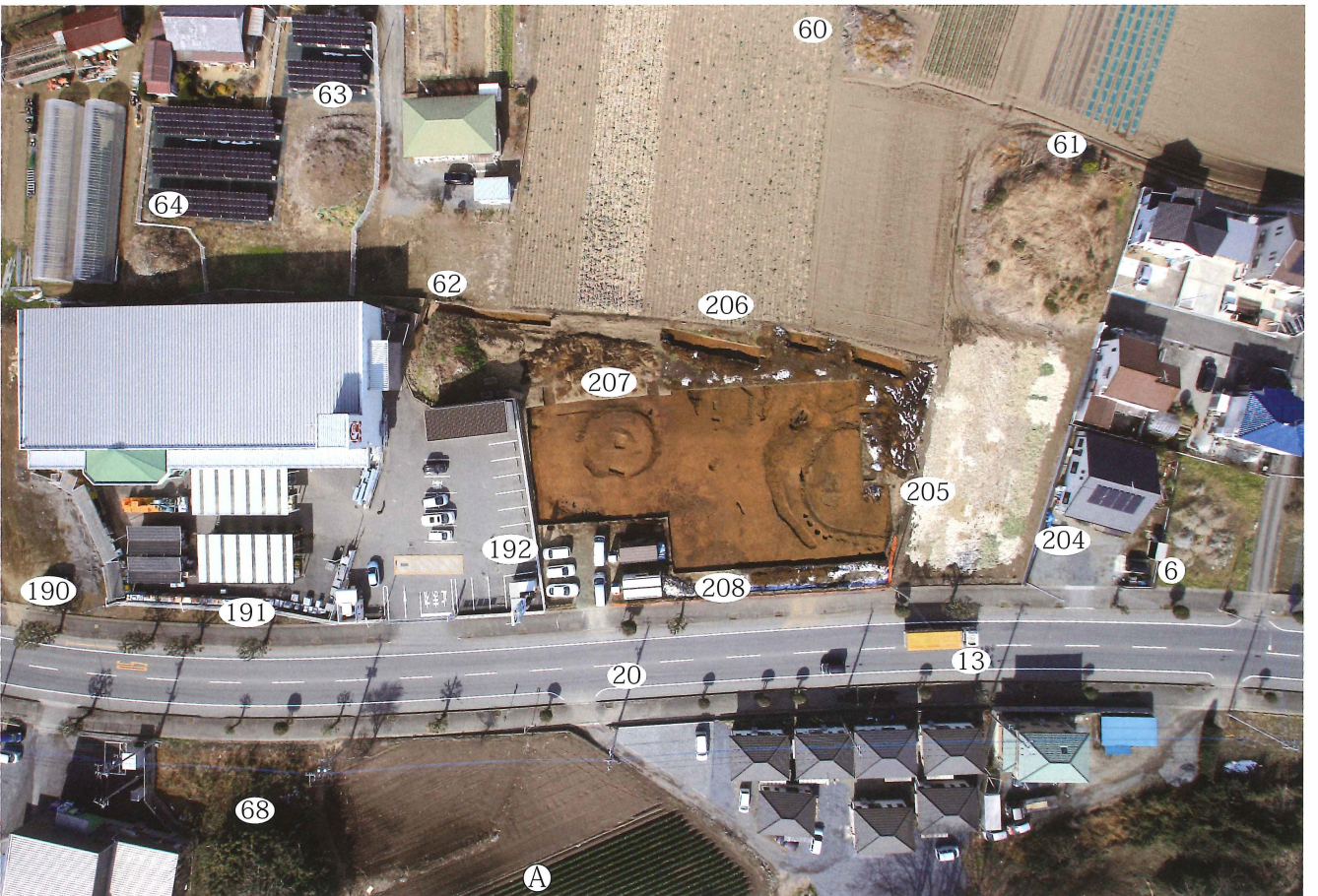
写真図版

写真図版目次

- 図版 1-1 長沖古墳群久保地区 E 地点遺跡全景
(榛名山・赤城山・児玉町)
2 久保地区 E 地点全景 (調査区合成写真)
- 図版 2 昭和 24 年米軍撮影航空写真
- 図版 3 昭和 24 年米軍撮影航空写真拡大
- 図版 4-1 62・192・207 号墳調査区西側全景
2 62 号墳現状墳丘 (東から)
3 62 号墳北トレンチ (北西コーナー)
4 62 号墳北トレンチ
5 62 号墳南東周溝土層断面 (浅間 B 軽石)
6 62 号墳南東周溝
7 62 号墳東周溝
8 62 号墳南東周溝土層断面 (浅間 B 軽石)
- 図版 5-1 192 号墳出土遺物 (北東周溝)
2 192 号墳遺物出土状況
3 192 号墳浅間 B 軽石層の上下に埴輪出土
4 192 号墳周溝内遺物出土状況
5 192 号墳東周溝
6 192 号墳周溝内浅間 B 軽石層
7 192 号墳周溝内火山灰サンプリング
8 192 号墳周溝内火山灰土壌サンプリング
- 図版 6-1 205・206 号墳調査区東側全景 (北から)
2 205・206 号墳全景
3 205 号墳周溝確認
4 205 号墳全景
5 205 号墳完掘全景
6 205 号墳周溝貼り壁
7 205 号墳周溝貼り床
8 205 号墳周溝北溝
- 図版 7-1 205 号墳周溝掘り方東溝
2 205 号墳掘り方全景 (西から)
3 205 号墳掘り方全景 (南から)
4 205 号墳周溝内浅間 B 軽石層
5 205 号墳周溝内浅間 B 軽石層 (レンズ状堆積)
6 205 号墳周溝内浅間 B 軽石層 (拡大)
7 周溝内遺物出土状況
8 周溝内深穴完掘 (北西から)
- 図版 8-1 206 号墳全景
2 205・206 号墳
3 206 号墳全景 (北東から)
4 206 号墳全景 (南から)
5 206 号墳東周溝
6 206 号墳 (北西から)
7 206 号墳 (北東から)
8 206 号墳周溝土層断面 (浅間 B 軽石層)
- 図版 9-1 西側遺構確認
2 192・207 号墳全景
3 207 号墳完掘全景 (南から)
4 207 号墳周溝貼り床
5 207 号墳周溝断面
6 207 号墳西周溝出土土器
7 207 号墳東周溝掘り方
8 207 号墳周溝掘り方完掘 (北東から)
- 図版 10-1 208 号墳
2 弧状遺構確認
3 S K 25
4 S K 25 土層断面
5 発掘調査風景
6 皿状遺構全景
7 皿状遺構土層断面
8 皿状遺構植物根跡
- 図版 11-1 S K 24 縄文
2 旧石器確認調査
3 ローム土層堆積状況
4 土坑群 (南から)
5 土坑群土層堆積層
6 土坑群 (南東から)
7 土坑群 (北から)
- 図版 12 S K 1 / S K 1 土層断面 / S K 2・3 /
S K 2 土層断面 / S K 4 / S K 4 土層断面 /
S K 5・6 / S K 5 土層断面 / S K 6 土層断面 /
S K 7・8・9 / S K 10 / S K 11・12 土層断面 /
S K 13 / S K 14 / S K 15 / S K 16 / S K 17 /
S K 18 / S K 19 土層断面 / S K 20 土層断面 /
S K 23 / S K 26 / S K 27 / S K 28-1 /
S K 28-2 / S K 29 / S K 29 / 風倒木痕
- 図版 13 62 号墳・192 号墳出土遺物
- 図版 14 192 号墳・205 号墳出土遺物
- 図版 15 206 号墳・207 号墳・S K 23・
遺構外 出土遺物 (製鉄炉壁他)
- 図版 16 S K 24・遺構外出土遺物 (縄文他)・
近隣表面採集遺物



1. 長沖古墳群久保地区E地点遺跡全景（榛名山・赤城山・児玉町）



2. 久保地区E地点全景（調査区合成写真） 古墳位置及び畑に黒い円形カ所①（ソイルマークか）



昭和24年米軍撮影航空写真

(国土地理院所有 米軍撮影 昭和24年(1949)1月5日 整理番号 USA コース番号 R511-No2 写真番号 44)



昭和 24 年米軍撮影航空写真拡大

(国土地理院所有 米軍撮影 昭和 24 年 (1949) 1 月 5 日 整理番号 USA コース番号 R511-No2 写真番号 44)

図版 4



1. 62・192・207号墳調査区西側全景



2. 62号墳現状墳丘（東から）



3. 62号墳北トレンチ（北西コーナー）



4. 62号墳北トレンチ



5. 62号墳南東周溝土層断面（浅間B軽石）



6. 62号墳南東周溝



7. 62号墳東周溝



8. 62号墳南東周溝土層断面（浅間B軽石）



1. 192号墳出土遺物(北東周溝)



2. 192号墳遺物出土状況



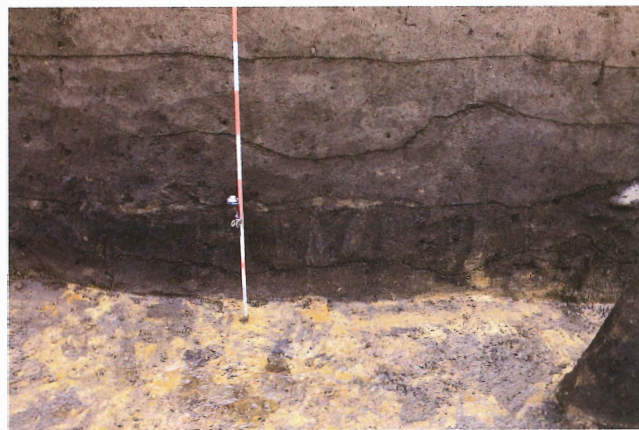
3. 192号墳浅間B軽石層の上下に埴輪出土



4. 192号墳周溝内遺物出土状況



5. 192号墳東周溝



6. 192号墳周溝内浅間B軽石層



7. 192号墳周溝内火山灰サンプリング



8. 192号墳周溝内火山灰土壌サンプリング

図版 6



1. 205・206号墳調査区東側全景（北から）



2. 205・206号墳全景



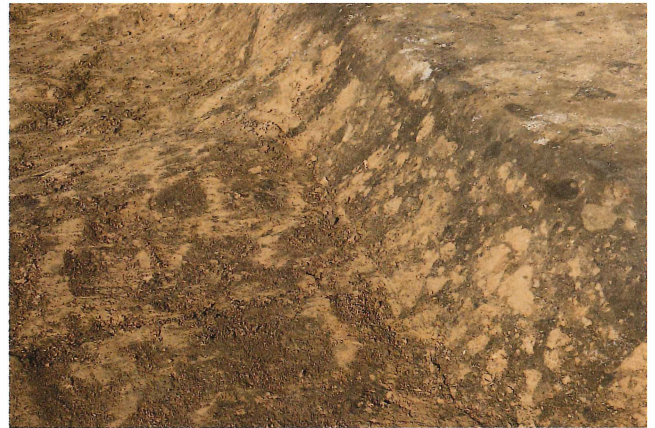
3. 205号墳周溝確認



4. 205号墳全景



5. 205号墳完掘全景



6. 205号墳周溝貼り壁



7. 205号墳周溝貼り床



8. 205号墳周溝北溝



1. 205号墳周溝掘り方東溝



2. 205号墳掘り方全景（西から）



3. 205号墳掘り方全景（南から）



4. 205号墳周溝内浅間B軽石層



5. 205号墳周溝内浅間B軽石層（レンズ状堆積）



6. 205号墳周溝内浅間B軽石層（拡大）



7. 周溝内遺物出土状況



8. 周溝内深穴完掘（北西から）

図版 8



1. 206号墳全景



2. 205・206号墳



3. 206号墳全景 (北東から)



4. 206号墳全景 (南から)



5. 206号墳東周溝



6. 206号墳 (北西から)



7. 206号墳 (北東から)



8. 206号墳周溝土層断面 (浅間B軽石層)



1. 西側遺構確認



2. 192・207号墳全景



3. 207号墳完掘全景（南から）



4. 207号墳周溝貼り床



5. 207号墳周溝断面



6. 207号墳西周溝出土土器



7. 207号墳東周溝掘り方



8. 207号墳周溝掘り方完掘（北東から）

図版 10



1. 208号墳



2. 弧状遺構確認



3. S K 25



4. S K 25 土層断面



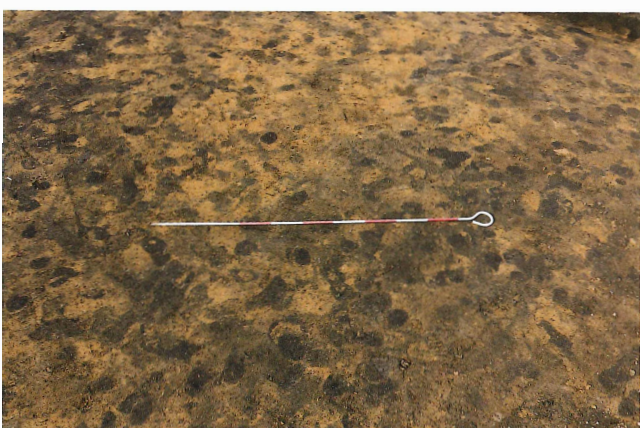
5. 発掘調査風景



6. 皿状遺構全景



7. 皿状遺構土層断面



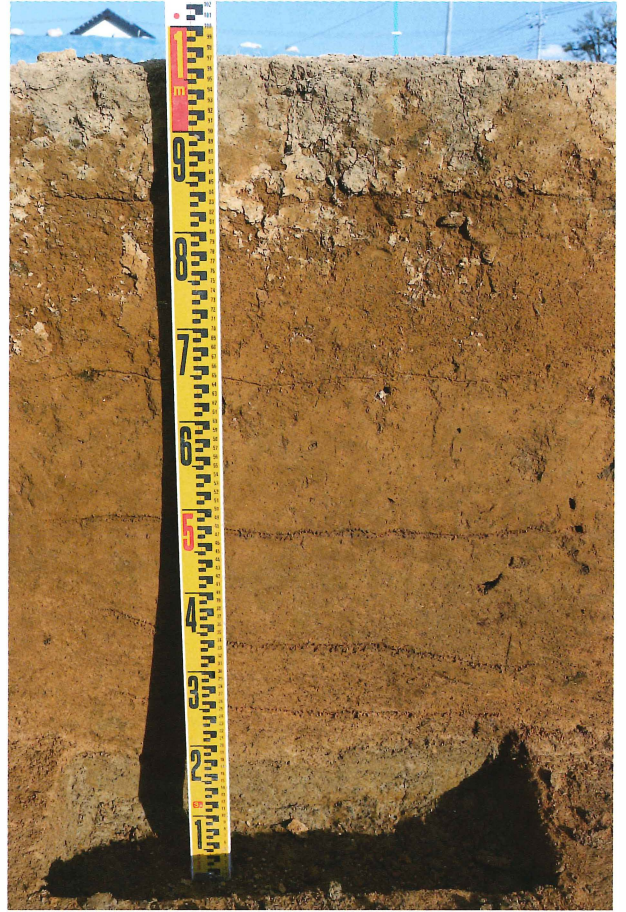
8. 皿状遺構植物根跡



1. S K 24 縄文



2. 旧石器確認調査



3. ローム土層堆積状況



4. 土坑群 (南から)



5. 土坑群土層堆積層

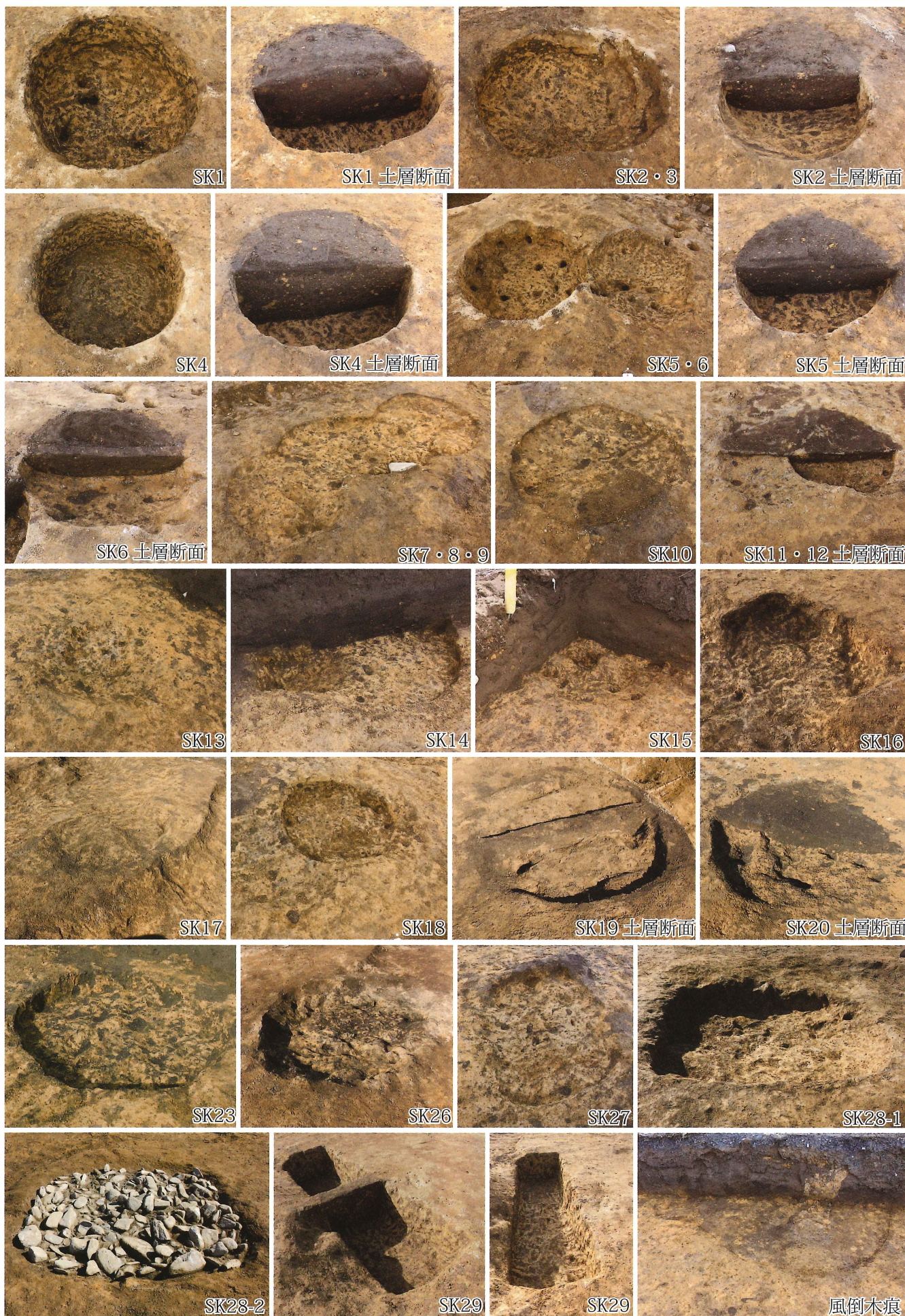


6. 土坑群 (南東から)



7. 土坑群 (北から)

图版 12



62 号墳



192 号墳

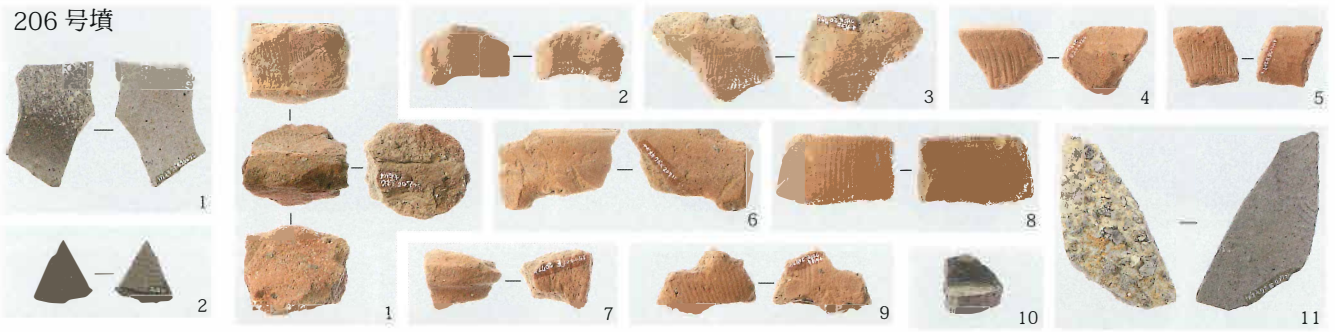


图版 14

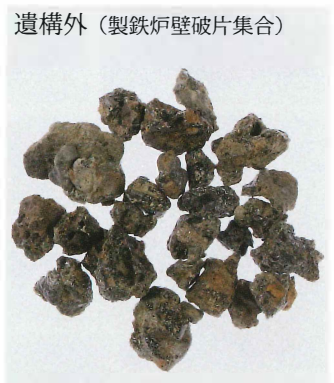
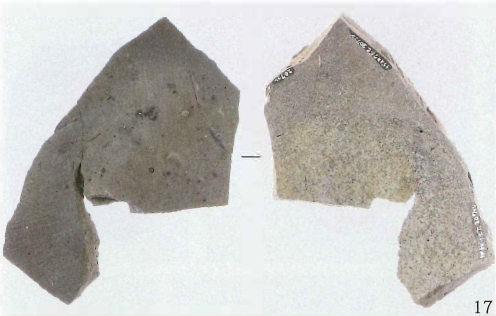
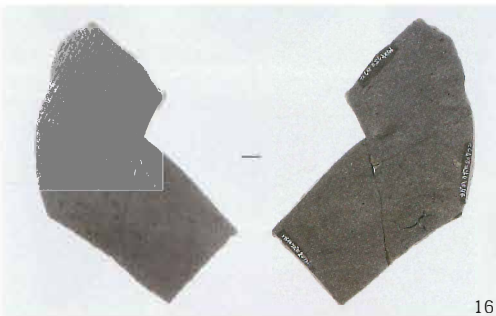
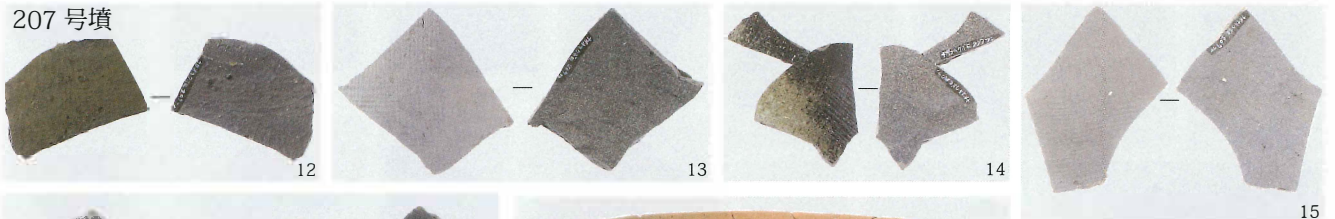


192 号墳・205 号墳出土遺物

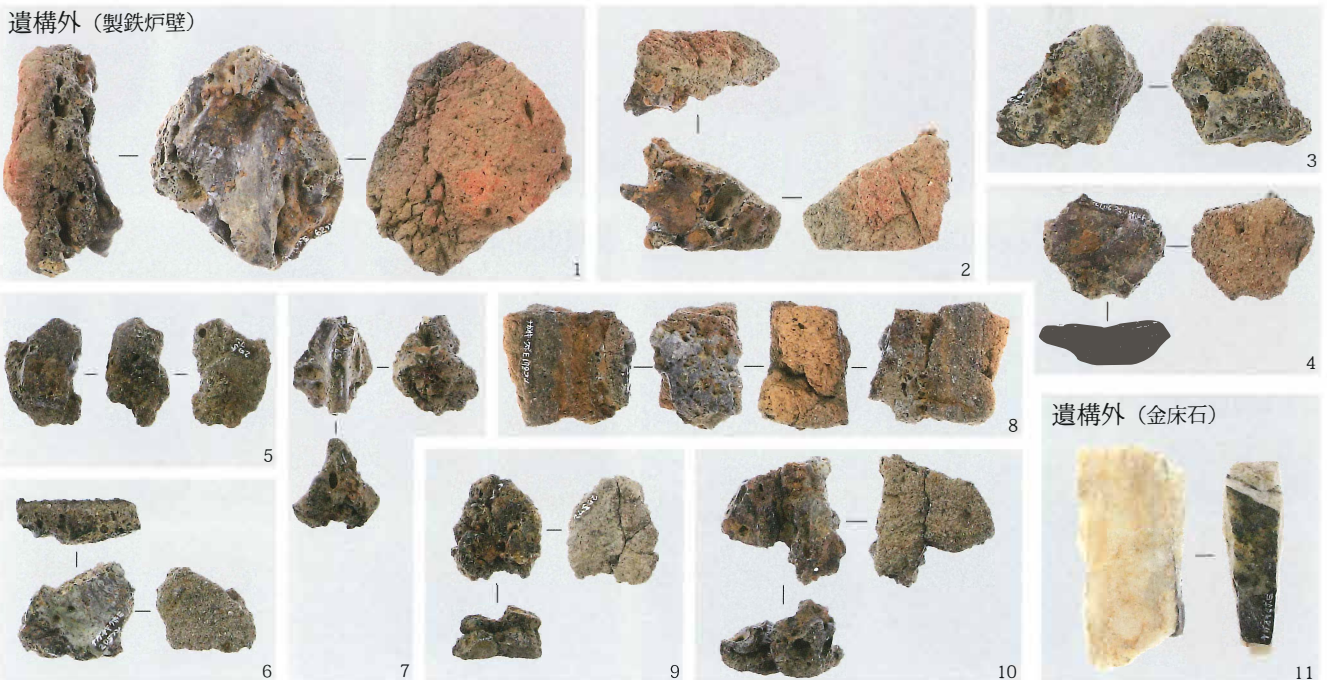
206号墳



207号墳



遺構外 (製鉄炉壁)

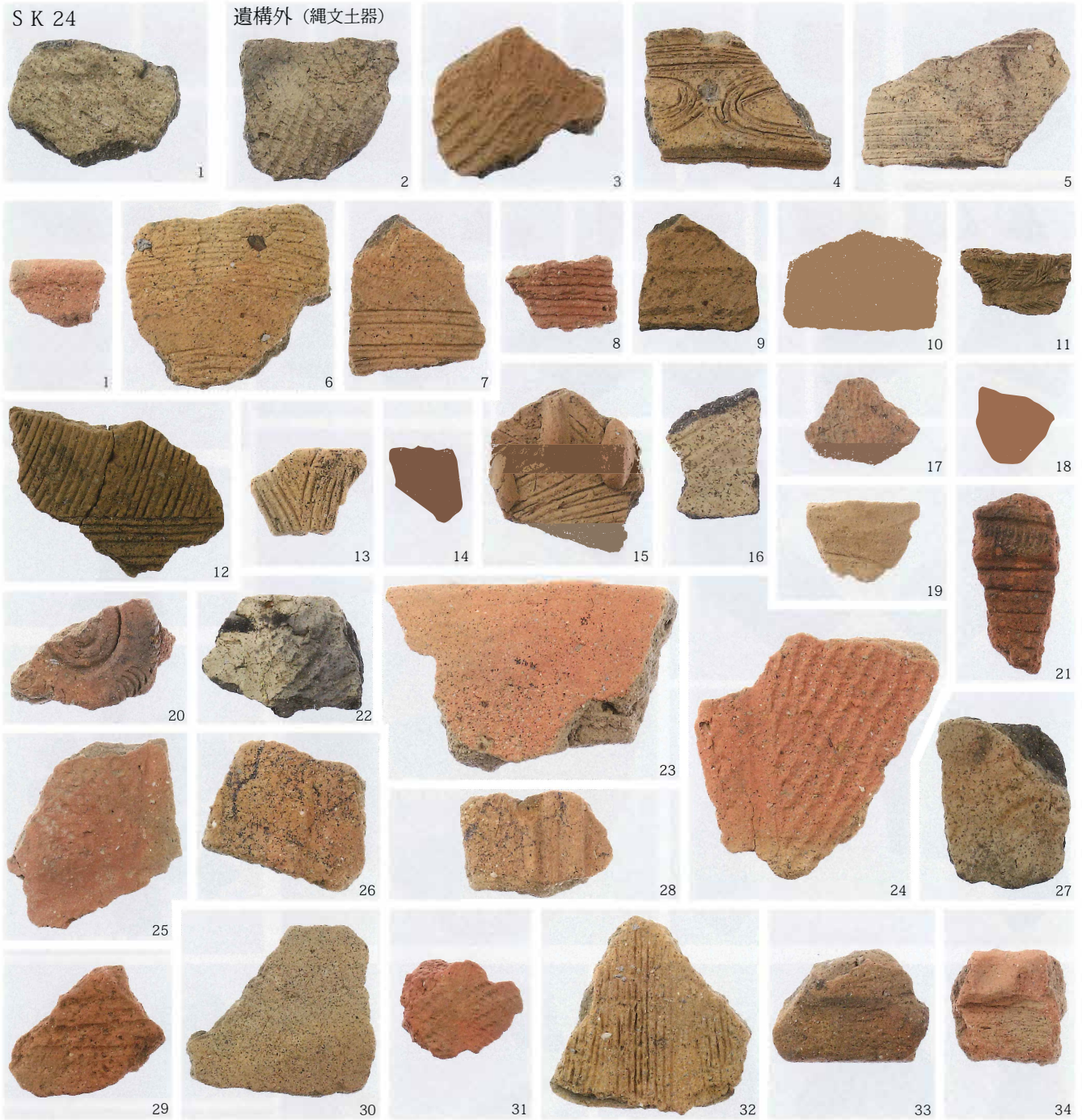


206号墳・207号墳・S K 23・遺構外出土遺物 (製鉄炉壁他)

図版 16

S K 24

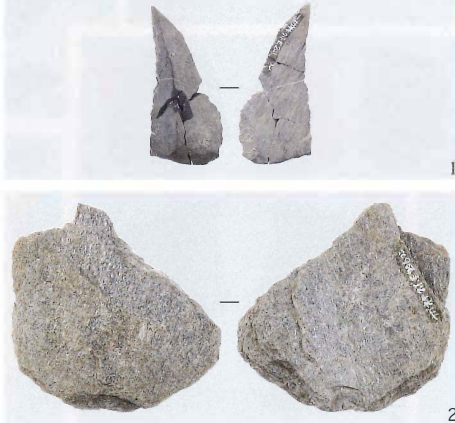
遺構外（縄文土器）



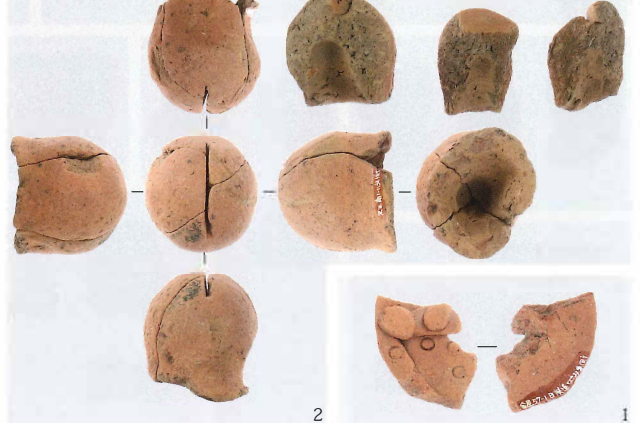
遺構外（粘土塊）



遺構外（縄文石器）



近隣表面採集



S K 24・遺構外出土遺物（縄文他）・近隣表面採集遺物

報告書抄録

ふりがな	ながおきこふんぐん 16 -くぼちく Eちてん-ながおき 62・192・205・206・207・208 とうふん							
書名	長沖古墳群XVI -久保地区E地点- 長沖 62・192・205・206・207・208 号墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	大塚 昌彦							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番地 3 号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	2017年(平成29年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおきこふんぐん 長沖古墳群 くぼちく E地点 久保地区E地点	さいたまけんほんじょうしこだまちょう 埼玉県本庄市児玉町 ながおきあさくぼほんち 長沖字久保 290 番地 ほか 1 他	112119	54-300	36° 10' 56.5"	139° 07' 29.9"	2016.1.12 ～ 2016.2.19	1,382.92	消防署建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長沖古墳群 久保地区 E地点	集落	縄文	土坑 1基	縄文時代早期～ 中期土器 打製石斧				
	古墳群	古墳	古墳 6基 皿状遺構 1基 土坑 1基	馬形・人物・鞍形・ 鬚形・円筒埴輪 須恵器甕 土師器坏・甕	古墳 6 基と皿状遺構			
		その他	土坑 27基 遺構外	なし 製鉄炉壁 他	時期不明			

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第50集

長沖古墳群 XVI

—久保地区E地点—

長沖 62・192・205・206・207・208号墳

平成29年3月31日 印刷

平成29年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社